

新しい家庭科

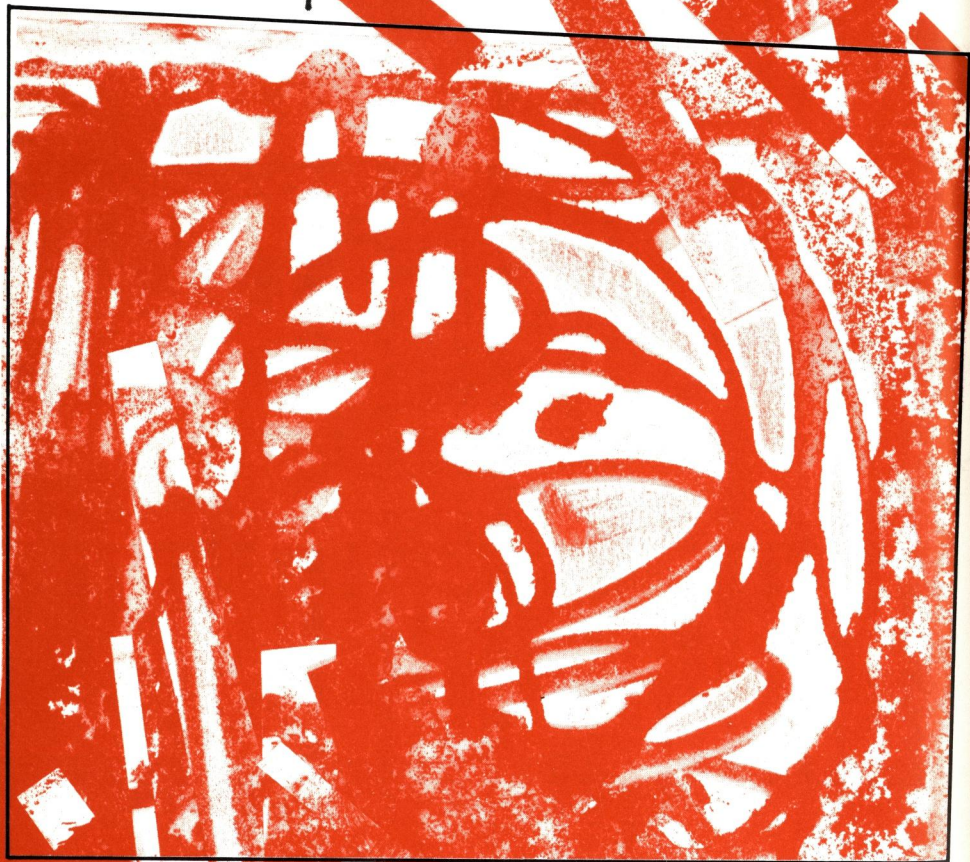
**ウ**

1984年

逐次刊行物

昭 58.12.20

立婦人教育  
情報図書室



ジョージ・オーウェルは、一九四八年に小説『一九八四年』を書いた。邦訳は、五〇年に出て、ベスト・セラーとなった。

そのころ、それは社会主義国、とくにソヴィエト批判の書として受けとられ、賛否の渦がまきおこった。しかしオーウェルはイギリス労働党の支持者で、決して反動的あるいは保守的思想の持主ではなかった。

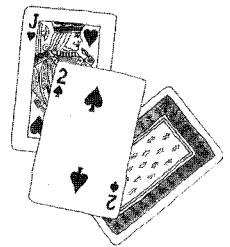
『一九八四年』が、まさに一九八四年の現在、多くの人たちに好意的に読まれるようになったというこの意味は大きい。オーウェルの目は、資本主義体制とか社会主義体制とかをこえて、人類の未来に遠くどいているのである。

とくに核超大国を支配している民衆へ管理の進行は、おどろくほどである。核兵器は人類の生命の大量殺人につながるだけではない。核大国は、必然的に、民衆の精神の自由を圧殺するようになる。そして民衆も無自覚に大国の論理に盲従するようになる。

ソヴィエトの民衆は、アフガニスタン問題に無関心である。アメリカの国民は、グレナダ侵攻を熱心に支持している。核の傘にはいると宣言した日本の文部省は、丸木夫妻の「原爆の図」を教科書から追放した。『一九八四年』が見事に実現していると言える。

私たちは、ねむらせられてはならない。『一九八四年』的状况に対して、私たちは自立的でなければならぬ。

(京都精華大学教授)



# 野の花をたずねて おひしば



道に生えているオヒシバは、誰でも知っていて、気にも止めず、何の哀れも覚えないで、それが当然のことのようにふんづけて通ります。そんな仕打ちなど少しも感じぬらしく、白茶けた穂を昂然と持ち上げて生き続けるしたたかさに、たいいてい根負けして、掃除好きなお婆さんも、この草だけは取らずに箒目をつけると、さっさと引き上げてしまいます。

ハイヒールの行き交う華やかな街でさえ、街路樹の根元にぬっと顔を持ち上げ、誰彼なく監視しているのを見かけますが、青空駐車場では、「契約者以外、駐車厳禁」の立札を捧げ持つ者も現れています。

この草を引き抜こうとすると、びんと張った葉が意外な抵抗をみせ、葉の先だけ切れたり、根もとが切れて、しっかりと大地を握った根は、トカゲのシッポのように、茎をはなして生き残ります。こんな草に、昔の人は、力草とか、相撲草とか、角力取草と名付けたようです。

集団で生えているところは、何となく野暮ったくて雑然としているように見えるのですが、秋アカネの飛び交う土手に、細長い花穂を開き、逆光を受けて輝いている姿を見ると、ああ、この草にも風情という言葉で表現できる瞬間があったのだと、目を細めてしまうのです。

(大室君子)



〈巻頭言〉『一九八四年』と一九八四年……………日高 六郎

\*一九八四年\*

〈'84年ことし私は〉

事実を通して真実に迫る……………

「下北半島・関根浜」……………

障害者自立のために……………

少年・少女たちにストリートなメッセージを……………

やっぱりしつこく運動を！……………

「明るい大衆」の出現とその未来……………

私の、あなたの虹色の風船……………

自由の森学園の誕生にかける希い……………

学校を超える思想としての柳田教育学……………

からだ・こころを生かす教育を考えると、……………

いま、何から始めたらよいか……………

家族・婦人問題を研究しているものの一人として……………

アメリカの少女たちと……………

〈'84年をこう見る〉

岐路の選択……………

84文化のひとつと……………

〈'84年、教師自らが創る授業を〉

富田女子高校の試み……………

\*新しい家庭科を創るために\*

小学校では、二年間の食べ物作り……………

林 郁

山上徹二郎

尾藤 操

保坂 展人

梶谷 典子

田中喜美子

三井マリ子

遠藤 豊

小田 富英

柴崎 和恵

渋谷 敦司

佐々木 文

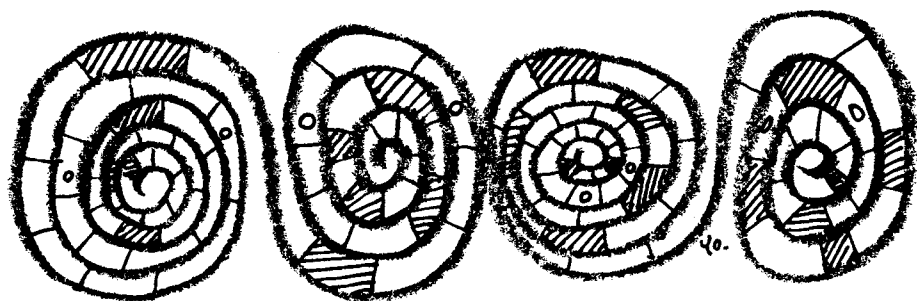
駒野 陽子

松田 博公

田中 良

福田三津夫

43 36 32 28 26 24 22 20 18 16 14 12 10 8 6 4



中学校では「米の学習」その2……………大森 嘉子  
高等学校では「保育」学習と「性」の問題……………49

入江一恵、西本和代、町田道子

# \* 発言 \*

教師として……………古田 励子  
市民として……………辻 とし子  
地下ピラミッドに位置を占めて思う……………66  
私の仕事……………杉本 千代  
……………71

# \* 連載 \*

野の花をたずねて

おひしば……………大室 君子

1

視点

不条理に怒れ……………長谷川 孝

62

露通信

ある典型……………武田 秀夫

64

ねえ、きいて

バイクへの気持ちは誰も抑えられない……………宮 淑子

61

つがるいろはがらた

②かげむしろ そだち……………藤田 健次

74

銀輪のうた

一人でお風呂に入れた……………栗原 実抄

75

Weの読書室

村々からのメッセージ……………横山 雅子

76

団地の風景

終の栖……………遠藤 和枝

77

わたしのシネマガイド

『積木くずし』……………半田 たつ子

78

テレビ残像

人権無視の学校教育……………野村 康子

78

○波 言わねばならぬこと 80

○ひと 35

目次イラスト 馬場洋子 本文イラスト 中野敏子／野中浩一／半田たつ子

表紙デザイン 加藤由美子

## 事実を通して真実に迫る

林　　郁

ノンフィクションを書くのは、私にはひどく神経の疲れる作業だ。その理由は単純、事実を書くのだからの一言につきる。事実を通して真実に迫るのだから、といつてもいい。いつ、どこで、だれが、なにを、どうしたということを書くのならば、文体は別としてさしたる困難はない。が、真実は、これだけでは明らかにならない。その誰かが、なぜそれをしたのか、それがどういう社会的・政治的・経済的・文化的なりの意味をもつか、その誰かの内側はどうかなどが「真実」には必要である。その真実に迫るためには、具体的な事実を広く深く知る必要があるのだが、それでもまだ足りないと思う。

私は学者ではなく、文学志向の人間。私の文学の対象は人間。つまり私が私の筆で伝えねばならない真実とは、人々の物心両面の体験、無意識を含む内面である。想像を絶する体験をした他者の、複雑な内面をノンフィクションで追うのは疲れる作業であった。

日本軍の謀略によってひきおこされた満州事変と、それに続く十五年戦争の傷痕、そして今なお続く満州後遺症を、私は『満州・そ

の幻の国ゆえに―中国残留妻、孤児の記録』（筑摩書房刊）という実録にまとめた。

この作品では、主に五人の女性、その家族や周辺の人々と時代を描いたが、その土台として私がお世話にならなかったのは、百余人の中国帰国者や満州引揚者である。これは満州体験のない私にはどうしても必要なプロセスであった。稀少例は書きたくなかった。稀少例は「満州」にかかわる事実の一端ではあっても、その全体像を誤解させる危険がある。

私は既成の資料や手記もたくさん読んだ。それで基礎知識はたくさん仕入れることはできたが、それが「満州」の人間の真実につながるわけではない。せいぜい舞台の書き割りである。だから私は日本各地や中国東北部（旧満州）をじかに訪れ、話をいやというほど聞いてから、典型的当事者を選び、その五人の物心両面の体験を丹念に追った。選んだというより、どうみても効率の悪い取材や関係者とのつき合いの過程で、因縁の糸に導かれるようにして彼女たちは私の前に立ち現れたのだった。暗中模索の暗が消えたら、何ごとかを全心身で示す典型的人物の彼女たちが私の身近にいたという感じでもある。

身近な人、たとえば母を書いたときも、未知の人のように客から出発し（予断を排し）、周辺をまわったり、背景を調べたりのプロセスのあと、ふっと母の人物像が語りかけてきたことがあった。そのとき、母との新たな出会いに感動し、労多く利少ない聞き書きをさらに続ける決意をしたものだ。ともかく私は効率の悪い見聞きを経て、これで書けると心身がこたえたら、あとは一気呵成、ぐんぐん筆が進む。灰色の座業もなんのその、集中、夢中である。

さて、今、一九八四年の次の作品にとりかかった。一本は長編書きおろし小説(想像力の翼をひろげる世界)、もう一本はノンフィクションで、これは文明の問題、エコロジカルな問題を身近なことから振りおこす作業である。誰の目にもみえる事實は、失われゆく自然や現代病だが、その構造に迫るのはなかなか難しい。管理社会の中核に無縁な私は肝心な事実がつかみにくく、身辺だけみているとだまされる危険がある。

私はこれまで無名で、名刺が役立たぬフリーであることを逆手にとってきた。マスコミの取材だとコチコチになる人や、とりつくろう人も、私には飾らず、話しやすいらしい。私をこわがる人はまずいない。大抵すぐ家に泊め、ありあわせの食事を恵んでくださる。おかげで私は、床を並べ明け方まで話をきいたり台所や畑などで何気なく呟く言葉を耳にしたり、つき合いの中で、裏側・内側もみせてもらうことができた。「満州」のことでは、虐殺、掠奪、強姦、子殺し、親殺しといった極限での生地獄を、嗚咽、絶句、うめきなどで伝えるから、私ももらい泣きし、夜中にうなされ、苦悩や嘆きを聞きすぎて疲れた。さらに孤児の世話にも疲れたが、その重さによって真実を膚で感じることができた。

「満州」の構造は史実としてかなり解明されており、今回の重点ではなかった。だが、只今のホットなエコロジー問題の構造は見えにくい。情報の大洪水。真実度、正確度、重要度をはかる尺度のないまま、私たちは映像や活字の大波にもまれ、つくられたイメージにのせられる。こういう混沌とした状況のなかで、人に話をきくと、思い込みあり、虚言あり、ニセ情報あり、製薬会社の拒絶もあった。私など小者には権力中核からの資料提供や誘いはないから、

従ってオブリゲーションもないかわり、真相は霧の中である。現代文明は薬害や汚染など身近に見える事実から迫るだけでは足りない

と私は思っているのだ、前途多難である。

大韓機事件の真相がわからぬように、肝心なことが知られぬ事ごととはたくさんある。それを恐ろしいと思わず、一過性に流されてゆく大衆の哀しさ。哀しい民衆の一人である私は、そういう泡ぶく大衆にのみ込まれぬよう心し、疑いの目をしかと見開き続けねばと思っている。私は弱く矛盾だらけ。この哀しさ、おかしさに溺れま

いと、見えない事実、つかみにくい真実にむかって想像力を働かせている。みえない事には想像力で迫るしかないのだ。想像力の働きは、本能的直感だけでなく、知力(体験しないこと、他者の体験を考え、察知・理解する知性)がものをいう。人は自分のレベルしか他者がみえないから、まずは自分を鍛えねばと思う。

そう心して、省みると、私は近作の「満州」で、ほんとうに人々の真実を知り、描きえたのかを疑う。私の蓄積した事實は、真実を明らかにするにはあまりに不十分であったと思う。この疑問、不満は、私の業(わざ)のようなもので、死ぬまで続くかもしれない。

情報化社会とやりに身をゆだね、断片的事実、有害無益な情報の洪水にみずから流されることで体裁を保つ仕事はしたくないと改めて思う。一九八四年は最終的オルタナティブの時、「最終選択年」と感ずる。これさえ見れば、読めば、世事万事わかります的な情報には背をむけ、眉につばをぬりたくり、何がほんとうかに迫りたい。わが身を減ばさぬよう、注文される仕事も選んでゆきたい。眉つば中の私なので、人にも私を安易に信じてもらいたくないと思う。

(著述業)

## 「下北半島・関根浜」

山上徹二郎

「下北半島・関根浜」の映画制作の旅は、いささか慌しく始まった。この映画の企画者・松橋勇蔵（彼は関根浜の出身である）からの急報は、関根浜の漁業権放棄の値段（補償金額）が、五月二〇日の交渉で決まるかもしれない、というものだった。提示される金額によつては、漁業権放棄を決定的なものにするかもしれない。五月十七日、私たちは映画の撮影機材とともに二台の車に分乗し、青森県むつ市浜関根へ向かった。

北の海辺の、見知らぬ土地への旅は、いくらか私たちを緊張させた。途中の道脇の、山膚に点在する紫色の桐の花と、下北の原野に広がる黄色の菜の花のとり合わせが、北の遅い春に印象的だった。

五月二〇日は、青森県によつて浅虫温泉の観光ホテルが、貸し切られていた。県知事による仲介とは、泊まりがけで漁民を説得することであった。取材を終え、早々に引き揚げるマスコミ関係者を尻目に、私たちは、なかば密室化したホテルのロビーに陣取り、映画として取えてその場に居続けることを決めた。この映画の、実質的なクランク・インであった。

この日の交渉は決裂し、漁民たちの幾人かは、席を蹴って深夜関根浜へ帰ったのだった。しかし、その後再度の補償交渉が持たれ、予め用意された幅での、補償金の吊り上げによつて、漁民たちは押し込められ、漁業権放棄を問う臨時漁協総会が開かれることになる。その総会も、一度は流会となるが、二回目の総会前日には、県側による反対派漁民の個別切り崩しが、夜の関根浜を走り、八月七日、ついに正組合員二六〇名足らずの関根浜漁協は、三票差で漁業権放棄を決めるに至った。

この間、幾らかの曲折はあったものの、あまりにも簡単に、海は売られてしまった。十八億円という値段だった。数ヶ月の間、補償金に蹂躪された関根浜の漁村は、目に見えない漁民たちの痛みを深く残して、再び漁村の日常にもどったかに見える。

漁業権とは、一体いかなるものか。何びとも、自分の住む地先の海に働き、また、遊ぶ権利を有している。漁民が、イコール海の所有者ではない。しかし、誰よりも海を知り、よく海と付き合っているのも、また漁民である。漁業権が売られ、漁民という最良の管理者を失った海の荒み方を見れば、一目瞭然であるう。

にもかかわらず、海を売るひとり一票の権利も、同様に、漁民が持っている。あまりに、逆説にすぎはしまいか。真の意味で、漁業権とは、海と共に生きることを選んだ漁民の意志を前提とするものであり、その軽重は、海への愛憎の深さによつて計られるべきものであるう。

工事の着工を間近にひかえ、現在「むつ」が係留されている大湊港の、対岸の岸壁には、埋め立て用の二万個のテトラポットが、所狭しと並べられている。その風景は、やがて関根浜の海が埋め殺さ



れる、その壮絶な瞬間を想像させるに、充分な喚起力を持っている。全く迂闊にも、このように目に見える形で、モノが存在して初めて、今、目の前で起きている「事件」の意味を、実感することが出来るのだ。

春のアメマスやヤリイカ、夏のコンブ、そして、秋から冬場にかけてのサケ漁と、年間を通して、豊かな漁場である現役の海は、計り知れない打撃を受けるだろう。「むつ」母港建設のために売られた部分が、たった四％であり、九六％の海が関根浜に残されているとしても、間違いなく地先の海は、その全貌を変えられてしまうだろう。

しかも、放射能汚染の危険性は、常に魚価の暴落に直結し、漁民を脅かし続けるに違いない。海を売る側にまわった人々も、反対を通した人々も、関根浜に生きる人々には皆同様に、大きな不安がのしかかっているのだ。

この地は、国益国策という名の強権が、最も横暴に振舞い続けているところかもしれない。思えば、下北半島とは、国家にとって、まさに僻遠の地なのだ。

三沢の米軍基地、大湊の海上自衛隊、猿ヶ森、天ヶ森の射爆場、六ヶ所村の巨大開発と石油備蓄基地、白糠の原発予定地、大間の新型転換炉ATRの建設予定地、そして、関根浜の「原子力専用港」等々、この下北半島には、軍事と原子力に関する、あらかたのものがそろっている。

最近、自民党内部から聞こえてくる、「むつ」廃船論の陰には、関根浜に核廃棄物の貯蔵施設を、また将来的には核燃料再処理工場を作るという計画も囁かれている。関根浜では、海と同様に陸の土地

買収が、事業団によって密やかに進められている事実もあるのだ。

このように書いてくると、私たちは、下北半島・関根浜に關して、いかほども楽天的ではあり得ないかに見える。確かに、この数ヶ月の間にも、海買土地買いの現実は一進一退、村は深く沈黙させられている。

しかし、堅い意志で反対し続けている漁民たちがいる。更には、一部海を放棄したにせよ、これからも漁業を続けていく意志は、いささかも揺るがしてはいない漁民たちの、真実がある。手にした補償金も、やはり海のことのために使ってゆくだろう、したたかな漁民たちの姿を確信することができる。

関根浜の、村の歴史は若い。百年に満たないこの村の歴史は、他所からの流民たちによって始められた。下北に古くからあった他の村のように、守るべき、牢固とした共同体の呪縛といったものは、関根浜の村のイメージにはない。村としての、成り立ちの若さゆえ、「むつ」問題での動揺も、早かったのかもしれない。しかし、同時にまた、若さゆえ新しい村としての再生の可能性を、この浜で生き、海と共に在り続けるだろう漁民たちの中に、想像することが出来るのだ。底建網や、大謀と呼ばれる大型定置網を、この海に投資し、この数年ようやく収益を上げ始めた、漁民の誇らしげな顔や、何よりその労働の輝きの中に、映画はメッセージを託し得るか。今、現実に行進する関根浜の、情況のただ中であって、映画であることの自由と不自由、そして、苦悩と痛みを通して、なお自ら映画として楽天性を語り得るか。

一九八四年四月の完成を目指して、今しばらく映画は、人間を求めて、下北に旅を続けるだろう。

(青林舎)

## 障害者自立のために

尾藤　操

義務教育は終えたものの、就職は困難で行く場のない、知能に障害のある女性と共に歩いてもう十三年が過ぎ去った。

一九八〇年。「岐阜なずな学園」の十周年を記念し祝う席上で、私は十年の長旅を終え無事帰港できた時のような心境で、その喜びを多くの支援者に前に感謝の念に胸を熱くして語ることができた。

この仕事が無事進められてきた陰には、多くの人の祈りにも似たさまざまな支援があった。それをここで語ることができないが、順風に帆をあげ、大船に乗った心地で舵をとり得たのは、ひとえにこの力によるものだと言っても過言ではない。「障害者の自立は互助なくしては望むことはむづかしい」。しかし、この互助にも限界があり、障害の実態やニードに応じ、公助を必要とする。「三層の福祉社会づくり」（第一層は「なずな」の核となる層、第二層は一般社会、第三は統割りの公的な層、その三層が有機的にはたらく、血の通う組織をもつ社会）は、私の夢であり、生あるうちに実現させることはむづかしからう。しかし、この夢を年々追い続けて生きのびることは、また楽しいこともある。

わたしは、ことし七十二歳を迎えた。学園生の中には三十歳半ばを過ぎた者もあり、親も又それぞれ年かさを増し、「なずな」は年々

老齡化時代に備える必要に迫られてきた。二十周年に向け、これから十年をどう生きるか——台風の接近、波風の立つ荒海が眼前に見えても、その備えは未だしの感を免れない。夢に描いた構想の実現が容易にできれば、人生には悩みも苦しみもないであろうが、平坦な道を歩き続けていては開拓の喜びもなく、社会の前進もないものようである。当たって砕ける“心構え”も又必要ではなからうか。

十一年目は「国際障害者年」とあって、あちこちで華やかな行事が計画され、報道機関の宣伝もあって目まぐるしく動き回った。

十二年目。これからの十年に向け第一歩を大きくふみ出そうと、“可能性の限界に挑む”年間計画を立てた。それぞれのポストや係も決まり、これで今年度も出発できると解散したその日に思わぬ災難が待っていた。さらに第一波が去らぬ間に第二波、第三波と打ち寄せる荒波。「なずな」は大きくゆり動かされ、前進をばまれた。でもこれは神の警告だったのかもしれない。

十三年目。“思いあがって調子に乗ってはいけない”。自戒の一言を忘れぬよう、最低線のみつめ、ぐんとひかえ目な計画を立てた。しかし、「なずな」は十年余りの歲月の中でそれなりの成長を果たしてきている。四周に張った根は長く、深く、簡単にそれを断ち切ることは幹を枯らしてしまうことにもなりかねない。

このことはうれしい悲鳴でもあった。それほど四周の支えは広く深く、「なずな」の生命はその上に保たれていることを知らされたような一年だった。朝晩、今日も無事働かせてもらえる幸せを感じ、合掌せずにはおれない日々だった。

これから十年は、夢を追いつつ、どの道を選ぶか進路に迷ったら立ちどまって考え、話し合い、ゆきつもどりつゆくり歩をすすめ

る必要があるのではないか？ あと何年働けるかを思うと、やたらに心ははやるのだが、あわててことを仕損ずると言うこともある。

「ことし私は」と言うテーマを掲げたものの、ここで言えることはまだ夢の発言にすぎない。いざ実現となると、その課題はむつかしく、なかなか決断でき得ないのが現状である。

その夢とは、

私や親なきあとも学園生が「なずなファミリー」として助けあって生活できる場所を造りたい。三層の福祉社会に組みこまれた「なずなファミリー」は、互助と公助に支えられ、生ある限り精一杯自立への努力を続ける。人間が与えられた生命を土に返して行くまで、安心して落ちつける場所とその道程に見通しがつけたらと願うのは、障害者も健常者も変わりはない。そのため誰もが精一杯生きようと努力しているのだが、個々に能力の差があったり、障害の有無や運の良し悪し等々、現状はまちまちで、一率にはいかないのが常である。

誰もが何とか人に依存しないで自立したいという願いはもっていると思う。障害者も障害にめげず、自らの可能性を十二分に発揮して生きようとするのを忘れてはならないし、社会も又人間として基本的な願いを叶えさせていくよう努力する必要がある。障害があるからとの理由で、社会に甘えることなく、きびしい自立をめざしつつ、限りある互助や公助を求め、ことしなずなは、どの方向へどう進もうとするかについて描いている具体的構想を、掲げる。

〈二千万円の基金積立て〉

学園生には働いて得た工賃の積立をするよう約束したい。とらぬためきの皮算用と笑われるかも知れないが、一人年間十万円、十名

で百万円、十年間積立総額一千万円という数字上の算定に誤りはない（すでに過去十一年の積立て総額七十万円に達している者もある）。経営者や支援者が、互助ということで十年間で一千万円。年間百万円。その半額五十万円を経営者である私が責任をもつ。年金の三分の一を提供すれば可能なめあてである。十年生きられるかどうかは鍵となるため、そこに多少の不安は残されるが……。あとの五百万円は支援者の力を借りる。二千万円積立てができれば早速着工する。

どこに、どんな建物を、どんな間取で、どのように使用するか。誰がどのように世話をするか……。次々と夢の構想が發展して胸がわくわくしてくる。

しかし現実を目を向けると、提案してからすでに三年が終わろうとするのに、親の決断が得られない。その陰にはいろいろな不安や思わくがあり、単に金や物だけでは解決し得ない心の問題がある。

「尾藤がいなくなったら、自分の子どもを引きとって退く」というのであったら、折角ここまで共に歩んだ甲斐がない。それは最後の手段だと私はきびしく発言している。

これは無理な提案かも知れないが、発足時の心境を思えば何でもないように私には思える。時折私に二千万円の貯えと若さがあったら、今でもその場を造って、「来たい人は来なさい」と言えるのに、と思う。残念ながらその力はない。しかし力がないから共に歩けるという現実のもつ意義も又大切なようにも思う。

今年も又思惑の年になるだろうか？

二十一世紀への軌道は、こんな歩みをくり返しつつ敷かれていくのだろうか。（精神障害者授産施設岐阜なずな学園々々）

○'84年　ことし私は　○

## 少年・少女たちに

## ストリートなメッセージを

保坂　展人

学校をかけめぐった。今週前半も横浜・千葉・板橋と朝から晩までTVカメラとともにぼくは学校にいた。子どもたちと一緒に給食を食、べさせてもらったり、校長の案内で授業の中へ入っていった。ふと、寂しくなる。あの子どもたち、生徒たちにむけて毎日メッセージしてくる「公教育」の力にくらべて、ぼくらの力の何と小さなことか。

「いやあ、最近の先生はおとなしくなりましたよ。実に素直なもんです。一時は組合がウンと言わなければ学校がテコでも動かない時期がありましたからねえ。今、ウチの学校で組合員はたった四人ですよ」

タバコをすすめながら、松戸市H中学校の校長はぼくに笑いかけた。

先生、と言っても目立つのは短大を出たばかりの二〇歳そこそこの女の子である。校長との関係はまるで師弟関係で、学校の中にもうひとつの学校があるようだった。

授業を見ていて、腹立つ。もし、ぼくにあの子どもたちの眼が集めてきていたら、とつい考えてしまう。

だからと言って教師になるという気持ちは毛頭ない。誰が文部省

が組んだ指導要領などに従うものか。「公教育」が、親と子から奪う莫大な時間、金、自由。嗚呼、これによってわが日本は安泰なのだ。

自分に苛立ち、焦る。なぜ、こう毎日「教育、教育。学校、学校……」と呪文を唱えていなければならないのか。一面のすぎないか。この一年、寝ても醒めても語り、書き、動くテーマはこのことに絞られているのだ。

一九八三年は「仕事！」で言えば充実した年だった。朝日新聞若者欄で『ミカン選別法』を連載したことから一年が始まった。そして今、十二月中旬に五夜連続で放映するテレビ番組（テレビ東京系）の取材、撮影に追われて年が暮れようとしている。

ぼくには今年、ある戦略があった。

学校という貧しさの中にいる精神の飢餓線上にいる子どもたちに、直接にストリートなメッセージを送りたい——。ところが、ぼくの書いてきた雑誌はどれも硬くて、とても直接に中学生や高校生が手にする機会はいすいものばかりだった。

八二年の秋、若干の後ろめたさを感じながら、マスメディアの世界に踏みこんでいこうと決めた。先ず、芸能月刊誌『明星』にて『保坂展人の元気印レポート』という学校事件を中心としたページをもちょうごができた。次に女の子たちに人気のある週刊誌の『セブンティーン』に不定期の事件ルポを始めた。

何せ『明星』百五十万部というスーパージャンボ級の発行部数で、中学生たちはこれを回し読みするのだから、影響力はスゴイ。ポツリ、ポツリとぼくのところへ手紙が届く、と思っていたら、

ウアーツとなだれをうったように反応の熱い束が屈き始めた。

『セブンティーン』にも忠生中学事件、戸塚ヨットスクールと時々現場からのレポートを書き続け、この記事も読者アンケートの中で「特に良かった記事」ベスト5に入り続けた。今年前半で、ジュニアジャーナリズムとでも言うべき新しい領域をそれと知らず拓いてしまっていたのだ。

その集約点が『先生、涙をください』——学校からの緊急報告（集英社刊）の出版だった。この本は七月に三万部という異例の部数で刷られ、十月までに二回重版している。今までと単位の一ヶたちがうこの本は、圧倒的に中学生の女の子に支持された。読者の七割強が彼女たちである。

商業ジャーナリズムの中で身を汚していく際に、絶対に退却できない原点、仕事上の足場を持ちたいと考えていた。長年共に活動してきた森口秀志を編集長、斎藤次郎さん、伊藤悟くん、鈴木みち子さんらを編集委員クラスとして、高校生や予備校生がたくさん集まり『学校解放新聞』が生まれた。3月に創刊0号を出して以来、現在まで月刊タブロイド版四面の紙面を順調につくりあげている。

体ごと思いきりぶつかって駆けぬけた八三年だったが、ぼくの胸は必ずしもはれやかではない。たしかに、どうしても中学生たちに伝えたい、という願いは実現した。だが、肝心なのはそれから先なのだ。彼ら中学生たちの状況を伝え、学校事件の核心をえぐって、どこかが足りない。かれらの五感にピリピリ伝わるような、ツツパリでも暴走族でもない、かと言ってタイムカプセルに入っていたような市民運動でもない新しい生き方、流れ、闘い、もっと言うとファクションを創り出さなければ何も始まらない。

『明星』や『学校解放新聞』をホームベースとしてやっていくことにかわりがないが、来年は大人の世界、とくに20代から30代（全共闘世代よ、種火も来年が限度ですよ!!）にゆきぶりをかけていきたい。鉄の壁にむけて丸裸に突撃し、痛さにのたうちまわりながらも、スキ間を狙っている十代に本当のメッセージを伝えるには、まず大人たちが本気で勝負しなければならないのだ。

街に元氣印ビルもつくりたい。通りすがりの人たちが、迷い飢えた少年たちが出会い、共同のたくらみやくわだてを醸成していける場、それが元氣印ビルだ。

もう駆けまわり、いつも事務所（青生舎）の席を空けているのではなくて、ゆつくりと座っている時間もつくりたい。

なんだか、満ち足りたようなおかしな沈黙が時々ぼくを襲う。ジュニアジャーナリズムなどと言って、手玉にとるつもりが逆に魂を抜かれちゃうのでは、という怖さが実はある。ミイラとりが、ミイラに……？

学校解放から、管理社会をジャンプする文化革命の狭き道を切り拓くために、おおいに力を尽したいと思っています。

さて、明日は文部省に「管理教育（集団行動訓練）の見解」を問ひ糾しにいくんだ。

『学校解放新聞』をよろしく。月一回二十日発行／一年間二千円で定期購読／申し込みは〒152渋谷区千駄ヶ谷4-26-12大増会館2F青生舎内学校解放新聞社まで／郵便振替 東京9-59959  
9 セイセイシャ

# やっぱりしつこく運動を！

梶谷 典子

まどろっこしくても運動を！

「こんな男がキミに合うノ 日本全国美男子くらべ」。電車の中で、こんなことばが目に入りました。少女雑誌の吊り広告でした。男子、女の子のイメージは変わって来たなあ、と思います。世の中は確かに少しずつ動いています。

「家庭科の男女共修をすすめる会」がスタートして十年、ようやく女子のみ必修の時代は終わろうとしています。この前の教育課程改訂で女子のみ必修がそのまま決まったとき、ガックリしている私たちに、「運動を始めてまだ十年にもならないんだから」と言われた市川房枝さんを思い出して感慨ひとしおです。

運動の成果ではなく、国際婦人年や差別撤廃条約のおかげだ、あるいは世の中全体が変わって来たからだという見方もあるでしょう。けれども、そうした大きな動きも小さな運動がいくつもあつた上で生まれるものですし、女たちの運動がもっと弱ければ、日本は条約に署名もしなかったかもしれないのです。「これだけ運動したからこれだけ効果があった」とは、はっきり言えないのですが、やはり、まどろっこしくても運動はすべきでしょう。

共修運動を始めたころにはよく「この運動はど、こがやっているんですか」ときかれたものです。どこかの党派か大組織に属さない運動など考えにくい状況でした。大組織同志が協力し合うこともむずかしいと考えられていました。そんな中で、少々の立場の違いや考え方の違いを超えて大きく力を集めたいと願ひ、「家庭科の男女共修をすすめる会」は分裂や内部での対立を起こさずに何とか十年間やって来ました。その間に、「国際婦人年日本大会の決議を実現するための連絡会」が結成されて私たちの会も参加しました。それぞれ立場の違う四十八もの団体がいっしょになれば、思い切ったことをパツとやるわけには行きませんが、妥協できるところは妥協してできるだけ力を合わせようとお互いに努力するようになって来ています。まだまだ不十分な面はあつても、女たちの連帯は少しずつ進んでいます。それはまどろっこしいことですけれど、やはりやって行かなければいけないでしょう。

◆  
今、十年前よりだめだなあとと思うのは、家庭科のことがあまりマスコミにのらなくなったこと。「家庭科の男女共修の運動ってまだやってるんですか」という人もあるくらいです。目新しいものにばかりとびつのがマスコミというもの。それは人間というものが一般にあきつばいところから来ているのでしよう。多くの人びとにとって「マスコミにのらないこと」は「存在しないこと」に等しいのですから、差別撤廃条約批准という大きなことを目前にしている今、マスコミへの働きかけについてもっと考えなければと思つています。あきつばい人たちの目を、どうやってこのまどろっこしいことに向けさせるか、それはかなりの難事ですが――。

気はすかしなくても運動を、

「男女平等を」と叫ぶと、「まず女がしっかりしなければ」という声が返って来ます。しっかりしていない女は確かに多いし、自分自身についても「ダメだなあ」と思うことがしばしば。でも、しっかりしていないことは差別の結果でもあります。それに、人間というものが全体としてあまりりっぱでないからこそ、制度や社会のしくみをよくして行かなければならないのではないのでしょうか。しっかりする努力が要らないというわけではありませんが、ある程度居直って、気はすかしなくても運動をすすめるべきでしょう。

◆

「男女平等を」と叫んでも、今声を合わせてくれる人はほんの僅か。人口一億を超える日本で、平等をめざす集会の参加者は百のケタです。現状に満足している女も多いなかで「女の要求」などということばを使うことにはある気はすかしさが伴います。それに「自己主張」ということばがもっぱらマイナスイメージで使われる日本では、運動などするとヘンに目立ってしまいます。それでも声を上げ続けることによって、少しずつは仲間もふえるでしょう。現状を見直す女もふえるでしょう。やはり、気はすかしなくても運動はすべきでしょう。

◆

「男女平等を」と言うとき、「なぜ女のことばかり言うのか。もつと人間全体のことを考えないのか」という声も返って来ます。人間全体が解放されなければならないことは確かです。でも全体をよくするためには、部分的な問題をひとつひとつ解決することも必要です。一人の人間の力には限りがある以上、最も関心のある部分に力

を集中して運動することが効果的でしょう。全体のことをやっていないという気はすかしさを感じながらも、部分的な運動をやって行きたいと思います。

◆

「男女平等を」と言うとき、「平和が脅やかされている今、まず平和のために運動すべきではないか」という声も返って来ます。確かに平和がないところでは、他のどんな要求も無意味です。平和こそは最も緊急な課題です。でも、自由と平等は、人間にとってより究極的な課題でしょう。それに今の段階では、平等を要求して社会のあらゆる分野で女の参加をすすめることが、平和を確かなものにするにつながります。多少気はすかしなくても、男女平等をめざす運動はやはりすすめるべきでしょう。

世の中にはひまをもてあましている人もいますが、運動しているのはいい人がたくさんばかり。いろいろなことにかかわるほど、問題がよく見えて来て、運動の必要性が感じられるでしょう。私自身について言えば、年のせいか何をするものもろくなり、勤め先の仕事の内容が変わったこともあって、本当に余裕のない毎日です。でも今は大事なとき。差別撤廃条約批准を目前にして、一方では前に述べたように連帯にすすんでいます。その一方で保護と平等などの問題をめぐって女同志の対立が大きくなるうとしています。そしてうっかりしていると、世の中全体が大きく逆戻りして、男女平等も後退してしまいうすです。長い目でみればよい方へ向うに違いないと思うのですが、今、少しでも前進するように、いそがしくても運動を続けて行きたいと思います。(TVディレクター)

## 「明るい大衆」の出現とその未来

田中喜美子

盲蛇に怖じずの無鉄砲で『わいふ』の編集を引き受けたのが一九七六年の正月、あれからもう八年の歳月が流れ去った。

十年一昔という言葉はうそではない。自分にとつてはあつという間に過ぎ去つたように思えるこの年月が、主婦の暮らしと心にもたらした変化を考えると、改めて愕然とするのである。昨日は珍しかったことが今日はさらにあるできごととなり、目に見えないほどの変化がじりじり積み重なって、いつしか大きく人々の心と暮らしが変わり、時代が移る。

その変化を読みとり損い、昔ながらのイメージに執着して編集を続ければ、いかにささやかなミニコミといえども生き残ることはできない。

この七月、『わいふ』が大きくイメージチェンジした背後には、主婦の「変化」に対する私たちなりのこうした認識があった。

八年前の主婦と、現在の主婦の最大の差はどこにあるだろうか。

一九七六年の『わいふ』一三八号で、「日本の夫」という特集をしたことがあった。その投稿に吐き出された妻の思いを、現在の若

い妻たちのそれに重ね合わせると、その違いの大きさにおどろく。

一九七六年の妻たちは、一口に言えば恨みがましかった。妻たちを無視し、抑圧する夫がまだまだ多かったからである。「対等の人間として扱ってほしい」という妻の思いが、寄せられたアンケートのすみずみから噴き出していた。

現在の妻はちがう。妻をあからさまに無視し、抑圧する夫はきわめて少なくなっているからだ。妻をとりまく状況は、基本のところではほとんど変わってはいないのだが、一口にいつて妻たちは「幸福」になったのである。

妻たちが、女の置かれた基本的状況に気づき、そこから動き出すために、かつては「横暴な夫」の存在が大ききものをいつていた。しかし「幸福」な妻たちにとつて、状況の真の認識と行動への勇気を誘うモチベーションはいま、きわめて少ない。その結果、家庭というタコツボの中で、人間的成長にとって不可欠な体験を持たないままで暮らしている妻たちの数が圧倒的にふえはじめている。

一九五三年、今度生まれるなら男、と答えた女性の率は六四％。一九七三年、その数は四三％にへった。十年後のいま、どの婦人学級へ行つて聞いけても、出席者のほとんど全員が、女と生まれてよかった、と異口同音。理由はといえば「女のほうが楽だから」。

楽なことが第一義となり、人間いかに生きるべきかという問いかけを持たないひとが多くなってきた。「べき」などというのはダサイのだ。ネクラなのだ。ルンルン気分でいつちやおう、夫に食わせてもらってなぜわるい、夫と妻は対等なんだ、働こうと働くまいと、カラスの勝手、である。

八三年五月の総理府の婦人の意識調査の中、「男は仕事、女は家



庭」に同感する、との答が、七六年の四九%から一挙に七〇%にはねあがったのは、理由のないことではない。圧倒的多数の妻が、この構造に疑問を持たないばかりか、むしろそのほうがトク、と思ひこんでいるからである。

よくよく運のわるい人でないかぎり、現代の主婦の生活は楽であり、しかも「自由」なのだ。もちろんこの「自由」の範囲は、夫の掌の上に限られているのだが、もともと掌の上から出ようと考える妻が少ない以上、さしたる不都合は起こらない。

この変化と並行して我慢したり、忍耐したりする人がなくなつた。このことは働く主婦がふえたという一見明るいニュースと無縁でない。何ごとにもできるだけ手をかけずに、万事お金で解決しようという姿勢は、妻を家の外の労働にさそいだす。「手づくり」はむしろ、ゆとりのある家庭の妻の趣味になった。

彼女たちはまた、カッコわるいことはきらいである。髪ふり乱して働いたり、人と論争したりすることもその部類に入る。何ごとにも適当に、楽しく、明るく、世の中の人と歩調を合わせ、余った時間は趣味教養か、スポーツか、友達とのおしゃべりにふり向ける。パートの仕事もこうした活動の一種にすぎない。そこに過度の自立志向を期待しては肩すかしをくわされるだけである。

こうした主婦たちの姿こそ、いわば「豊かな社会」の申し子である「明るい大衆」の姿といえるのではないだろうか。

大衆はかつて、常に被害者であると思われていた。弱い者、虐げられる者、黙々と働く者、おカミのことをきく者、搾取される者、よくよくの目にあわされなければ怒らない者たちだった。

「明るい大衆」はおそらく基本的に昔の大衆と違ってはいないかも

しれない。しかし「明るい大衆」を特徴づけるのは、彼らがよきにつけあしきにつけ自分以外の権威をみとめなくなってきたこと、公然と利己的に安楽を追求すること、自己表現を恥じないことにあ

る。彼らの出現こそ、ほんものの「大衆社会」の到来を告げているのではあるまいか。

これが『わいふ』を通じて主婦たちを見守ってきた私の実感である。

この社会の行く末は空恐しい。それはまさに前代未聞の社会だからである。私たちの日本国では、エゴイズムを極度に助長し、人間に対する信頼感を打ちこわすような教育がまかり通っているだけに、空恐しさがつのる。最近、老いも若きも、（少なくとも東京では）日本人の面相が悪くなってきたと感じるのは私だけだろうか。

一九八一年の日本リクルートセンターの調査「女子学生は何を考えているか」は、「なくてはならないもの」として女子学生があげているもののトップが「流行に対する敏感さ」であり、最下位が「公共心」であることを明らかにしている。最近このデータほど、私を慄然とさせたものはない。

しかし一方で、明るいデータもまた、存在している。子育て期に職業をやめない働く女性がふえつづけていることだ。彼女たちこそ「楽」であることを至上価値としない人々であり、男社会の中で自分の理想を達成するために、いわばネクラな努力を続けている人々である。彼女たちのために『わいふ』はどんな役割を果たし得るのか、私はいま日夜、それを模索している。

（女性誌『わいふ』編集長）

## 私の、あなたの虹色の風船

### 三井マリ子

ニューヨークに一年住み、八月末に帰国した。帰国した私は七色の風船を両手いっぱい持っているようだった。やる気さえあればたいていのことはできる。こんな思いにふくらんでいた。プツ、プツ、と日本社会の針が私の風船をあえなくつぶしていった。もう、私の虹色の風船は、ほんの少ししか残っていない。

ニューヨーク、一九八二年。私の目に飛びこんでくる女たちの姿は、私の頭を「なぜ？」でいっぱいにした。

なぜ、大学には機会均等委員会があり、職員がフルタイムで平等のために働いていられるのか？ なぜ大学にはこんなに多くの、しかもあらゆる年齢の女が学んでいるのか？ ニカラグアを力で抑えようとしたカークパトリック国連大使に怒るバーナード女子大生たちが、署名運動を起こし、卒業式典に予定されていた彼女のスピーチをキャンセルさせたが、なぜそういう力を持っているのか？

なぜ友人のジュリーは職探しの時、専門を気にしていなかったか？ 年（36歳）や女であることは心配しなくてすんだのか？ なぜ三

万人以上の市において七人しかいなかった女性市長が、この十年で七六人に増えたのか？

なぜニューヨーク州とニュージャージー州の両知事がTV対談で「家庭では父親としてどんなことをしているか。奥さんとの協力力は？」と質問され、二人とも鼻でせせら笑ったりせず、かなり長い間「家庭人としての知事」についてまじめに話し合ったのか？ なぜ女性解放の雑誌・新聞が二五〇種もあるのか？ なぜ女性誌「MS」のもと編集者によるフェミニスト小説「カラー・オブ・パープル」がベストセラーになり、ニューヨーク中の本屋さんを喜ばせているのか？

こういうひとつひとつの風景に出会うたび、私は、アメリカの女性解放は日本の何世紀も前を歩んでいるような気がした。「根っからリブ」も多いけれど、周辺にいる「なんとなくリブ」の多いこと。この「なんとなくリブ」層の厚さが、私の「なぜ？」への答えかもしれない。

「なんとなくリブ」意識を広めたもの。それは60年代から70年代の女性解放運動の高まりだったし、会員を増やし、たえず新鮮な活動を生み出している女性団体のおかげだ。彼女たちは、新しい法を作り、法による行政の手厚い保障を勝ちとるまで、プレッシャー団体としてしつように運動を続けた。そして今、直接・間接に女性解放のために使われる予算が毎年組まれ、女たちの地位を広範囲に引きあげることが社会政策のひとつとなった。なんと未来ある税金の使われ方ではないか。

法制化による予算措置によって飛躍的に広がったと思われる女性の職場の中で、日本になじみの薄いところをあげてみると……

たとえば避妊・中絶クリニック。中絶費用も医療援助制度の適用を受けられるNY州は、患者がお金を払えなくても政府から補助金が出る。クリニックでは初期の中絶手術ばかりでなく避妊指導もしており、心ある女たちが数多く働いている。

次は「女性教育全米委員会」。教育の中の性差別をなくすための国の組織。女性解放教育に関する出版物をすでに十九冊発行し、調査広報に忙しい。ここにも二〇人の委員（ほとんど女性）がいる。

さらに全米のあちこちに新設された雇用機会平等委員会。平等に働ける職場づくりのために企業を監視する行政組織。NY支部には八〇名のフルタイム職員がいる。そこで働いている弁護士ステイラは「私はフェミニスト運動の経験はないので運動については知らない」と言っていた。新聞広告で見つけたという今の仕事の性格上、性差別禁止法には詳しいけれど、彼女はどちらかと言えば「なんとなくリブ」派だ。

以上三例は、主に女のための女による仕事場であり、雇い主は政府ということになる。

他に、女性解放関係の非営利団体が無数にある。一例をあげると「教育への完全参加の権利」団体。一人の女性がタイプを打っている姿と、電気工事をしている姿を表紙にした本「彼女の「適」所」を最近発行した。NY市内の職業高校の性差別を調査し、改革案とともに示した警告の書である。この種の非営利団体は会員のカンパによるものではなく、フォード財団のような所から年次活動費を受け取り、運営されている。この専従トレイシイはもと活動家だった。彼女は言う。「営利企業にお金を出すのは銀行。非営利の組織にお金を出すのは財団よ」。

もちろんNOWのように会員の会費や寄付で維持されている組織も健在だ。ちなみにNOWの会員は去年二万人に達した。専従職員は五〇人へのぼる。

今、FENから聞き慣れた歌が流れている。アメリカンヒットチャートにランクされているドナ・サマーの歌。

♪彼女はお金を手に入れるため一生けん命働いている／とても一生けん命に／だから彼女を正當に扱うべきだ

♪くる日もくる日も、ほんの少しのお金のために／こんなに働き続けるのは／犠牲を払っているようなもの

♪彼女は身売りすることはしない／一ドルの紙きれのために／身売りだけは決してしない

♪彼女は一生けん命に働いている／だから彼女を正當に扱うべきだ

昼は保母、夜はトイレ番をして働く一女性を歌にしたものだ。アメリカだってもちろん女性の地位はまだまだ低い。友人たちは口をそろえて「不平等だ」と叫ぶ。だけどドナ・サマーをしてこんな曲を作らせ、ヒットする国でもある。だからこそ私の両手が虹色の風船でいっぱいになったのかも。

一九八四年。ニッポン。今年こそより多くの人の手が虹色の風船でいっぱいになるような社会にしたい。そのためには、あなたが、私が、もつともつと声をあげ、くさりきった日本の社会制度を変えていくことが大事じゃないか、と思っている。

（高校教員）

## 自由の森学園誕生に

### かける希い

遠藤 豊

今日の学校はもう教育の場所ではなくなってしまった。校内暴力や登校拒否やいわゆる「非行」や、あるいは自殺など、いちいちの例をあげるまでもないだろう。いまの学校は、子どもの生きられない場所になってしまっている。心のはずむ場所ではなくなってしまう。規格化した知識や技術を伝達する場所に過ぎなくなってしまう。新しい視野を開いたり、自分の世界を広めたり、深めたりして、いいような感動を味わったり、解放感にひたたりする場所ではなくなっている。

十五歳（中学校）あるいは十八歳（高校）までに習い憶えなければならぬ一定範囲、一定量の知識を外在的に国がきめ、学習指導要領・教科書・テスト・評点・高校入試・共通一次というかたちでたえずテストをくり返し、それをどれだけ身につけたかを点数化し、その点数を能力の指標として、一元的に序列化し、選別していくという機関になりさがってしまった。

若者たちは自分の能力に対する宿命論のとりこになり、自らの未来が閉ざされていることを感じとり、夢を失い、理想を求める衝動を枯渇させ、志をなくしている。学校通過能力としての「いわゆる学力」こそ万能という一元的な価値観に心を占領され、精神のタコ

ツボに落ちこんで身動きのとれない閉塞状況に追いこまれている。

規格化された知識を伝達し、テストの予備作業に転落してしまつた授業は、ますます画一化と定型化を強め、生徒の学ぶ喜び、自由な思考、想像性や創造性を抑圧していく。それはまた、教師にとつても同じである。学ぶこと・教えることの喜び、自由、創造性のないところで授業をするならば、力による管理か、利益による管理（勉強すればいい高校・大学に入れる）に頼るはかなくなってくる。教師は小権力者としての位置を持ち、能力主義の教育を内部から支える役割を果たさざるをえなくなっている。生徒の教師に対する暴力事件、学校の破壊、登校拒否あるいは非行やいじめなどの現象は、こうした点数や感想を基軸に編成される学校の体制、多様な価値を否定し存在を否定してきた学校の体質、そうしたものの象徴としての教師・学校、あるいは大人社会への反乱だといつてよい。

学校教育のこのような荒涼たる退廃からの脱出路をどこに求めたらよいのだろう。それには、国家や産業界の国家主義的経済主義的要請に応えることを目的とした教育を、「子どもを中心とした教育」「人間の本性に根ざした教育」に切りかえることである。このことは、必然的に、今日の教師、あるいは親たちに、「子どもの発見」「人間の本性についての開眼」をもたらすことになるだろう。

それは、今日の画一化した硬直化した学校教育、定型化した授業のなかで、深いところに閉じこめられてしまっていた豊かな想像力、鋭い感受性、知的な好奇心、かけがえのない、異質で多様な可能性、いいようないやさしさであったりする。あるいは底辺に位置づけられてきた生徒たちの、具体的な行動や基礎的な衝動、内的な現実などとながりをもった、思考の空転のない、生きた根源的

な知性の発見であつたりする。

「学校を生きかえらせる」には、今日の学校教育の機軸となつてゐる支配原理・価値観・文化的神話を、根底から変え、対極である価値を対置して、その二重性や緊張関係について、視野を広げていくことが必要である。

今日の学校教育は、行政側を教師が意識するしないにかかわらず、効率性、そこからひきだされる画一性・合理性・計量性・あるいは過度の論理性や計画性そして極度のシステム化、定型化、速さや正確さや規格化された知識の量を積み上げての盲信など、こうした論理を支配原理としている。それが、学校教育の画一化と定型化を生みだす構図である。ここでは、緻密なダイヤグラムに従つて運行される列車のような計画性が強調される。知識の量とその積上げ性への盲信は、過程への重視や実在から出発することの重要性を見失わせる。点数化や記号化は、質の軽視や感性の麻痺をつくりだす。そして、教授・学習の過程の極度のシステム化への指向は、人間の教育が成立する最も基本の要件である。教師の個性的な力量や、職人芸といった創造の腕を排除し、指導書やテキストへの跪拝を生み、授業の定型化に拍車をかけていく。このような教育は、子どもと教師を徹底的に「物化」し、操作対象へとすりかえることで成りたつものである。

今日の教育のこうした病患を克服していくためには、合理性や論理性には、夢や空想や想像や隠喩やあるいは直感などの非合理とされるものを、計量化には、個別記述やプロファイル的な把握を、速さや正確さには、鈍行やゆっくり待つことや試行錯誤の価値を、正確さの論理には、規格化しドグマ化している知識を破碎し、相対化し

ていく上で「誤答」がもつ問題提起性・創造性といった原理を対置していくことが必要である。計画性や整合性には、即興やハプニングの重要さに着目していくことが大切である。その場の状況に即して、その学校、その教師と子どもという人間と人間との関係性を基盤にした授業を創造することである。

このような営みは、学校を今日あるそれよりも、いつそうドラマチックなものとするだろう。そこでは、美術や音楽や体育、工芸・工作あるいは行事などの表現を主とする教育のみでなく、知識の教育をも、ドラマの系、快楽の系として組織し、発展させられるものになる。管理秩序化のための学級よりは開かれた学級が、制度としての多様化でなく、カリキュラムの弾力性や自主運営を前提とする内的多様化が探究され、新しい個性教育が創りだされる。からだの肥大化による鍛錬主義や勝負第一主義の体育ではない「からだぐるみのかしこさ」、心身の解放を目的とした体育が、そして「手仕事・勤労体験」の復権が求められる。他者との出会いによる自己の内的な現実の広まり、深まり、つまり他者の発見による自我の成立、実存的な人間関係の原体験、あるいは集団と個との緊張関係からの相互主観性の発見などを学ぶ場所として重要な機能を果たすようになつていくだろう。それが人間の生きる力を育てる学校である。

学校が本来、人間と人間との関係性によつて構成されていることが、学校教育のドラマ化・個性化・共同化を内包しているのだといつてよい。学校教育がそうなつてはじめてそこで、子どもの生きられる世界として再生することが可能になつてくる。

私は、自由の森学園の創設に、そうした教育の誕生を賭けてゐる。  
(前明星学園小中学校長・自由の森学園設立委員会代表)

## 学校を超える思想としての

柳田教育学

小田 富英

たとえば、あなたは、自分の子どもが、学校から持ち帰った『あゆみ（通知表）』の中に、「ぐず」であるとか、「雑」であるとか、「のろま」などの文字を見た時、どうするであろうか。

朝、大便が出なかったからといっては、「×」をつけられたり、班競争の重圧に耐えられなくなっていたら、あなたは、どうするだろうか。

それだけでなく、教師の価値観を疑いもなく身に付け、「良い子」として、自分の仲間をチェックする「ミニ教師」の役割を担っていたとしたら、どうするだろうか。

今、教育現場で蔓延してきつつある「生活点検運動」や「班競争」「シール漬け教育」、さらには、「小中連携教育」の負債は、日常のこうした具体的な場面にまで忍び込んできている。

状況は、最悪が最悪を呼び込むように、過速度的に悪化へと向かっていて、子どももまた、管理社会の成員として、大人の価値判断のなかで、創造力や判断力は色褪せているかのようである。

学校化社会が、まだ未熟な部分を残していた時ならば、逆に、「学校のやることだから間違いはないだろう」という言い方も許されたかもしれない。社会のどこかに、回復力が保存されていたと考

えるからである。

しかし、今は、学校化社会が、硬直したかたちで立ちすくんでいる。こうした中で、前述のような場面で、単なる教師批判や学校批判の愚痴をこぼしたところで虚しさが残るだけである。

「何よりも大きな意見の分岐点は、今ある学校内での教え方を、守り立てて行くか又は建て直すか。別の言葉でいうならば、既成制度に対する批判の深さ浅さ、もしくは未来に描いて居る夢の濃さ淡さに在るであろう。」

この言葉は、絶望的な現在の教育状況に対して放たれたものではない。柳田国男が、昭和一二年に「昔の国語教育」の緒言のなかで述べた問題提起である。続けて、「殊に世上の非難が起る度毎に、省みて個々の欠点を物色するのは寧ろ熱心なる現状維持論者の常であるが、この人々の多くは、別には是以外の新たなシステムが、有ろうとも思わぬから考えて見ようとしれない」と述べているが、四十年以上の前の言とは思えないほど、現在の視点が据えられている。この「世上の非難」を、「管理教育」や「校内暴力」、さらには「戸塚ヨットスクール」などと置き換えてみると、問題はかなりはつきり浮かびあがってくる。

学校教育を自明のこととして、あるいは善として進行してきた、いやさせてきたと言った方がよい近代化社会に対して、柳田は異議を唱えるのである。

戦時下、ある対談で、柳田は次のように述べて、そのビジョンを語った。

「当局が教育史というものを出して置きながら、寺子屋を第一章と

することは大間違いです。これは、私が言い出したのが元です。学校にあらざる、文字にあらざる教育が何かということに答えなければならぬ立場にあった」(『日本の家と教育』『婦人公論』昭和一七年八月号)。

日本民俗学を創成した柳田が、日本の近代化の矛盾や病理を、教育の中に見い出していくのは必然でもあった。敗戦後、決意を新たにして、柳田社会科や柳田国語科と名付けられるような独得な教科書づくりに着手することになるが、その根底には、いつも「学校にあらざる、文字にあらざる教育」への暖かい視線があった。そうした教育に対し、適切に表す言葉が無いとしながらも、「昔の」とついたり、「前代教育」と言ったり、「群の教育」や「郷党の教育」と名付け、近代学校教育と対置し、その評価を忘れることはなかった。

柳田社会科の教科書『日本の社会』(実業之日本社刊)の教師用の『学習指導の手引き』は、単なる技術的な「手引き」に終わることなく、柳田の思想的な態度が、簡潔に語られている(柳田自身の文章ではない)。

「子供は、衣食住をふくめて、広い意味での世間的な生活をすで行ってきているのである。その、自分自身の生きてきたのが旧来の教育でなく、別世界の概念やら事実をのみ授けてきたのが旧来の教育であった。社会科は、その弊を改め、子供に自分の姿を顧みる気持を起こさせる効果をもつものでありたい。いわゆる世間勉強は、昔はみんな子供の時分から家庭や村々において行われてきていたのである。ところが学校教育が整ってきたために、かえって家庭の教育がおろそかなり、学校でも世間でも卑俗なもののように

誤解してとりあげようとせず、無視するようになった。そこを改めていかなければ、本当の教育は行われないのであるまいか。」

この柳田社会科は、高度成長期に入る直前、言わば、時代の流れに屈するように挫折していくこととなる。しかし、それだけではなく、こうした柳田の思想的な部分を、日本の教育界が切り落としてしまったことをも意味しているのである。今の教育が、ここまで悪化し、危機を迎えている素地は、もうすでにこの時からできていたのだと言いきっても過言ではない。

だからといって、私は、柳田社会科や柳田国語科を、そのまま復活させようと思っているわけではない。私たちの研究会である全面教育学研究会では、すでに、庄司和晃氏や植垣一彦氏を中心として、「ことわざ教育」の体系化が進んでいる。これは、柳田の「諺武器説」を超えて、論理教育や、断片的世界認識の方法としてとり組まれているのである。

また、柳田社会科においても、私自身、小学校卒業期の三部作授業として、最終単元「人の一生」を、理科の「ヒトの体」と結合してやり終えて、一定の手応えを感じている。その他、「すまい・あかり・ねんりょう」や「着物」など、家庭科教育の蓄積と共鳴する単元は多い。

柳田国男の膨大な仕事のなかから、その教育観、学校観、教師観あるいは教科書観を抽出することは、学校を超えて生きようとするあなたを、きつと勇気づけることであろう。私たちひとりひとりが、学校を超える思想を獲得し得たならば、一九八四年という年の課題は、その地平でどのような手の結び方が可能なかを追求することではないかと私は思う。

(国立市立第五小学校)

からだ・こころを生かす教育を考えるとき、  
いま、何から始めたらよいか

柴崎 和恵

「日本の学校は、水俣の海」になった」と林竹二先生は語っておられます。その言葉に、私は水俣の苦海を思い愕然としながら、一方ではほんとうにびつたりの表現だと思ったのです。

教育や学校の荒廃が言われるようになって久しいのですが、改善されることなくますます深刻さを増しています。その学校で「からだ・こころ」をズタズタにひきさき歪められているたくさんの子どものたちのことを思うと、何ともやりきれない気もちになるのです。

だからこそ、いま、親としても教師としても「からだ・こころを生かす教育」を学校のなかにも求めつづけていく必要を感じます。

ただ、何から始めたらよいのか——厚い壁に立ちふさがれるのですが、可能性のあることを一つでも追求して、いまの学校教育の非人間性をじわじわとでも崩してゆけたらと思うのです。

〈からだ・こころを生かす〉教育、その基本として考えること  
「からだ・こころ」は「健康」とか「保健」「医療」などと離せませんが、重要なのは、管理的思考や管理的発想から解放されることだと思っています。保健衛生行政や医療の分野では、疾病予防とか早期

発見・早期治療あるいは保健サービス等々で当然のことと思われる管理の思想があります。ひとりの人間よりも集団や行政が優先され、個人の意志や選択は無視された疾病管理・患者管理が行われてきました。こうした行政の末端では、主観的には全く悪意のない善意の熱意が賞賛され、仕事を遂行する力となりました。

しかし「からだ・こころ」を考えるとき「健康」という一つの概念を定めてそれからはずれることを「不健康」「悪」ととらえて矯正を指向するだけではなく、それも一つのありかたであると受けとめる思考が大切だと思うのです。

「からだ・こころを生かす」教育に最も障害だと思うのは、いまの学校のすさまじいばかりの点数・序列主義と管理主義の横行です。国家の教育行政の末端機関となってしまった学校で子どもたちを囲い込み、子どもたちにとって絶対権力者となつてしまった教師たちによつて「からだ・こころ」の教育がなされることを思うと身ぶるいさえも感じます。

〈からだ・こころを生かす〉教育のために学校をみなおす

管理主義がなぜいまほどに浸透してしまったのでしょうか。学校に限らず労働の場に、地域に、人間の生活しているあらゆる場に。

これは、私たち親にも教師にも真に自由を希求し築く力、真の民主主義を築く思想と実践力とが欠けていたのではないのでしょうか。たとえば制服、名札や番号札の着用、親が記した理由書がなければ体育の見学を認めない、授業中は腕を後に回して姿勢を正す、挙手し指名されてから机の脇に起立し、はじめてできる発言……あげればきりのないほど、子どもたちの「からだ・こころ」管理が、あたりまえのこととされています。歯科検診で、歯がなかった子ども



を表彰するなど、こうした「善意」の熱意も盛んです。

このような学校のなかみをとらえかねずことをぬきには「からだ・ところを生かす」教育はできないのではないのでしょうか。

「興味をもち、心配し、悩み、もっと知りたいと望んでいる子どもたちを大切に」

子どもたちの関心を歪め奪っているのは親であり、教師であり周りのおとなたちです。「そうしたくない」と私も日ごろ思っているのですが、徹しきるのはなかなか難しいことです。

最近のわが家での一つのできごとでも改めて考えさせられました。深夜小五の息子が虫垂炎で手術を受けました。その日、私は勤めから帰ってせかせかと炊事をし子どもたちと食事をしてから勉強会に出かけたのです。夜なかに帰宅したところへ息子が腹痛と吐き気を訴えてきました。みると歩行もやっとです。夕食前から痛かったけれどがまんしていたとのこと、もしやと思って診ると筋性防御も激しくブルンベルグ徴候も顕著です。私はあわてて、これも帰宅したばかりの夫に入院の準備を声かけながら救急車の手配をしたのですが、そのとき寝ている息子から「いったい僕のからだはどうなったの？ 僕はどうなるの？」と尋ねられたのです。ハツとししました。本人に何も説明していなかったのです。

〈生命をみつめ、感動し、はぐんでゆけるちからを育てる教育〉

「やはりこのような教室を開くということは大切なことだと思ひ、できるだけ多くの人が参加するべきだと感じました。できれば男性の方にも見ていただきたい映画だと思いました。」

私たち女性はいくら何年先になるかはわかりませんが、ほとんどの人が出産ということを経験するでしょう。一つの生命を育てて

いくことに對してももちろん不安はあります。あのような映画を見てもますます不安になったのも事実ですが、何も知らないまま出産に直面することの方がもっと何倍も恐ろしい事だと思ふのです。今日の母性保健教室が終わってから、友達が社会に出してしまったのかなかこのような機会は得られないと言っていました。私もそういえばそうなんだなあとつくづく思いました。ですから、今日このような教室を開いて下さったことに對してすごく感謝しています。

あの映画を見て、生命という事についても考えさせられました。不思議で、神秘的で……

生命の大切さを改めて感じました。」

これは女子短大で開いた「母性保健教室」に出席した学生の感想文です。短大生になるまで機会がなかったこともあるのでしようが、学生たちは感動し生命をうけとめてゆくようでした。

どの年齢の子どもたちにとっても、いま「からだ・ところを生かす」教育とは、「生命の教育」なのではないかと思っています。現代は人間らしく生きること、人間らしく生活することを拒み容易に認めません。そのなかにあつて自らの生命、他者の生命に感動し愛しむことを学ぶ教育が必要なのです。

それは生活のなかのあらゆる問題に具体的に目を向けることでもあり、また教科「保健体育」に限定しない、人間教育としての性教育でもあると思うのです。自然科学と社会科学、文字などが有機的に結合した生命の教育—人間教育を願います。子どもたちの「からだ・ところ」にかかわりのあるすぐれた絵本や童話などを教室や保健室の片隅において共に読み合うことからでもよいと思うのです。

(短期大学勤務、保健婦)

## 家族・婦人問題を研究している ものの一人として

渋谷 敦司

編集部からの要請では、「社会学」を研究しているものとしての一九八四年の抱負を書け、ということでしたが、ここでは私の研究分野である家族・婦人問題と関連しての私の最近の関心事を述べて「抱負」にかえさせていただきたいと思います。

一九八四年が八〇年代前半のしめくりの年であるということと関連し、私の問題意識から八〇年以降のこれまでのことを振り返ってみますと、次のようなことが言えると思います。

まず、私自身が大学院に入学したのが一九八〇年でした。卒論で「労働者家族の生活と子育て」というテーマをとりあげ、その過程で「家族論」「婦人論」を独自に掘下げる必要を感じて、修士論文では「戦後日本における労働者家族と婦人問題」というテーマを立てて研究を進め始めたところでした。そのような私にとって八〇年以降の現実社会の展開は、研究の素材と刺激を不断に与え続けてくれるものでした。

一九八〇年の夏、私は、大阪府寝屋川市において保育所・幼稚園

などを対象にした家族調査を行ったのですが、そのころからベビーホテル問題が急速に社会問題化しはじめ、従来の「家族社会学」的な「家族の役割措置」調査や共働き家族調査ではこのような深刻な生活問題はとらえきれないことを痛感し、翌八一年、同じ地域を対象に、ベビーホテルなどもまわって歩きながらの保育問題調査を行いました。

また、八〇年二月には政府内部の家庭基盤充実構想推進連絡会議から「家庭基盤充実のための基本施策のとりまとめ」が発表され、「家族（政策）」論議がにわかに活発化してきていました。<sup>(注1)</sup>その後、臨時行政調査会答申の具体化としての、家族の相互扶助、自助・自立による「日本型福祉社会」の追求という文脈で議論が展開してきており、八三年の「国民生活白書」でも同じような文脈で、「家族の役割・機能」が強調されていました。私の修士論文は、このような現実社会の急速な展開を十分取込んで理論的整理を十分行えないままにまとめざるをえませんでした。

国際的レベルでは、八〇年六月にジュネーブでILOの総会が開かれ、第一二三号勧告「家庭責任を持つ婦人労働者に関する勧告」の再検討が、家庭責任を持つのは女性だけに限らないという立場から行われましたし、七月には、コペンハーゲンで国連婦人の十年「世界会議」が開かれ、「婦人に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」の署名式も行われています。このような世界的な婦人解放運動の高まりに刺激されて、八〇年の夏にはアメリカの婦人解放運動に関する論文を書くことができました。

修士論文執筆以降私は、「家族の危機」が進行すると言われるアメリカ合衆国における家族問題、婦人問題を中心的対象とした研究

を進めてきているのですが、一九八〇年以降のアメリカにおける問題状況の展開にも注目すべきものがあつたと言えます。

一九八〇年には保守派のレーガン氏が大統領に就任しましたが、彼は、「家族を守れ」というニュー・ライトと呼ばれる人々の主張を背景に、「伝統的なアメリカの家族秩序」の再建を政治的スローガンの一つとして掲げて登場してきました。彼らのめざす「家族の再建」とは、E R A（男女平等のための憲法修正案）への敵対的姿勢にも明らかなように、伝統的な「性役割」の強調による「家族の強化」ということなのであり、「日本型福祉」と同様に、家族の相互扶助意識、自助・自立の精神の強化によって福祉削減政策の地ならしをするというものです。

レーガン政権の誕生以降、中絶を非合法化するための憲法修正案が議会に提出されたり、道徳教育・「家庭生活」教育の名の下で義務教育段階のカリキュラムへの一定の「家族イデオロギー」の持込みが図られたり、あるいは、E R Aの批准運動が阻止されたりするということが続いてきています。さらに、福祉関係予算が大幅に削減され、それが増大する片親家族（母子家庭）にとりわけ大きな打撃を与えて、貧困問題は「婦人問題」とあるという認識が一般的になってきています。

これらすべてのことのため、レーガン政権の反フェミニズム的性格は誰の目にも明らかになってきており、ある意味で、レーガン政権の「おかげ」で婦人運動が活性化してきている（あるいは活性化せざるをえない）状況が、八〇年代に入ってから生じてきています。このような中で一九八四年の大統領選挙を目前にして、ジェンダー・ギャップ（gender gap）とすることが注目されてきていま

す。ジェンダー・ギャップとは、「性別差異現象」ということで、具体的には八〇年の大統領選挙の際にみられた男女の投票行動の大きな差異として注目された現象のことです。女性有権者にはレーガン支持派が男性にくらべかなり少ないというこのジェンダー・ギャップは、八〇年以降ますます顕著になり、八四年の選挙を前にして改めて注目されてきているのです。<sup>(注2)</sup>離婚の増大、児童虐待や妻虐待などの家庭内暴力の深刻化など、「家族の危機」が進行する一方で、他方では社会福祉削減が強行されているという現在のアメリカで、このような状況の最大の犠牲者である婦人層がどのような動きをみせるかということに関心を払っているのは政治家のみではないと言えます。八〇年代に入ってから家族と婦人をめぐる国内のみならず国際的規模でのダイナミックな動きを、アメリカを中心的検討対象としてどう理論的につかむのかということが、私自身にとっても大きな課題になっています。

私が専攻している「家族社会学」という学問分野は、先に述べたような現実社会のダイナミズムを把握するという点では非常に立ち後れている感があります。私自身は、狭い「家族社会学」の枠にとられることなく、「家族」と「婦人」をめぐる大きな歴史的变化に取残されないように理論的研究の努力を重ねてゆきたいと考えています。このことが一九八四年を迎えるにあたっての私の抱負であると言えると思います。

・(注) (1) 一九八〇年度『婦人白書』（日本婦団連）のテーマは「家庭基盤を考える」であつた。

(2) "What Do Women Want?", *Newsweek*, Sep. 19, 1983.

（立命館大学大学院社会学研究科博士課程）

## アメリカの少女たちと

佐々木　文

「ねえ、私の名前を日本語で書いて。」

一日に三、四人の子がこう言って私の前に紙とペンを差し出してくる。

「あなた、何て名前だったけ？」

「ステファニー。」

OKと答えながらペンでステファニー、とカタカナ、ひらがな、漢字の三通りで書いてみせる。もちろん、漢字は私が独断で決める「捨不兄胃」という適当なあて字である。こんな字を書いて、あとで他の日本人がこれを見たとしてもまず読めないだろうナ、と思うがみんなは目を輝かせ、とくに漢字の「捨不兄胃」を指差しては喜んでくれる。

アメリカンガールは陽気で社交性があり、ダンスが皆大好き、化粧オバケで男好き、おそろしくだらしがなく、そして親しみやすい。

一九八三年の五月に両親と共に渡米、田舎の上にドが二つほどつくジョージア州アセンズへ来てから五ヶ月ほどたった。こちらの中学へ入ってみて、私はアメリカの少女たちについて前文のような印

象をうけた。

お互いに知らない者同士でも、

「ハロー。」

と言いつつそばへ寄ってくる明るさ（まあ、私が黄色く、黒髪でめずらしいということもあるのだが）。メイクはきつく、青や紫の線がパッチリと目の上にひいてある。暇さえあればコンパクトを開き、口紅を丹念にぬり直し、鏡にむかってイーツと口を開いてみせる。妻いのは体育の後の更衣室である。皆、脇の下や背中、髪へスプレーをまき散らす。ほぼ全員がスプレーを使うのだから狭い部屋の中はスプレーが立ちこめてモウモウ、どれが誰のニオイなのだかも分からない。セキは出るし目はジーンとしてくるしで、早々に更衣室をぬけ出るのだが、スプレーを使った覚えのない私にまで二、三種類の香りがしみついてきちゃう。

しかし、その外のことについてはほとんど無関心にみえる。教科書はカバンになど入れずそのまま手に持つからトイレへ入った時などに当然困る。すると、教科書をそのまま汚い床の上にドサリと置き、それをまたサッサと手でつかみ、手も洗わずにトイレから出て行く。おかげでトイレの床に教科書が忘れられているのを時々見かける。あらら、また置いていかれちゃったの？ と教科書を横目に見ながら私は思うが、トイレの床に落ちている本など、拾いあげる気にはとてもなれない。

こちらの学校には授業と授業の間に休み時間がない。そのせいか、授業中に息抜きをしている子もいるようで、つい何日か前、アートの授業でだったか、黒人の子たち数人がラジオをかけて踊っていた。年配の先生はカンカンであったが、その子たちは無視してい

るようだった。そのうち、私のところへも、

「踊らない？」

とのお誘いがきた。面白いのでいっしょになって踊っていたが、しばらくすると、

「日本のダンスを見せて欲しいんだけど。」

と言われ、困ってしまった。日本舞踊なんてやったことはないし、かといって踊らないわけにもいかないし……。結局私はええい、この際ダ、とカクゴを決めて

「月があー出ーた出えたあー」

と歌いながら盆踊りを踊り、ごまかしてしまった。それでもみんなはいたく感激していた。

また、お昼休みというものも無いが、お昼を食べるための時間さえも充分にない。狭いカフェテリアを交替で使うため、クラスによってたつぷりと時間をかけて食べられるところと、食べられないところがあるのである。私のクラスはいつも五分程度しかない。ひどい時は二分くらいのもので、生徒は目を白黒させて口につめ込んで間にも合わない。先生はいつも生徒を押しつけ、一番に昼食を確保し、二人分ほどを悠々と食べている。

英語が不完全な私にとって、得意な教科はやはり数学である。音楽やアート、体育などもかなり理解できる。その他の教科はあくびプラス落書き、または昼寝の時間にあてている。

体育の授業でこのところやっていることは、サッカーである。これならば言葉はなくてもできるものだから、私はけっこう楽しんで

いる。  
雨が降って体育のできない日は、体育館へ入り、レコードをかけ

てみんなで踊る。手をふり腰ふり頭をふって、学校独自のものらしいダンスをする。ふりつけがユニークなもので、みんなケラケラと笑い転げながら踊る。指導をしている先生の方もふき出してしまふ。これがとてもとても大好きな私は、毎日、今日は雨降らないのかなー、と空を見上げては雨ゴイをしている。他の子たちもこのダンスが好きだから、やはり雨の好きな子が多い。日本にいたころには、雨が降ると重たいカバンはあつたし、だばだば制服はビショビショになってしまうし、ユウウツになるような気分であつた。アメリカの子はまずそれについて心配はいらない。晴れでも雨でも朝と帰りはほとんどの親が車で送ってくれるからである。しかし、当然その時間帯は車がドツと押しよせ、大混乱になる。私は朝、英語の特別授業が七時半からあるため、母に車で送ってもらっている。こちらでは、七時半といえはまだうす暗く、月がポツカリと浮かんできたりする日もある。そして、帰りは十五分ほど歩いて帰宅するのが、そんな私を友達は「ローングウエイ!!」と評する。しかし、牧場のわきを、どんぐりとたわむれているリスを見ながら歩くのは楽しい。

何のかんのか言いながらも、結局は遊んでいる私。日本の中学のようなテストや勉強のない世界だが、今年の三月には帰国しなければならぬ。帰ってすぐ、中二から中三へ進級することはちよつと無理であるから、私はもう一度中二で足ぶみすることになるだろう。

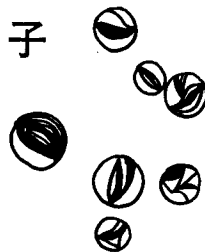
一九八四年は落第の年である――。

(ヒルズマンミドルスクール・八年生)

○'84年をこう見る○

## 岐路の選択

駒野陽子



一、オーウェルの予見は現実  
ジョージ・オーウェルの小説『一九八四年』が予見したそのま  
まに（巻頭文参照）、今権力主義社会のただ中に、私たちは一九八  
四年を迎える。

国際社会では、ソビエトのアフガニスタン進攻以来、その非を糾  
弾しつづけていた米レーガン政府が、グレナダへ武力攻撃をしかけ  
た。大韓航空機のミサイル撃墜、ビルマ中東の相次ぐ爆弾テロによ  
る大量殺人、と国連の対応も追いつかぬ東側の暴力的な攻撃に対応  
して、米国はとうとうたてまえをかなり捨てて、足下の小島を踏  
みつぶした。まさに二大国の権力をふりかざした高姿勢に、国際世  
論もなすすべを見失っている。東西の核軍縮交渉への期待も空し  
い。権力が権力を維持するために弱者を圧殺して恥じない社会で  
は、どんな美辞麗句も空しさをそそるだけだ。

国内では、田中元首相の有罪判決をめぐって国会が空転。全野党  
の声高な非難にもかかわらず、政権交替の可能性もないままに、国  
会は解散に追いこまれた。

影の権力者の居直りと、それをかばう同類たちの工作に、怒りを  
おさえられない人たちはたくさんいるはずなのに、国民にはなす  
べがない。総選挙への期待も、いくら何でも自民党支持率が下がる  
だろうか、という程度のもの。物質的豊かさの中流意識にからめと  
られた管理された大衆は、現状をひっくり返す力のないままに手  
こまねいている。

明らかに強権の発動は見られなくても、功妙に張りめぐらされ  
た管理の網の中、日常的な差別と格差が温存されたいわゆる「平  
和」な社会のあちこちで、人権侵害が行われながら、異議申し立て  
をする人たちを異端視する風土が私たちをすっぽりと包んでいる。

アメリカの権力に追隨して、グレナダからの米軍撤退の決議を棄  
権した日本政府。そして、その政府とその後にある権力者に手も足  
も出せない日本の民衆。私たちの状況は、オーウェルの『一九八  
四年』を上回る極限状況だ。その一九八四年。私たちに期待できる  
ものがあるだろうか。

二、女たちは眼覚めはじめた

## ○差別撤廃条約をデコとして

こうした現実の中で、更に差別と格差の人権侵害をうけている私たちの状況はいっそう厳しい。

経済発展をめざして、突っ走ってきた日本は、貿易摩擦の風当たりをかわすために、アメリカの要求に迫られて軍事大国化の足どりを速めてきた。ふくれ上がる軍事費と積年の財政赤字のつければ、福祉切り捨ての形をとって、国民のいばん弱いところにかぶせられる。家庭基盤充実というかけ声で、女たちに押しつけられる福祉の肩代わり。行革の名を借りて切りつめられる保育や老人福祉の予算。そして、工場、オフィスに導入されるオートメーションの波が、女性の職場を奪いとり、パート、臨時雇いの主婦労働者は、半人前の労働者として、家庭責任と低賃金の重さを肩に背負って、日本経済の底辺を支える。日本型管理社会の最大の被害者は女性たちなのだ。

しかし、その状況が極限に達している故に、この社会に対する異議申し立ては、女性の中から起ころうとしている。一九六〇年代から世界的に広がった女性解放運動が、国連を動かして、一九七五年、国際婦人年世界婦人会議を開催させた。国連は更に「婦人の十年」の行動計画を策定して、女性差別をなくしていくプロジェクトを組んだ。「婦人の十年」の最終年を目前とする一九八四年は世界の女性解放の高潮を力として、日本の女性たちが現体制をゆるがしていく好機である。

「婦人の十年」の中間年にあたる一九八〇年、コペンハーゲンで開かれた世界婦人会議では、全世界の女性の要求をまとめた婦人差別撤廃条約が提案された。日本政府も、国際社会のおつき合いで、し

ぶしぶ、この提案の採択に署名したが、署名したからには、条約を批准する国際的な責任を果たさなければならない。「婦人の十年」最終年にあたる一九八五年、次期国際婦人年をめざして、政府は条約批准のために、条約に抵触する国内法を改める準備を始めた。

父系血統主義の国籍法を、両性に平等な形に改正する案はすでに発表され、国会での採択が予定されているし、憲法、労基法四条以外に労働における男女差別を規制する法律をもたない法制の不備を補うために、具体的な労働上の男女差別を規制する雇用平等法制定を掲げて、検討もすすめられている。「家庭科女子のみ必修」の高校教育課程が条約に抵触する、という外務省の見解に対して、文部省は、抵触しない、と主張しているが、両者の意見調整も政府内ですすめられている。

国際的圧力に迫られて、ではあるが、男性優位の社会構造にどっしりと居直っていた政府が、曲りなりにも、女性差別をなくしていく方向をめざして、いささかでも動き出した今、女性たちは立ち上がるうとしている。

## ○たてまえを實質に

もちろん、政府の姿勢は、国際社会のおつきあい、の域を出ない形式的なものでしかない。既存の社会構造をそのまま温存しながら、法文の体裁だけを整えて、日本も女性差別撤廃につとめている、という体面をつくりさえすればよい、というのが本音であろう。

もし本気で女性差別をなくすことに取り組めば、経済成長を支えている日本の雇用構造を根底から崩さなくてはならないし、女に福祉の肩代わりを押しつける家庭基盤充実政策も撤回せざるを得ない。経済優先、軍事大国化路線も破綻してしまう。

国籍法の改正案が、さまざまな付帯条件のついた不徹底な形になったのも、平等法制定の前提として、「女性に対する深夜業や休日労働の禁止、時間外労働や危険有害業務就業の制限などを取り払うべきだ」「機会の平等が保障されれば、結果の平等は問わない」という世論づくりを推進しているのも、本気で性差別をなくしていくつもりがないことを示している。

しかし、おくれげながら、日本の女性たちの間にも、たてまえだけの平等では、自分たちの状況は決して変わりはない、という認識が広がりつつある。

深夜業や、時間外労働無制限の労働を黙って受け入れている男性たちと同じ条件で、たてまえだけ平等になったとしても、性別役割分業のしくみが強固に社会を支えている日本では、女が家庭責任の大部分を背負っているから、とても男たちと同じには働けない。男並みの平等では、かえってパートや臨時雇いなどに落ちこぼれる女が増えるばかりだ。男の働きを、もっと人間らしい形に変える——つまり、現在女性もっている特別の措置が、あたり前の労働形態となるような条件の下での平等——それがほんとうの男女平等というものだと思ひはじめた。

たてまえでない、「実効のある、雇用平等法」を、という要求が、女性たちの間で今、ようやく盛り上がりつつある。労基法も、女性の保護を取り上げるのではなく、男性の労働条件を女性の現状にそえる形で「改正」に、という運動と連動させながら、「真の雇用平等法」と「労基法改悪反対」を車の両輪とする運動が組み上げられている。

経営者、雇用者側は、「ほんとうの平等」を求める女性たちの動

きに脅威を感じ始めた。日経連の「雇用平等法は、日本の終身雇用制の労働慣行を危うくする」という反対の声明（これは発表直前になって保留となったが）は、もうたてまえもかなぐりすてて、現状を守ろう、とする男性社会の本音をあらわにした。

女性たちの要求は、現在の社会構造そのものをくつがえそう、とする根源的な現代社会への挑戦なのだ。日本の貿易黒字が、労働者の働きすぎと、女性差別によるコスト・ダウンというアン・フェアな優位性による、という認識が、国際的に広がっている現在、日本政府は、その矛盾をかわすためにも、国際信義の上からも雇用平等法を制定して、差別撤廃条約批准に踏み切らねばならないだろう。

たてまえと本音がかけはなれた政府の矛盾について実質的な平等を獲得し、社会の構造そのものの変革に迫れるか、否かは、眼覚めはじめた女たちの力がどれだけ結集できるか、にかかっている。雇用平等法をめぐって、男性論理の財界と、女性たちが、国会という立法府を舞台に正面から対決するのが一九八四年である。

#### ○女の人權の主張

男性と平等に働くことを妨げられている労働の場の性差別は、まさに自立を求める女性の労働権を侵害する人権問題である。平等法をめぐる女たちの闘いが、現体制の否定につながるように、高校家庭科の女子のみ必修反対の運動も、またきわめて反体制的な闘いである。女は「家庭に」という性別役割意識を、若ものの脳裡に刷りこんでいくことは、労働の場での男女平等を実質的に切り崩すことであり、家庭基盤充実政策を補強し、現体制を強化することになるからこそ、女性たちはそれと闘うのだ。性別役割分業が、女性の自由を侵害する人権問題であると知った女性の認識は、男女共修の家庭



科を通じて、男も女も、管理されることを拒否し「人間らしい生活」を取りもどしていく運動へと展開される。これもまさしく、生活、環境、社会構造のすべてを、根底から変えようとする運動である。

83年の前半、優性保護法改悪に反対して立ち上がった女性たちの運動も「産む・産まない」の選択に国が介入することへの抵抗であり、鋭い女性の人権感覚に根ざしている。軍事大国化を拒否する私たちの反戦運動にも、単に、戦争はいやだ、という感情を越えた、権力支配への反発がある。この二つの運動も、84年体制を切り崩す力となっていくだろう。女の人権意識が、現体制への脅威となる年——それが一九八四年である。

### 三、「教育」「学校」を問いなおす年

女性解放運動への期待とうらはらに、教育をめぐる状況には、明かるい展望がほとんど見られない。管理社会に圧しつぶされた子どもたちの苦痛の叫びとして現れた、校内暴力、登校拒否、家庭内暴力など、さまざまな現象が、かえって、しつけの強化や学校の管理強化の要求を引きおこす、という悪循環が今年も続きそうだ。

それこそ、権力者の思うつぼなのに、大人たちは、子どもたちを更に押さえこむことで事態を解決しようとする。子どもの側に立って、管理をはねかえしていかなければ、問題が解決しない、という認識を親たちが持てないのをよいことにして、権力者たちは、「教育制度改革」と称して、学制改革や学力別クラス編成など、いっそう選別と管理を強化する方向を打出そうとしている。

子どもの頹廃をくいとめよう、と身をすり減らす教師や、子どもの非行と必死に闘う親たち、文部省のいわゆる「教育制度改革」に反対の立場で、管理的な教育を排していこうとする学校も少なくな

いのだが、こうした努力が、個別の問題の解決に止まり、大きなうねりとなって、体制をゆさぶる力になり得ないのが、教育問題の悲劇である。

それは「教育」とは何か、「学校」とは何か、という、子どもの側に立った問い直しの弱さに起因する。家庭科の男女共修運動や、本誌「We」の理念である、子どもが「自ら生きていく力」「人間らしい生活を奪い返す力」を育てることこそ、「教育」と呼ばれなくてはならないし、家庭も、学校も、その力を育てていく場である、という認識が、まずすべての大人たちのものにならなければ、教育という名の管理がいつそう強く、子どもたちを押しつぶしていくだろう。

今の学校は管理社会のイデオロギーである学歴主義を助長する選別の場、となり果てた。今の学校制度は大人の管理社会の縮図であり、学歴は管理社会へのパスポートである。管理社会で、管理する側に立つためのパスポートを奪い合う競争——それが「教育」という名で呼ばれていることにまず気づくこと、そして学歴偏重や、学校信仰から抜け出すこと——それなしには教育についての論議は、混乱から抜け出すことができない。

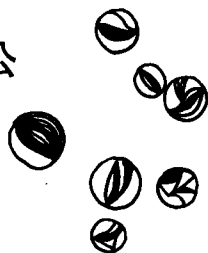
管理されきった無気力な子どもたちは、暴力によって自己主張をしようとする子どもたちより、もっと深刻な状況にある。欲望をかき立てる商業主義や、打算に支配された物質主義、そして氾濫する情報にふりまわされて、自己を見失った子どもたちの頹廃は、ますます進行してゆく。「教育」という名の管理、それによって強化されていく管理社会化への告発が今年はどう展開されていくか、ここでも岐路の選択が迫られている。(東京都新宿区立牛込第一中学校)

○ '84年をこう見る ○

## '84 文化のひとびと

——カタログ風に

松田博公



ぼくの二番目の息子の描く絵の右肩にはどーゆーわけか、いつも太陽がちよこんと顔を出すのだ。光はさん然とは程遠く、つつましやかな点線で赤い球体をとりにまいてる。友人で浅利式色彩診断の達人、末永蒼生によれば、太陽は父親のシンボル。彼の画塾に来る子どもたちも黄色や黒など想い想いの色でそれを描く。色や形は父親とのかかわりの質を示すのだとゆー。そこで、ぼくは、ちよつとしよぼくれている彼の太陽が好きになる。だって、絵の右端に心細く、でもそれなりに輝いているのは、ぼくと彼との関係なんだから。

文化もまた、そーゆーものなのか。判じ絵の絵解きをしてみれば、その貧しさはぼくらみんなの生活の貧しさだとわかってしまう。鏡に映る自分の姿に眼を閉じて、つつぱり、つつ走る。もう十数年前、ベトナム戦争と大学闘争のころの若者文化に、そんなクライイ気分がなかったとは、ぼくにはとても言えやしない。「取り乱し」リブの田中さん（あのみ津さん）が、最近まとめた、この十年の表現集『何処にいようと、りぶりあん』（社会評論社）で、「主観

も徹つすれば客観に通ずる」と挑発しているよーに、あのころ、自己嫌悪も徹つすればすべて愛につながると、「全世界を獲得する」論理に執着し、大言壮語して背のびするぼくらがいた。

でも、一九八四年にもなれば、このスタイルはダサイ、売れない、流行らない。なぜって今をときめく広告社会の前衛、コピーライターのひとびとがそーゆーのだからそーなのだ。

「だから、何かに対する自分の距離のとり方だけじゃないかって気がするのね。その出てくる制作物というのには、単なるその結果にすぎないなと思います」（川崎）「なんて言うかなあ、身の丈ちようどの発言をしていかないとまずいんじゃないかって気がするんですよ」（糸井）

川崎って「ハエハエカカカ」の徹（とーる）さん、糸井って「不思議、大好き」の重里クン。'83年八月十八日、東京・新宿、紀伊国屋ホールで開かれた広告集会'83「メディア大研究」での発言でした。うーん。素晴らしい才能たちにこー言われると本当にソーダ、と思

ってしまふ。でも、この淋しさは何だろう。「淋しさを焚いて荒野へ往け」。ぼくが初めて「等身大の思想」ということばに出会ったときはハタという感じ。七〇年代前半、鶴見さん（つてあの俊輔さん）たちの『思想の科学』のあたりから、それは聞こえて来たのだったよーな気がする。「六五年、日韓条約の締結いらい、日帝は東アジアに着々と円経済圏を……」と説き起こさなければ、ラブ・レターも書けなかった。そんなぼくの観念のV・S・O・Pに、もっと自然に自分流に人生を想っていいのだと、そのことばは伝えたのだった。

バランスというよりも矛盾、対立するもののダイナミズムが人間、とトートツに結論めかして言ってしまう。身の丈をいつくしみ、生活の細やかなひだに、森崎和江さんの言う「隣りのあなた」の声を聴き取る日々の営みのなかで、心はふと見上げた空のかなたの観念に背のびする。「マルクスの世界思想の先端の意味と価値の脱構築はどうなってるの?」。どっちも、どちらも、ぼく。いや、ドゥルーズ・ガタリの言うn次元のぼくの、各次元のずれと調和、矛盾の創り出す流動の中にぼくの総体は息づいているはずなのだ。

今って、それでなくても、誰もが距離を取ってしかひとやものに触れ合えない。どんなに欲望をかきたてても身の丈に届かない。そんなシラケた、セコイ時代。おれたちやつぱりダメなんだよな。出来合いの制度と商品にはさまれ、カタログ文化の賢い消費者にしか血路の拓けないひとびとのため息を、ラディカルにすくいとりつつ成立するメディア・ヒーローたちの思想に、バーロー、ぼくはムカつく。

「広告板がせめぎあいの場として活用されているところに糸井の方

法の特色がある。だが、広告板がやがて糸井流の活用をゆるさない性格のものとなる時が来たら、彼はどこに行くだろうか」（『広告批評別冊・糸井重里全仕事』の一文より）

こんな鶴見さんの心配にもかかわらず、面白くてタメになる糸井クンを会社はどこにも行かさない。だって、G・オーウェル氏のよリスゴイ「一九八四年」はもうやって来てしまったのだ。糸井クンとともに。マス・メディアによる表現とライフ・スタイルのパッケージ社会として。前世代の知識人たちが口をそろえて予告する近未来の「右傾化」「軍事ファシショ化」よりも、「無傾化」「ファシジョン化」の方がはるかに現実的で怖ろしい。保坂クン（あの展人クン）と認識を同じくしながら、ぼくはマジにそう思う。

何だか営業上の利害がらみの言葉が思想のよーな顔をするのが八四年文化状況だと思えてきた。コピーライターがアカいコピーを、教授が手の届かないウンチクを、評論家がワカラナイ論評を、医者、弁護士が優しい勧誘文を、政治家が不安な警告を、そしてジャーナリストが誰も知らないニュースを売るとき、ぼくらは健康に、「それがどーしたの」といつまで言えるだらうか。思想や生き方をマジにそこに探ろうとすれば、たちまち乗せられる。大衆参加がなければ、文化は、いや文化産業はやってられないのでアル。

あの、戦後サイコーの思想家、吉本隆明さんさえ、相対的に感性の開かれた新進作家たちを過剰に誉めまくるのはなぜなのか、ナゾは解けていないのだ。「王は未来の王を怖れる」。誉め殺しのイジワルか、次代の読者とながる無意識の巧智なのか。「優しいサヨク」の島田雅彦クンは、過日、糸井クンのTV番組で、かつての闘士のひとびとに、ぼくらを誉めるより、この時代のだめさかげんに共苦

し、共に闘え、と言ったよーな気がしたのだった。

見渡せば、花も紅葉もなかりけり、明日から仕事にあぶれるよーな非営業的で危険なバフオーマンスには、とんとお目にかからない仕組みができて上がっているよーな感じなのだ。

朝日新聞の筑紫哲也編集委員が田中判決の前にロッキード世代について書いている。

「最近の世論調査では、二十代前半の人たちが『なんでも金で解決できる風潮』などに対して他の世代に見られぬ『ものわかりのよさ』を示している。……元総理大臣〓刑事被告人の『閻將軍』を頂点に、むき出しの本音で開き直ることがルールとなっていた社会に、私たちは生きてきたということだろう。……その時々々の習俗や慣習のなかで次の世代が育っていく」

マス・メディアがカプセルのように生活をおおう社会で、それを問うことなく習俗を論じていーのだろうか。何はともあれ、ジャーナルことはいーことだ、とジャーナリストが信ずるとき、彼は教化・訓育はいーことだ、の体罰教師と変わらない。

君たちノ万引きしちやいけないとあれほど道徳の授業で教えてあげたのにノ居眠りしていたのかいノバシッノ（スキんシップの音）語ったオトの響きがそのまま意味などでないことは、「オトーサン、オカーサンヲ大切ニシヨー」の人類一家オジサンのCFから全国の子供たちが学んでいる。どんな美しい徳目もマスコミと学校が掲げると、とたんに色あせ、ウサン臭くなる。そう感じ取れる感性って本当はとも大切だと思うのだ。思えば昔から、それはまっろわぬ庶民のデイクーの基盤であった。

角栄やあの「ドッキ・ヨット・スクール」の戸塚宏がヒーローの

よーなものになったのも、筑紫編集委員が分析しているよーな庶民好みの習俗の目くらましによってではなく、また、マスコミの教化・訓育の不十分さのためでもなかった。むしろ悪業キャンペーンの徹底的完成によってではなかったか。法的正義のコードが作り出した田中と戸塚の悪人像は、詳しくなればなるだけ、どこにもいない角栄と宏。たて前の行間から多量にこぼれ落ちる生身の彼らこそ地下に潜って庶民の心の闇に生きる。

このよーにして、情報化社会になればなるだけ、なぜひとびとは情報に、つまり社会にシラケてゆくのかとゆー、メディア論中の難問にあっけなくぼくは答えてしまったのだった。でも、まだ半分。マス・メディアを通せば、語りは記号に、交流は一方通行になり、発信者・受信者は分業化する。それにつれて、ひととひととの関係は抽象化する。それにつれて社会統制と権力が巨大化する。それにつれてひとびとはシラケる。このめぐる因果のさらなる難問を氷解し、「メディアアってお祭り。権力が反権力かわからない」と語る若き文芸評論家、三浦クン（あの雅士クン）の誤解を解きたいが幸いなことに紙数はないのだ。

だが、多くの読者のひとびとが気づいてしまったよーに、このメディア作用はわが町の学校の教室やニューヨークの国連本部にまで花開く、八四年文化状況ではあるまいか。

さしあたってぼくらは、社会人の有効な道具として、国連唱導の「人權概念」を持つている。「そうだば」「うんだば」と肌つき合わせた納得で物事を処理できない近代社会。けれど身を守る「人權」の刃は両刃なのだ。切っ先の鋭さは個々の生活の持ち味をも料理しかねない。女性、こども、障別害者、被差別部落民、朝鮮人……。在

大阪の沖繩人彫刻家、金城美さんが語ったように、「差別だとかぶしを振り上げるより、己れの踊りを踊ること。輪の中に相手を巻きこむこと」。個有の抑圧の歴史を持ち、独自の放たれ方の可能なひとびとが、差別撤廃条約、国連印の人権ナベで同じ味つけにされてしまふのはやっぱりつまらない。どーやら運動というメディアもまた抽象化のシラケを産み出したよーなのだった。

「いまなお人間そのものの方が人間の作った文化より上等なのだ」というアドルノの言葉がぼくは気に入っている。デュシャンも「芸術って歪んだ生き方。生活こそ大切」と言った。「言語から生活へ」は確か初期のマルクスと後期のランボーのするーがんであった。さ

## ＊　　＊

### 「テレビ残像」の

#### 野村康子さん

男が罹るという中年躁鬱病に、女も罹るのか、本日の女二人躁状態とみゆる。

「私今とっても幸せで、この間も友人に幸せのおすそわけでごちそうしちゃった」。じゃ、今日も、とつられそうになるくらい明るい声。「しばらく落ち込んでいたんだけど、十月初め、小さい新聞記事で市民講座『戦後思想を考える』四回、講師鹿野政直というのを見て、つけてさっそく申し込んだの。鹿野さんは十

らなる教養をひけらかそーとしても日本人のこんなタンカを聞くのは難しい。「大衆のゲンゾー（原像）」を思想に繰り込めとゆー戦後サイコーの思想家の卓見も限りなくマスコミに浮上し、今やハタタとじよう舌に風に舞っている。遅れて近代を迎えたこの国に、早すぎる超近代が訪れているのだ。

学校というメディアを含めた、マス・メディアの激しいしごきに合っている、文化とゆーぼくらの「スパルタの海」。泳ぎ渡る遊泳術を一日も早く習得できますよう。年頭にあたって皆様とともに祈る次第です。

(ジャーナリスト)

五、六年前から仕事上で何回かお会いして、会うたびにいつも、こちらの商業ベースの要求と、向うの学者としての立場がなかなか一致しないから、しんどい、しんどい話し合いがあつて、その後十年くらいは本を贈っていたんだけど、感想を送ったりの関係だったの。先日、一回目があつたんだけど、資料は五〇頁、三時間のうち一時間は講義、後は質疑応答、受講者は十五人。緊張感はあるし、自分が燃えているなと思えるのがとてもうれしい。

大学卒業後、出版社の編集部に勤務。こゝで職場結婚。その後の育児奮闘を語るのは、ベビーシッターが三十人という数だろうか。

今、最愛の一人息子は小学五年生。相手もあなたを愛していると思いますウ。「ええ、移動教室で二泊して帰ったばかりだけど、会いたかったよって抱きついたわよ」と澄まし顔。子別れの儀式に、母子で屋台のラーメンをすすったという人がいましたっけ。彼女はともその程度で済みそうにはないと見受けました。私も下の子は同年齢。ひよっとすると我々二人がラーメンをすすっているかもね。先頃、校正部からもとの編集部に戻った。その情熱と努力と勤勉に、私はいつも敬服しております。カットワークのスカートの裾がさつそうと揺れて行きました。

(中野敬子)

## 富田女子高校の試み

田 中 良

一、教育はこれでいいのか  
横浜で中学生らによる無抵抗の「浮浪者」を襲撃し、殺傷するという何とも陰惨で胸苦しくなるような事件が発生してから、まだ一年にもならない。この事件が教育界に与えた衝撃は、計り知れないほどのものがあつたはずである。これは、まさに教育という存在そのものが根底から問われなければならない事件であつたと、私は思う。

この事件が、横浜だけで偶発的に起こつたものでないことは明らかである。

町田市の中学教師が生徒を果物ナイフで刺した事件もこのころであつた。教師が生徒を傷つけたという事の異常さに世間は眼をむけたが、じつはこの刺された生徒たちが、以前からこの病身の被爆教師を「ゲンバク病」といつてからかい、とりかこんで暴力をふるつていたという寒気のするような陰湿な背景が、この事件にはあつ

た。また、事件直後の真相糾明のPTA総会で、この学校のある母親は、おとなしい息子がいじめっ子たちによるリンチで肛門に石をつめられ、裂傷を負って入院したこと、学校に言えばいっそうリンチが予想されるから泣き寝入りしていたこと、などを涙ながらに告発したという。

横浜や町田の事件と本質的に変わらないような事件が、じつはこの岐阜の地にもいくつかが発生しており、このような事件が起きる素地は全国に共通した傾向としてあることはまちがいない。

ところで、こうした事件を眼の前にして、いったい今の子どもたちはどうなつてしまっているのか、われわれ大人にはわからない行動に走ることが多い、という人がある。しかし、はたしてそうだろうか？

「今の子どもたち」をそのように育てたのは、まさに「今の大人たち」以外の誰でもないという自明の事実を、正面から見つめなければならない、と私は思う。「昔の子どもたち」も「今の子どもたち」

も、生まれたときは同じ赤ン坊であつて、「今の子どもたち」に限って生まれたときから「非行性」をもっていたなどということはありません。私たち大人が、そのように育ててしまったのであつて、一切の責任は、ほかではない私たち大人にあるのだということをもっと深刻にうけとめる必要があるのではないか。

それでは、今の大人たちは、子どもたちをどのように教養育ててきたのであろうか。

大人たちは、教育をサボつてきたのだらうか。いや、世はまさに「教育」の時代。テスト、テスト。塾、塾。書店に氾濫する「教育」のノウハウ。親も教師も、そして子どもまでが偏差値でものを考え、人を見る。序列、選別、差別。これでは、落ちこぼされたものはいったいどこへ行けばいいのか。

人間の尊厳や連帯、人間らしく生きていく力が育てられていないならば、人間としての価値を認められなかったものは「野良犬」になる以外にはないか。私には、非行・愚行に走る以外に存在を主張する道を知らなかった子どもたちの、悲しげな遠吠えのような声が聞こえてならないのである。

## 二、欠けているものは何か

大人たちは、こういう風潮をもたらした社会悪の根源に眼を向け、それを取り除く努力をする責任があるが、それと同時に、人間の大人として人間の子どもたちきちんと教養なければならぬだいいじなものを、ちゃんと教養してきたのかどうか、反省する必要があると思う。人生の先輩として人生の後輩たちに、もっと自信をもつて教養てこななければならないだいいじなものがあつたのではないか。

英単語や数学の公式や歴史の年表のほかに、文部省の名においてではなく、平和と民主主義を愛する国民の名において、何よりも「人間」の名において、子どもたちに教養てこななければならないだいいじなものがあつたのではないか。お互い人間同士として、人間社会を構成し発展させていかなければならない一員としての資格・義務のように、まず身につけていなければならないものがあるのではないだらうか。

たとえばその一つに、人間同士の関係のあり方のようなものがある。

弱肉強食というのは、本来、動物の世界の自然淘汰の法則である。弱いものは脱落し、切り捨てられ、消滅する以外にない。しかし、人間は違う。人間は、社会的生産関係を発展させるなかで、協力・協働の人間関係を生みだし、そのことをつうじて、助けあいや連帯や人間尊重の心を自分たちのなかに育ててきたし、そのことによって人間は自分たちを人間にしてきたのだ。だからそれは、それが無ければもう人間とはいえないといつてもいいほど、人間にとって基本的な条件なのだ、と私は思う。

病人を見舞い、老人をいたわり、障害者に力ぞえをしようとする行為は、他の動物には見られない、人間だけが育ててきた連帯と相互尊重の心の発露ではないだらうか。そしてそういう心は、やはり人間の大人たちによって人間の子どもたちの中に、人間の文化の一つとしてうえつけられ、教養こまれ、発展させられてきたものではないだらうか。

今の子どもたちは、大人たちからそれをきちんと教養られていただらうか。人間の名において教養られていただらうか。私たちはそ

こに注目し、こだわりつづけたのである。

残忍な弱いものいじめの横行を許すならば、それは人間を動物にまで引き下げることにはかならない。だから、弱いものいじめの発生に対しては、まだ小さな芽のうちに、教師は人間の尊厳をかけて、真正面から断乎として立ちはだかなければならないものなのである。

思いやりや助けあい、人間だけの文化なのだから、人間の大人たちが、子どもを人間に育てるにあたって、折にふれて教え込み、はぐくむべきものだと思う。

「それは、家庭や社会の責任である。学校教育の中でおこなうとしても、低学年のうちにやることだ」という意見がある。しかし、高校に入ってくるまでの間に、そういう最もだいじなことが十分に教えられ、育てられていない以上、われわれが高校教育の中で勇氣をもってやっていこうじゃないか。そしてそこに、われわれの教師としての生きがいの一つがあるのではないか。

ここに、「人間関係」「女性学」「くらしと憲法」などの科目新設をふくむ富田高校の現カリキュラム編成の立脚点の一つがあったのである。

### 三、数年間の討議をへて

私たちの学校では、一九七五年から、毎年同じ時期に「生徒の学習・生活状況実態調査」を実施している。これは、生徒の実態を把握し、実情にあった指導計画をたてるための一助となるものであるとともに、私たちのとりくみの結果をうつしだしてくれる反省材料となっている。

実態調査にもとづいて生徒の学習状況や生活状況を分析し、討議するなかで、私たちはカリキュラムの抜本的な洗い直し、全面的な再検討が必要であるという考えに到達した。最初の二年間は教育研究部の部内だけの討議であったが、七七年からは職員合宿研修会での議題として提案し、全職員の討議に付していった。それ以来、五年間にわたって全職員討議が重ねられたことになる。

このうち、八〇年の合宿研修会で確認された「新教育課程検討の基本方向」は、次の八点を柱にしたものであった。

- (1) すべての生徒に基礎学力を
- (2) 健康な身体を形成し体力をつける
- (3) 豊かな感性と情操を育てる
- (4) 国民として、市民として、民主主義者として必要なモラルを身につける

- (5) 生きる目あてと進路指導の問題
- (6) よい仲間づくりと、仲間と働くようこびを育てる
- (7) 人生設計に役立つ教科学習の徹底
- (8) 母親としての責任を自覚し、子どもの健全な成長を図る能力と態度を育てる

これらの柱は、やがてその後の討議や研究をつうじて、体育や芸術の単位をふやす、LHRを週二時間とする、基礎教科の充実と入門指導の強化、希望や進路にもとづく選択制の導入、「人間関係」「女性学」「くらしと憲法」など独自の科目の開設などに具体化されていったのであるが、このなかで、とくに新設の三科目について論議が沸騰したのはいうまでもない。何しろ教科書のサンプルもなければ、他校の例もない。自分たちで内容をこれから考えていこうと



いうのである。

八〇年に初めて提案したときは、科目の名称もまだなくて、とりあえず仮称でそれぞれ「礼法」「保育」「公民」などとよんでいた（内容的にはまったく独自のものをつくらうとしていたが、名称だけは既成のものを借用していた。そのことも混乱の要因になったかもしれない）。また、これらの科目を誰が、どの教科が担当することになるかもわからない状態で、疑問や不安が続出するのは当然のことであった。第一、提案した私たち自身が、こういう仮称をつけていたことからわかるように、認識や考察が不十分で未熟であやふやなものであった。

八一年の合宿研修会では、「人間関係」「女性学」の内容・骨子について提案し、基本的に承認を得た。八一年後半からは、校務委員会・教科主任会・教育研究部の総勢二十数名からなる教育課程検討委員会が設置され、ここで教育研究部提案のカリキュラム案全体について検討し、大幅な修正を加え、最終案を作成して、委員会として職員会議に提案・決定された。

さっそく、「人間関係」と「女性学」のそれぞれのプロジェクトチームがつくられ、指導目標や教科書づくりに入る。これら二科目のプロジェクトチームのメンバーは、出身教科に関係なく選ばれ、また、「くらしと憲法」は社会科の中に位置づけられた。

カリキュラム編成上の技術的な問題から一部のコースでは変則的になっているが、原則として全校必修として、八二年度の一年生から「人間関係」（一単位）、八三年度の二年生から「女性学」（二単位）がすでに開設され、八四年度の三年生からは「くらしと憲法」（二単位）が開設される予定である。

#### 四、人間として、女性として、国民として

私たちのカリキュラム討議をとおしてつらぬいてきた姿勢は、与えられたカリキュラムやよそまねのカリキュラムではなく、また教育以外の動機から方向づけられたカリキュラムでもなく、私たちがこんな人間に成長してほしいと思い、そのためにぜひ教えたいと思うこと、教えなければいけないと思うことをはっきりさせて、それをカリキュラム化し、教材化しようということであった。

それはまた、本当は生徒自身の要求でもあると私たちは思う。例えば、実態調査のなかでも圧倒的多数の生徒が「人生の話をしてくれる教師」をのぞみ、「社会に出てしっかりやっていけるように」成長させてほしいと願っているのだ。

討議をつうじて徐々にはっきりしてきたことは、私たちが生徒に望むことは、第一に人間として、第二に女性として、第三に国民として、立派に生きていってほしいということであった。それは、生徒たちをまず人間としてとらえ、次にその中の女性としてとらえ、さらに未来の主権者としてとらえるという生徒観に根ざすものであった。

そういう観点から、私たちは三つの科目を、一年生でまず人間としていちばんだいじなことをきちんと教えるために「人間関係」を、二年生でこれからの女性の生き方を考えさせるために「女性学」を、そして三年生では未来の主権者としていちばんだいじな憲法感覚を身につけさせるために「くらしと憲法」を配置したのである（この点については、去る八月に岐阜で半田先生を囲む会が開かれ、そこで私が富田高校の実践報告をおこなった際に、半田先生が

ら、日本女子大の創立者成瀬仁蔵先生がすでに八十年も前に女子教育について「人間として、女性として、国民として」教育する考え方を唱え、しかもこの順でなければならぬと説いておられたことを教えていただき、不明を恥ずかしく思うとともに、偶然というべきか、いや必然というべきか、いずれにしても大きな感激を覚えたものである」。

そもそも、我田引水式にいわせてもらえば、人間として、女性として、そして国民としての本当に最もだじなものを、まず全員が必修科目として学んで、その上に英語や数学や理科やその他一般教科を積み上げてこそ価値があるのではないだろうか。誤解をおそれずもつと極論させていただくならば、それらのだじなものを学ばないで、各教科の知識だけつめこんだとしても、それだけでは何の価値もないのではないか。知識だけの一人あるきは、むしろ人間社会を不幸にする場合さえあるのだから。

人間を愛する心を育て、生きるめあてを考えさせ、生き方を追求させることと深く結びついていてこそ、本当の学習意欲も湧き出てくるのではないだろうか。その、最もだじなところが置き去りにされて、生徒たちは生きることのすばらしさや学ぶことの喜びもつかめないままに、そして人間としても全く未成熟なままに、コマ切れの知識のつめ込みだけを強要されてきたのではないだろうか。私たちは、カリキュラムの中に、そういう基本をしっかり位置づけようと考えたのである。だから、最近大学で開講されている「人間関係学」「女性学」とは全く無関係に、これは自分たちで創り出した我流の科目であり、不備な点もめだが、これから何年もかかって埋めていきたいと思っている。

## 五、「人間関係」「女性学」「くらしと憲法」

「人間関係」では、人間として生きていることの喜び、人間同士の助けあい、思いやり、やさしさ、人間同士のかかわりあい方、相互理解の努力、集団と個人、自由と規律、民主的な人間関係、人権と差別、障害者や福祉の問題、戦争と人間、他人の労働をだいにする心、道徳・慣習・エチケットについても学ばせたい。何よりも、人間をだいにする心、自分と他人をだいにする心を養いたい。その心が育てば、必ず戦争と差別と不正を憎み、一人ひとりがだいにされる社会を望む心につながっていくはずである。教育とは、希望を語り、未来を語るのだといわれる。つまり、教育とはよりしあわせな新しい時代を準備する仕事である。そうでなければ、私たちは教師をやっている甲斐がないではないか。

一方、「人間関係」の授業担当者の悩みもないわけではない。第一にテキストがない。現在、十二クラスを四名の教師が担当しているが、大まかな指導目標はきまっていますが、毎時間の授業内容は各担当者にまかされている。今のところ、この科目の場合、型にはまった教科書をつくらない方がいいと、私たちは思っている。そのかわり、毎時間の授業内容は自分で創らなければならない。毎時間が待ったなしの真剣勝負だ。それぞれの教師のもっている人生体験や知識や個性がものをいうことになる。教材研究や日常の読書に時間をとられる。

そういう苦労の多い「人間関係」の授業ではあるが、自分たちが最も教えたいことを、それぞれの創意工夫で生徒に切り込んでいく授業だから、教師にとっても勉強になるし、生きた授業として生徒

の期待も大きいわけである。

次に生徒の感想の一部を紹介させていただく。

「私はこの『人間関係』という授業があることで、富田についての見方が変わった。他の学校にはない素晴らしい科目をもった学校だと感じたからだ。この授業を受けていると、自分の考え方というもののがハッキリしてくる。この授業によって、一步一步良き人間に近づいていけるように思えてくる」。

(くに子)

「今までの授業から、相手の立場になって考えてあげることが出来るやさしさが何よりも大切ということや、そのやさしい心をつくってきたのは私たち人間なんだ! ということがわかりました」。

(裕美)

「『人間関係』の授業をうけていると、ときには自分に対してはめれるようなことがあったり、ときには『ああ、自分のこういうところはいけないんだ』と反省するところがあったり、何となく自分が少しづつ良くなっていくような気がします」。

(亜弓)

「この授業をうけていると、今まで気づかなかったこととか、何げなく過ごしてきたことが、じつはとても大切なことだったりしてすごく役に立つことばかりだ。週に一時間しかないのが残念です」。

(恵美)

「こういう授業がすべての学校にあったら、きっと世の中は少しはよくなるのではないかと、私は思っています。最近では、人間であることにしあわせを感じるようになりました」。

(恭子)

次に「女性学」であるが、これは、本校での一〇年来の性教育専門委員会での勉強会や、各クラスいっせいの「性教育ロングホームルーム」の積み重ねを基礎として、さらに女性史や生き方の問題を

加えて総合科目として発足したものである。

私たちの学校は、まもなく創立八〇周年をむかえる私立女子高校であり、共学をのぞむ声はかなりあるが、諸条件からして今すぐ共学が実現するという状況にはない。そうであれば、現代の女子教育はどうあるべきかを考えてみようではないか、すばらしい女性に育つための条件は何かを考えてみようというのが、本校の「女性学」のはじまりであった。

「女性学」の場合は、内容からいってやはりテキストが必要であると考え、プロジェクトチームは一年がかりでやっと教科書をつくりあげ、八三年度からの開講にまにあわせた。急ごしらえのものであるために、さっそく改訂版の話がでている状況であるが、授業での手ごたえもあり、ことしの文化祭では、「女性学」からヒントを得た演し物がいくつか出てきて、徐々にではあるが、生徒の中に定着しつつあると思う。

「女性学」教科書の目次は、次のようになっている。

## 序章

### 第一節 女性学を学ぶにあたって

#### 第二節 青年期の位置

## 第一章 女性と歴史

### 第一節 我が国における女性観の変遷

#### 第二節 西欧における女性観の変遷

#### 第三節 現代における女性観

## 第二章 新しい生命を生み育てる

### 第一節 女性の性器官とその機能

#### 第二節 妊娠と出産

### 第三節 性行動と性交

#### 第四節 異性を知るために

#### 第五節 母性保護

### 第三章 賢く明朗で自立した女性となるために

#### 第一節 女性の自立

#### 第二節 結婚と離婚

#### 第三節 生命を育てる能力

#### 第四節 次代をになう子どもたち

#### 第五節 未来をみつめて

### 第四章 愛とは何か

#### 第一節 愛とは何か

#### 第二節 自然的愛と人格的愛

#### 第三節 愛することと生きること

### 終章 自由で豊かな人生を

#### 第一節 たった一度しかない青春

#### 第二節 美しさと魅力

#### 第三節 自分の中に、もう一人の自分を

#### 第四節 自由に飛ぶための翼を

「女性学」に対する生徒の感想は、次のとおりである。

「全国でもめずらしい『女性学』という授業。こんな授業役に立つのか、と思った。それに『女性学』を学んだら女性が変わるのかという疑問もあった。それが今、教科書の途中まできて、逆にどのようにしたら私自身や女性自身が変われるのだろうかという課題に変わってきました。そして、私は少しずつその自分の課題を終えています。そのように変わってきたのは『女性学』を学んだからな

のです」。

(弘子)

「人間の体というものは不思議だと思いました。自分の体の中でもう一つの生命がつけられていくのだから……。そして女性はその生命を守っていく。いろいろ学んだけど、女性って偉大だなあとつくづく思いました」。

(幸恵)

「この教科を学んで、家でもいろいろ言えるようになりました。最近も姉が『男の人ってえらいねえ』と言ったので、私はすぐ『男だけがえらいんじゃないよ』って言ってしまいました。私は心のどこかで、この『女性学』で学んだ女性の生き方のようなものが根付いてしまったような気がします。私は女性という性に自信をもって生きていくべきだと思います」。

(若美)

「くらしと憲法」については、来年度開講を目ざして、今社会科の中の担当者が内容を検討中なので、ここでふれるのは差ししかえないと思う。ただこれも「憲法学」ではなく、「くらしと憲法」の名のとおりに、国民生活の根本基準としての日本国憲法を、生活実態の中で考え、憲法感覚・憲法意識というものを身につけさせ、確かな主権者として成長させたいと思うものである。

六、おわりに

私たちのカリキュラムは、私たちが考え、創りだした我流のものである。十分な研究や準備もないままに、「まず始めよう」ということでスタートしたものであり、また私たちの力不足や未熟さのせいもあって、内容は恥ずかしいかぎりである。これから年を追って充実させたいと願っているので、いろいろな率直なご批判やご教示をいただけたらありがたい。

(岐阜・富田女子高校教育研究部長)

## 新しい家庭科を創るために

\* 小学校では \*

福田三津夫

## 二年間の食べ物作り

### 一、息子と娘の家事労働

六月号に報告した我が家の家事・育児の分担表を部分修正しなければならなくなっている今日このごろである。私たち夫婦のミニコミ誌「啓」に妻が執筆している「子どもべや」という欄がある。ここに子どもたちの成長の様子が描写されるのだが、三十三号にこんなことが書かれている。

——啓……八歳五カ月、三年生。奈々子……四歳四カ月。

記念すべき日六月二十五日の朝、啓は一人で六時に起き、トマトを切り、ドジョウインゲンをいため、肉をしょう油につけて焼き、夫と、私と、自分自身の三人分のお弁当を作ったのだった。ごくたまに、夫のデッカイ手でギューギュー握られたオニギリを「愛夫弁当」と称して食べたことはあったけど、「愛恩弁当」は生まれて初めてで、生いためのインゲンでさえおいしく感じられたものだ。

そもそも何でこんなことになったのかと言えば、彼が遅くて私が疲れたりした日に、奈々子と啓だけで食事を一応整えることが何回かあって、自信がついてきたのと、奈々子がある日、「ナナコねえ、小学生になったら自分でお弁当つくる」と言ったのが気になっていったものらしい。前の晩に、

「お母さん、あしたのお弁当のおかず、何」

と聞き、これなら自分でできると決断して六時に目覚ましをかけたらしいのである。口頭で啓がお弁当を作るとは言われていたけど、本当にできるのかナと軽い気持ちでいたら、ユメウツツの私のところに来て、

「お母さん、ちよつと食べてみて」

とインゲンを差し出したのだ。この日、夫も私もこのことを同僚に吹聴したのは言うまでもない。

その後二度目のお弁当はまだ実現していないが、奈々子が食器洗いをしたいと言い出した。啓の食器洗いは三年になってじきだっただらうか、水・土曜日と決めて実践されてきたが、奈々子もお兄ちゃんとかわりばんこにやりたいと言って、火・木・日曜日を選んだ。こと、家事に関しては、将来のためにやりたいと言ったことは最大限やらせることにしているので、奈々子にも食器の洗い方を教えてやった。もちろん陶器だからいくつか割れるのは覚悟の上である。小さい手でいいいに洗い、そつとカゴに入れる動作は、これ

また啓より安心して見ていられる。ただ、イスに乗らなければ流しに届かず、そのイスが少しずつ後ろにずれてしまうのがこわいらしく、「お母ちゃん。このオイスにすわってて」と重しの役をやらされる。二回目からは安心して、私は夕刊を手を奈々子の重しをハイハイと務めるのだ。曜日の感覚もまだよくわからないようなのに、不思議にその日になるとサッサとイスを流しに運ぶのがおもしろい。

『We』の読者でもあり、横浜の小学校教師である鈴木正美さんがこれを読み、自分の組の四年生に話したらしい。しばらくして、六人の子どもたちから啓への手紙が届いたのである。その一人はこう書いている。

——啓くんへ お手紙文

田口 美穂

啓くんしつもんなんだけど、お母さんがほんとうに自分でおべんとう作りなさいって言ったの。えらいね。まだ三年生なのに。奈々子ちゃんまだ四歳なのにしよっきあらいやっているの。私の妹五歳でようちえんいつてるのよ。奈々子ちゃんは、お母さんにお父さんにどっちな。啓くんお友だちいっぱいいる。私もいるよ。——

ところが啓はいっこうに返事を書くとうしないのだ。幾度勧めても効果がないので、妻が奈々子に、「お兄ちゃん書かないけど、奈々子書いてみる？」と言ったら、我然のつてきたのである。もちろん字など書けるわけではないのだが、何やらモニョモニョとみみずみみないなます目をうめるヘンテコリンの絵を書き始めた。これに刺激されてようやく啓が次のような手紙を書いた。

——おてがみありがとう。

おべんとうつくるとき、ぼくのまねすると、学校にいつてからねぼけたり、べんきょうのときに、ねむくなつて、もんだいまちがえるかもしれないからきをつけてね。

しつもんこたえます。

ななこは、おとうさんにているとおもいます。しょうぎをいま、やっていました。ぼくが、おべんとうつくっているときは、ねています。

さすがに三年生も後半に入ってくると、かなりのところまで頼りになる存在である。最近の啓の手伝いの変化としては、二階の清掃、ゴミ出し、雨戸締め、土曜の夕飯作りなどである。奈々子も一年生になればけっこうこなしてくれるのではないかと期待している。啓が四年生になったら、我々夫婦だけで観劇に行つて来るという私の念願は、なんとかギリギリでかないそうな気がする。

どうやら我が家では、「親はあつても子は育つ」ようだ。

## 二、食べ物作り

五年 一学期 カレーライス

二学期 手打ちうどん

三学期 ハニークッキー

六年 一学期 パン、マヨネーズ

二学期 豆腐か肉饅(予定)

三学期 デコレーションケーキ

これが私の調理実習のメニューである。このような配列になったのは深い理由があつてのことではないのが正直のところである。私の料理のレパートリーに直接左右されているのが実情だ。

ただ子どもたちには、裁縫との関連付けで話すことにしている。

「自作の三角巾、台ぶきんを使ってカレーライスを作ろう」「袋の完成祝いとして手打ちうどんを作るぞ」「エプロンができない人もパンの臭いだけはかかせてあげる」「卒業アルバム文集のししゅうが完成したら福田屋の肉饅頭を作って食べよう」

ハニークッキーは「楽しいおやつ」「デコレーションケーキは「楽しい会食」として取り扱っている。

#### ①手打ちうどんの巻

五年生の二学期はミシン縫いからスタートする。一学期の手縫いとこのミシン縫いの技術をマスターして、袋作りに入るのである。

袋作りでは、手さげ型と袋型を基本形として教えるのだが、布は各人が端ぎれ屋から直接買ってくることにしている。様々な袋が出現することになる。子どもたちが好んで使用する布地はキルティングであるが、ナップザック型が今年は大流行のようである。売り物に十分なり得る手さげを三時間弱で作る子もいれば、失敗のたびに布がどんどん縮少されてしまう子もいる。その技術の差は甚だしい。

この後、「食べ物、飲み物、何の色？」という食品添加物の授業を行うことにしている。そして、ほとんど無添加食品のうどん作りということになるのである。過酸化水素はもちろん使う必要がない。

我が家で妻が初めて手打ちうどんを作ったのは「手打ちうどん用小麦粉」（中力粉）の袋の作り方をまねたのだ。でもどこか腰が弱い。幼いころ、私を背負った伯母が何回もうどんの生地を足で踏んでいたのを思い出した。あの柔らかさとも異なる。

そこで私は勤務校の父母の経営する、あるおそば屋さんを訪ねる

ことになった。本格的に専門家から教授されたことは貴重な経験となった。妻より高度な技術を持つことになったのである。市内の家庭科部会での手打ちうどんの講習会でもかなり好評であった。

鯉節の出しをとって、自然塩を使用しても、かなりの添加物が我々の胃に入ることになるのは腹立たしい限りである。

子どもたちは自分の好みのぐを持って来ることになっている。出来上がりは華々しい。月見うどん、きつねうどん、七小特製うどん（家にあつた物を適当に入れる）……。ぐでうどんが見えなくなってしまう子も多い。

うどんの出来も様々。あまりに堅過ぎでいかにも消化の悪そうな班、逆に水を入れすぎてねちよねちよになり、ほとんどすいとんという感じの班。一センチもあるうどん、わずか一ミリといううどん、ダイヤ、ハート型に切った子もいる。

私が試食してほとんどの班が成功と思うのに、子どもたちはそうは言わない。堅過ぎるという評価であるが、これは給食にもかつてよく出たソフト麺と比較してみた結果のようだ。手打ちうどんは腰が強いからこそおいしいのだ、ということも教えなくてはならない。

子どもたちにとってこの授業のクライマックスは、言うまでもなく会食であるが、もう一つは一人をおんぶした子が生地を踏みつけるところである。この時ばかりは重量級が主人公になる。生地に布をかぶせてあるとはいっても、お世辞にも美しいとは言えない靴下で喜々と踏み続けている。

出来上がると担任の先生を呼んで会食になるのだが、「とてもおいしくできました」と教育的配慮に富んだお言葉をいただける。製作過程を御覧にならないからだなあ、と思う。

教師の中にもかなり高度な技術を持った人が多い。秩父出身の男の先生はうどんだけでなく、そばも家庭科室で作ってくれた。給食のない土曜日の昼は手打ちうどんを食べる会が何回か開かれた。

この時は食器洗いに石けんは必要ない。茹で汁は洗淨力が強く、天然の石けん代わりなのである。ある手打ちうどん作りの会で、おしげもなく茹で汁を捨てているのを見てびっくりしたことがある。食器洗いにマレモンを使っているのにもっとびっくりした。冬休みの宿題は「年越しうどんを作る」である。

## ② ハニークッキーの巻

うどんを食べながら、「センセー、今度は何作るの」とくる。三学期はクッキー作りということを知らない子はごくわずかである。

三学期のある日、ふらりと二、三人の女の子が家庭科室にやって来て、「先生、いつクッキー作るのですか」と問いつめる。こうなるとそろそろ実習の準備をしなければならない。できればバレンタインデーの前に終わらせたい。チョコレート会社に踊らされて高いチョコレートを買うのはつまらない。昨年はハート型クッキーにチョコレートをぬった贈り物を子どもからもらって感激した。

ただし、この授業の前に「味の話」をやっておきたい。塩や砂糖がどういふものであるのか知ってから、砂糖をひかえ目にしたクッキーを作るのである。

着香料のバニラは好きではないので、希望の班のみ入れることにしている。生地を半分にココアを入れて、しゃれた感じを出しているところもある。

この実習で良い点は、まず失敗がないことである。とにかく、バター、はちみつ、パウダーシュガー、小麦粉の分量さえまちがえな

ければ食べられる物が確実にできるのだ。

最も楽しいのがクッキー一つ一つの形作りである。まあ、よくも正確に一人分を測るものである。基石ぐらいのクッキーをいっぱい作って喜んでいる子もいれば、パンかクッキーかわからないくらい大きくしてしまった子もいる。いずれにしても、帰りにはしっかりビニール袋に収めたものを入れて帰って行く。エプロンや三角巾を忘れて行っても、クッキーを忘れる子はいない。

「センセー、あげようか？」

と差し出されたのは、ほとんど真黒に焦げてクッキーの原形をとどめない鼻くそみたいな塊である。

## ③ パンとマヨネーズの巻

六年生の調理実習のトップバッターはパン作りである。

私の先生は妻であり、妻の先生は私の教え子のK君のお母さんである。そのお母さんはパン作りに関してはプロ級の腕前である。

サッカーのうまいK君が六年生の時だ。寒いある日、まだ湯気がのぼっている作りたてのロールパンをいっぱい職員室に届けてくれたのである。何も付なくても十分おいしいパンであった。

その味が忘れられなくて、いつか学校で作りたいと思っていたのである。家庭科専科になった時、なにがなんでもパン作りはやりうと心に決めていたのである。

この授業の場合は、二校時から二十分休みをはさんで延々と四校時まで続くことになる。給食も家庭科室で、ということになるので、この日はほとんど全日家庭科になってしまう。担任教師も文句も言わずよく協力してくれると思う。

「二十分休みは休み時間だから、外に出て遊んできてもいいからね」



と言っておいてもそれを実行した子はいないようだ。彼らにしてみれば遊びよりも自分のパンの方が重要なのだ。

パン作りは「ひま」ということを実感させてくれる。発酵の時間を十分とらないとふくらしたパンができないのである。その間「ひま」になった子どもたちは本や漫画本などを読んでいるのである。おそらくこうした「ひま」の体験（労働と労働の間の意）というのほとんど彼らにはないだろうと思う。

ところが、今年はこの「ひま」もなかった。

実は本校の二年生が母親の協力でパン作りを家庭科室で行ったのである。その後、二年生はパン工場を見学するという有意義な社会科学習をすることになる。

そのいただいたパンが実においしかった。プロ級の腕を持った何人ものお母さんの協力があつたので、当然と言えば当然であるが、そのおいしさにショックを受けたのである。そしてどうしたらおいしいパンができるのか悩み続けた。結論的には、第三次発酵が十分でなかったことがふくらしない原因だとわかったのだが……。

母親中心とはいえ、二年生がパン作りをしたという事実と、しかもそれが非常においしいということが私の自尊心を傷つけることになったのである。家庭科ではパン作りだけでなく、何かやってみようと思いたった。

家庭科専科になりたてのところ、マヨネーズ作りに挑戦したのだが力量不足で一部の班しか成功しなかったことがあった。よし、この「ひま」を使って今年はマヨネーズ作りをしよう、と思ったのである。

我が家ではここ数年マヨネーズを買ったことはない。マヨネーズ

作りは私たち夫婦の手から子どもたちの手に移行しつつある。ハンドミキサーがあれば一人でも十五分間でその人の好みに合った確実においしいマヨネーズが作れるのである。

買いそろえたハンドミキサーを眠らしておくてはない。ちよつと時間的に忙しかったが、マヨネーズ作りに挑戦してみた。

結果的には約半分の班が成功ということで、多少くやしい思いをしたのだが、失敗したマヨネーズは成功したマヨネーズによつて容易に再生させることができる。古い油を作った班以外は、給食のレタスにマヨネーズを付けることができた。

一学期の終わりのパン作りというのは発酵しやすい時期なのでちよつど良い。これからもパン作りを続けるためには、一度パン屋さんに弟子入りする必要があるだろう。

### ③デコレーションケーキの巻

「センチ、調理実習やらないの？」

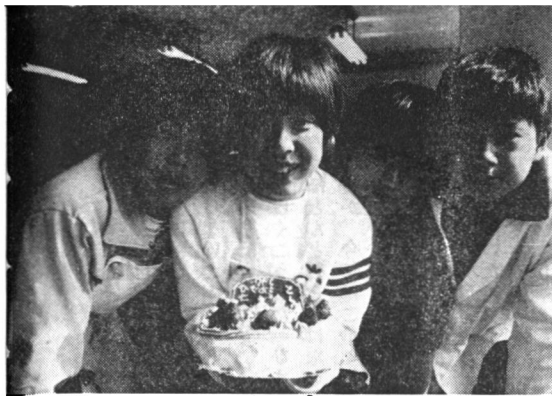
と言われ続けているのが六年の二学期。今まで五年間一度もできなかった。でも今年は豆腐か肉饅頭に挑戦してみようと思っている。子どもに聞いたら圧倒的に肉饅頭が多い。北区の中村先生に教わった「中村屋の肉饅頭」を子どもに伝授したい。

さて、我が校での食べ物作りもこのデコレーションケーキで幕となる。私のおしゃべりよりも子どもの作文、写真で今回の報告も幕としたい。

目があらいね

デコレーションしたことは、一、二回あるのだけど、スポンジを

矢沢恵子



## デコレーションケーキ 卒業製作として

**図** 料理に口会食という單元があります。アトではガスオーブンをフルに使って、卒業製作としてデコレーションケーキを作ってみようと思っています。

**材** 料は次の通りです。家でも誕生日などにやってみたいですね。ただし、直径21cmケーキ1個分です。

①卵 4個 ②砂糖 120g ③小麦粉 90g ④バター 大匙2枚

**作** り方は別立て（卵白と卵黄を別々にたてる作り方、ビズネーとも呼ぶ）をやってみようと思います。

①卵白を少し泡立てて、砂糖を加えてメレンゲを作ります。

②卵黄に砂糖を加え、小麦粉を入れてメレンゲと混ぜ混ぜします。

よく合わせてさらにメレンゲを合わせます。

③溶かしバターを入れて焼きます。

卵白をたてる「メレンゲ」を作る>



- ・リズミカルにたてる。
- ・ボールの底を叩いてみる。
- ・砂糖は 5~6回に分けて入れる。(30g)

卵黄をたてる

卵黄(4個分) + 砂糖(90g) + ①のメレンゲ半量 + 小麦粉(90g) + ①のメレンゲ残り全部 + 溶かしバター

ケーキにケーキ型敷紙(パラフィン紙)を敷いて、生地を入れ焼かせる。

オーブン 180℃ 30分。(電子レンジでは不可)

パラフィン紙をはがしてごます。

デコレーションをする。ホイップクリーム1箱。



・クリームを作る。

完成したら、担当の先生とみんなで食べましょう。ティーバックと砂糖、蜂蜜可。

- 持ち物**
- ①エアロン、三角さん(いずれも自作品)、台ふさん
  - ②ティッシュペーパー
  - ③ティーバック、砂糖、レモン(いずれも希望者)

作ったことはまだ一度もないので、うまくいくか、とても心配でした。でもいちおう、うすいけど、やけてほっとしました。うすいので、二枚にきる時がこわかった。けれど、切ったケーキを、はこにうつす時の方が、いまにもくずれそうでもっとこわかった。

家に帰ると中で、道で遊んでいた弟と妹に会った。私が「聡子っ」とよんだら、すぐにかけてきて、「ねえ、もってかえってきなかつた?」と言われた。(私は、妹たちと、ケーキをもつてかえってきなかつたら、こんしゅうの日曜につくる「ひなまつりケーキづくり」でなかまはずれになる、というへんなやくそくをしてしまったのです。)私は聡子に「さきに帰るよ」といって家に入った。帰ったら、よっくんが食事中だった。

「ただいま」といってまっさきに母に見せた。母は見て、「目があらいね。かきまぜすぎなかった」といった。私はへんじをしなかった。うがいをして手をあらって、私は一番にあじみをした。おいしかった。ちよっとしたら妹たちがはしって帰って来た。

「ケーちゃん、ケーきたべちゃった」と伸やす(弟)がまっさきにいった。「まだ」私がいうと「フーよかった!」と伸やすがいった。私は聡子たちがたのしみにしてくれたのがとてもすごくうれしかった。そこで、「じやあげるからおいで」といってスプーンをとりに行った。(行儀悪いけど、私があじみした時は手で食べました!!) 聡ちゃんと伸ちゃんはよるこんで食べてくれました。(略)

(清瀬市立清瀬第七小学校)

## 新しい家庭科を創るために

\* 中学校では \*

大森 嘉子

## 米の学習 2

### 「米の炊き方を中心にして」

日本の歴史をたどってみると、日本人の米の炊き方は、かなり大きく変遷してきている。

蒸した強飯（こわいい）が一時期上流階級のご飯となり、炊いてつくった飯は庶民のものであったようだ。平安朝になると強飯は、おこわと敬称されるようになり、これは粳米を蒸すこともあったが糯米を用いるのが普通であったと考えられる。貴族の常食であり、宮中でも民間でも、強飯を正規のものとした。また炊いた飯、固粥（かたがゆ）は姫飯（ひめいい）とも呼ばれ現在のごはんに発展した。水の量の多いやわらかいものが粥（しるがゆ）と呼ばれた。平安末期には正規の食事でも固粥を用いはじめた。鎌倉時代には強飯と姫飯が両方行われたが、鎌倉末期、室町時代と、だんだん炊いた飯が普及し、江戸時代には現在とほとんど同様な姫飯系の飯が標準となった。

今日の普通の飯は、粥から出発して出来たものであり、その炊き

方は「炊き干し法」による。強飯系のおこわは儀式用として今も残っている。そしてその炊き方は「蒸し飯法」である。日本における米の炊き方を歴史的にみてみると、蒸し飯法と炊き干し法が主に発展してきたと思われる（中尾佐助著『料理の起源』）。

それでは、米の発生地インドをはじめ、現在、米を食べている東南アジアを中心とした国々では、どのような炊き方をしてきたのだろうか？ 日本の国と同じような炊き方をしていいるところはあるだろうか？ 日本との関連は……など、調べてみよう。

### 二、いろいろな米の炊き方

中尾佐助氏は、米の炊き方を四つにわけている。湯どり法、蒸し飯法、ざる煮法（ざる取り法）、炊き干し法で、また二つの方法を併用しているところもあるという。

米の炊き方は、時代、民族、地域などによってかなり異なり、氣候風土、米の品質、食習慣などのちがいを反映していて、合理性もあるようだ。そこで実際に、この四つの方法で米を炊いてみることにした。世界の米のいろいろな炊き方を実習して比較・観察することによって、それぞれの違いと特色を見つけることができるだろう。また「なぜ、このような食べ方炊き方をするのか」その理由を考えてみよう。

1、まず、米の炊き方が、世界の国々でいろいろあることを知らせ

### 三、授業の展開

る。

2、自分の班は、どの方法で炊いてみるか決める。米の種類と糯米と粳米を使い、二種類をそれぞれ四種類の炊き方でやってみることにした。八班あるので、炊き方、米の種類がだぶらないように話し合い、自分の班の炊き方を決定した。

3、各班で、自分たちの班の炊き方を確認する。どのような炊き方か、どんな用具が必要か、炊く時注意することはどんなことかなど……話し合い実習カードに記録していく。

ここで、米の量を各班一定（四カップ）にすることと、米は水分の少ない乾物なので、吸水が必要なことを話しておく。米の量と、水の量、加熱方法と加熱時間など教科書を参考に考える。炊き干し法は、水の量を計量する必要があることに気づかせる。

4、実習に入る

(1) 身じたくして用具の準備をする。

各班によって用意するものが違うので、注意して、自分の班に必要な用具を準備する。

(2) 自分の班の炊き方により作業を進める。

。水につけておいた米の体積を計量して、もとの体積と比較し、記録しておく。

。火の強さに注意する。

。ふっとうするまでの時間、炊きあがるまでの時間をはかって記録しておく。

。加熱状態（炊き方）を観察して、気づいたことを記録する。

(3) 各班の炊きあがった米を比較観察する。炊き方の違い、米の種類に注目して、観察試食する。米粒のようす、つや、水分、味、舌

ざわり、やわらかさなどよく観察して記録する。

(4) 観察結果から、炊き方の特徴を考える。

(5) みんなで協力してあとかたづけをする。

5、いろいろな炊き方の実習、米飯の観察を通して、国別、地域別、時代別などで、炊き方の特色をまとめる。「なぜ、このような炊き方をするのか」その理由を考えてみる。

資料1（いろいろな米の炊き方のまとめ）のように、まとめてみた。生徒たちは、なかなかよく観察し、炊き方の特色をつかんだようだ。

たとえば、ある生徒は、こんなふうに蒸し飯法の特色をまとめている。

「蒸し飯法で炊いたうるち米は、つやがなく固くておいしくない。同じ蒸し飯法で炊いたもち米は、つやがあり、少しかたいようだったが、かむと粘りがでてきておいしい。米粒がくっついて、粘りが強いことがわかる。箸で搗いたり、こねてみると、だんだんもちになり、すごくのびた。私の好きなくりおこわや山菜おこわも蒸し飯法であることがわかった。日本のおこわと同じものを、ビルマやタイでは今も常食にしている、もち米を蒸し飯法で炊いていることを知った。やはりもち米は、蒸し飯法が適しているからだろう。遠い外国で、日本と同じ炊き方をしているのはふしぎなようで楽しい感じがする。蒸し飯法は、ビルマやタイから日本に伝わってきたのかなあ」。

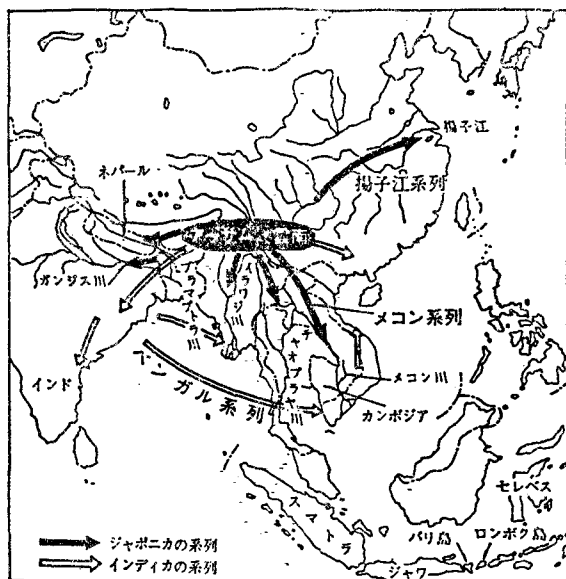
糯米の湯どり法は、パサパサしていると、多くの者が観察していた。そこで、私の経験談を話して湯どり法の特色をつかむための補足とした。

資料1 いろいろな炊き方 実習のまとめ  
炊き方の特色 (国別、米のちがい、時代)

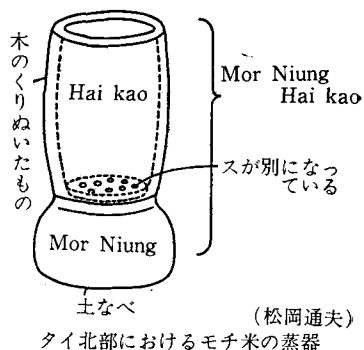
方法	湯どり法	ざる煮法	蒸し飯法	前期炊き干し法	後期炊き干し法
国	中国華北、朝鮮、ビルマ、インド、ネパール、ブータン、スリランカ	インドネシア、ジャワ島、バリ島	日本、ラオス、タイ、ジャワ島	日本、中国?、フィリッピン、ボルネオ、ジャワ島	インド、タイ、ビルマ、スリランカ、ベトナム
米のちがい	インディカが多い うるち米	ジャポニカ うるち米	ジャポニカ インディカ もち米	ジャポニカ うるち米	インディカ うるち米
日本における時代	みられない	みられない	弥生→平安 常食 現在一儀式用	弥生→玄米を粥に。平安末期→江戸現在のごはん	

- イネの発生地であるインドは湯どり法が一番普及している。
- アジア大陸の大部分は湯どり法を基本としている。
- 南方のインド、スリランカ、ビルマ、タイ、ベトナムなどは湯どり法と後期炊き干し法両立地帯である。
- 東南アジアのラオスを中心とした地域のモチ米栽培地帯では、蒸し飯法の常食の習慣がある。(タイ北部、ラオス、ビルマ東北部) コシキ使用による蒸し飯である。日本の“おこわ”と同一であり、平安期の強飯もモチ米であったようだ。
- 湯どり法か蒸し飯法か区別がはっきりしない方法として、ざる煮法(ざる取り法)がジャワ島、バリ島に見られる。水が盛んに煮立っている時は泡がざるの中に入りこみ、上の水がなくなれば、蒸す状態になる。煮ると蒸すの両方を使った料理法である。蒸し飯法の系列に入れられる。コシキという蒸し飯作り専用の道具が発明される前の方法と考えてよいだろう。

『料理の起源』中尾佐助著、『稲の道』渡部忠世著からまとめた



アジア大陸における稲の道 (渡部忠世)



「ここでは粘りのある米ジャポニカ（日本型）を使っているが、粘りの少ないインディカ（インド型）を湯どり法で炊いてみたら、もっとパサパサなものになるだろう。私がスリランカを旅行中食べたごはんは、まさにパサパサ、パラパラであった。パサパサの飯に、とてもからいカレーをつけて食べる。暑いこの国においては、粘りのある日本の米よりあっているような気がした。原地の人たちは、手で上手に食べていたが、私はスプーンを使った。箸ではなかなかつかめないあとと、思いながら食べていた。箸は粘っこい米飯とともに発達してきたことを確かなものにした。

インドのパザールでは、上等な米から、安物までならべて売られているが、上等の米というのは、粒が細長く、ツンと香りの強い食べるとパラパラな感じの米。安物は、その反対で、丸い粒の香りがなく、ネバネバの米である。値段は倍ほどちがう。インド人にとっては、パラパラの米への嗜好性が強く、ネバネバの米の価値は低い。ネパールや、東南アジアのインド文明の影響を強くうけた地域では、パラパラの米を好むのである。

米のちがいと食生活の習慣、嗜好のちがいは、料理法に大きな影響を与えている。

この実験実習（いろいろな米の炊き方）から、考えられることを、次のようにまとめた。

- ①うるち米よりも、米は粘りがある。
- ②飯の食味からみると単純な蒸し飯法が、粘りが強く、炊き干し法の飯が、それについて粘っている。湯取り法の飯はサラサラ、パラ飯になる。

③インディカの栽培地域、インドを中心にするビルマ、ベトナム、スリランカでは、湯どり法と、湯どり法から発展した後期炊き

干し法で炊いている。日本をはじめとして、粥から出発した前期炊き干し法で炊いている地域は、ジャポニカの栽培地域が多い。

もち米栽培地域、ビルマ、タイでは蒸し飯法で炊いている。

④米の種類や食習慣により、料理法が大きくちがう。食習慣や嗜好が、米の種類を選び発展させ、料理法も考えられていった。

それぞれの地域、それぞれの国で、その時代の人々の日常生活の中で、食文化が創り出され発展してきた。

電気がマに米と水（線のところまで）を入れスイッチを入れさえすれば、炊けると思っている。小学校の家庭科で炊飯なべでの実習を一回だけしか経験していない生徒たちにとってこの実験実習授業は、新しい発見の授業となった。

「こんな方法でごはんが炊けるのか」という心配や、「いろんな方法で、ごはんが炊けるのだなあ」という驚きで、みんな興味を持って取り組んだ。

炊きあがっていく様子、飯粒の様子、食べてみながらよく観察をして、できるだけくわしく記録した。

時々、他の班の炊き方を見て、実際のちがいを調べたりしている者もある（ざる煮法と湯どり法のちがいがよくわからなかったらしい）。ある班ではすりこぎを持ち出し搗いてもちにした。またある班は箸でこねるようにまぜて粘りかたを調べた。こちらが想像していなかった実験までやっていた。ワイワイ、ガヤガヤ、にぎやかな楽しい授業になった。男子の活躍がめだったようだ。生徒の感想にこんなのがあった。

「いろいろな国の米の炊き方がわかって、たいへんおもしろかった。ぼくの班は湯どり法だった。初めどんなふう炊けるのか心配だったが、炊きあがったごはんは、ちよっとパサパサしていたが、まあまあおいしかった。おねぼを取るのがちよっと大変だけど、この炊き方は便利だと思う。どうしてかという、水の量を計らなくてよい。ややこしい計算がなくてすむ。ざるごと米を出せるし、炊けた状態の時、まだ下に水があるのでこげない。火の調節や時間もあまり考えなくてよい。ぼくにはもってこいだ。炊き干し法は、最初、水の量は考えなくて炊いてかゆになり、それから発展してきたのだから、頭がなかなかいる。湯どり法が原始的な方法なのだろう。なかなかおもしろい感想である。

#### 四、かて飯（炊きこみごはん）

先にみてきたように、日本人にとって、米を食べる歴史は長い。貴重であったため、何かをまぜたり、他の穀類を合わせたり、ときには、水分による増量など、さまざまな節米の方法が工夫されてきた。炊きこみごはんや、まぜごはんもそのひとつとして出発した。どの時代も庶民やとくに農民の食生活は、現代の我々から想像を越えたものであった。古くは焼米や雑穀まじりの粥を常食とし、その後、**糗飯**（糗はまじえるの意）と呼ばれる穀物、大根やかぶ、芋、海草などを大量に入れて炊いたものや、米・麦・粟または稗などを混炊したもの、あるいは雑穀に野菜をまぜた雑炊といったものを多く食べ、米だけのごはんを食べるのは、一年のうち正月や祭りの日などしかないといった状態が、各地の山村でごく最近まで続いたのである。季節に応じて旬の野菜をまぜたごはんが、せいじっぱいのごちそうで、心なごむ、それぞれの家庭の味であった。

ごはんに具をまぜるという方法は、大切なお米を節約する役割から出発したものが、菜とごはんを一度に調理できるという簡便さから、大勢の人の寄り合いや行事の食物として季節の味覚を楽しむ素朴な料理として今日まで受け継がれてきた。

今回は教科書にものつていて、どんな時でも簡単にできる、油あげ、にんじん、ごぼう、とり肉などを使った炊きこみごはんを実習してみることにした。

昔のかて飯にくらべれば、ぜいたくなものだが、家にある残りの野菜などを使つての味つけごはんは、量も増え、栄養価もある。他の副食もあまりいらぬ。現在でも経済的な食事といえよう。

#### 五、米の加工

米は普段、飯として粒食で食べているので、粉食といえは、小麦粉の加工品が思ひうかぶが、日本では、昔から多くの米の粉の加工品がある。（資料②）

精白の方法も改良されなかったころには、未熟米やくだけ米や屑米、ヌカの類が非常にたくさん出た。それらも食糧にとりこまなければならぬ生活の中で、ムギ、アワ、ヒエ、ソバとともに粉にしてだんごとした。春先にはヨモギをまぜて草もちにしたり、野ブドウの葉を乾したものを混ぜたおやき（焼もち）にしたり、スイトンのように味噌汁に入れてだんご汁にしたりした。

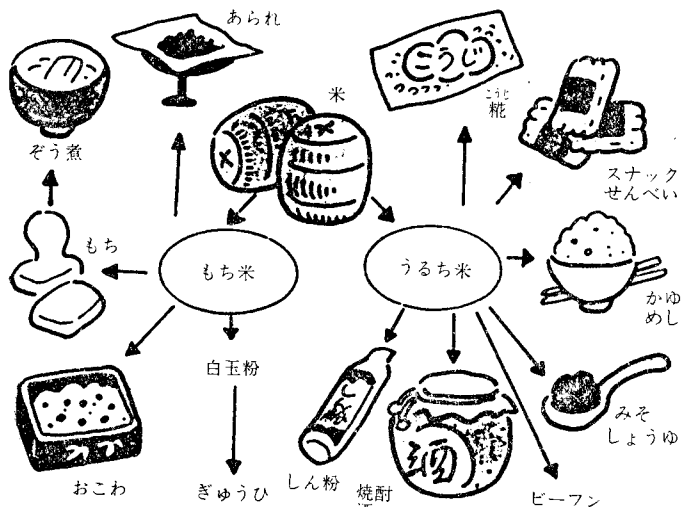
粳米の粉はシンコといい、米粉のだんごは、祭日用にして、ソバ粉をソバガキ、ソバキリに、小麦粉をホートー、ウドン、スイトンにして、日常食に用いたことが想像以上に多く、米だけの粉食は、やはり貴重なものだったようだ。雑穀や屑米は粉化した方が食べやすいが、石臼の響は凶年の前触れという言葉があったぐらい、主食

## 資料2 米の加工

### 粒食と粉食

	粒食	吸水→加熱→糊化→( )		粒食	吸水してこねる→( )
もち米	おこわ	"		白玉粉(ぎゅうひ)	"→(蒸す)
	もち	"	→(つく)	白玉だんご	"→(湯通し)
	あられ	"			
うるち米	ごはん	"		せんべい	"→(やく)
	かゆ	"		ビーフン	"→(ほす)
	みそ	"		新粉	"→(蒸す)→(焼く)
	しょうゆ 酒焼酎 みそ 瓶	"	→(発酵)		

用の米が乏しくなると、粉食が盛んになるといいう。粉食もまた節米の役割を出発点として、今日のお菓子などに受け継がれ、発展してきた。資料2のように、粒食、粉食として、いろいろな米の加工がなされてきたのである。



今回は、うるち米の粉食の加工品、せんべい、だんごを実習することにした。米の炊き方の実験実習、かて飯の実習、米の加工(せんべいとだんご)の実習を通して、時代や民族、地域により異なる食文化に、また相互に関係しあっている食文化に、人間が長い歴史の中で引きついできた文化遺産に、ほんの少しだけ接することができたように思う。

産業や技術の発達とともに、さまざまな食品が氾濫する中で、私たちの食生活は、数多くの問題をかかえている。このような現在、特に先人が生きるために必死に創り出してきた食文化を探究することは、一層大切であると考える。この学習を、今後の食生活を考え創り出す基本的な力の第一歩としてほしい。

「日本の伝統的文化を強く彩っている水田稲作文化のルーツを求める」ことは、私自身、大変興味ある題材でもあり、より学習を進めたい。

### 参考資料

- 中尾佐助『料理の起源』、渡部忠世『稲の道』、佐々木高明『照葉樹林文化の道』NHKブックス
- 篠田統、後藤金吉『ごはんの話』駁々堂
- 瀬川清子『日本人の衣食住』河出書房
- 『産業教育連盟テキスト』
- 『家庭科(生活と科学)』一橋出版
- 中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』岩波新書

(東京都町田市立町第三中学校)



## 新しい家庭科を創るために

＊ 高等学校では ＊

入江一恵  
西本和代・町田道子

### 「保育」学習と「性」の問題

はじめに

十月下旬、中間審査中の土曜日の午後、私はめずらしく解放感にひたりながらしゃべっていた。お相手は、読売新聞でシリーズ「少女たち」六九回を精力的に書き終えて一息ついた婦人部K記者である。彼女からこの企画の話聞いたのは、二月の初めだった。それから九ヵ月、西日本をかけ回り、「女の子だから、なぜ」と性にまつわる屈折を少女たち自身の声から探ろうとして、悩み、行動し、波紋を投げかけてきた。そして、多くの少女の訴えと出会いから得た興奮からまだ醒めきっていないようである。

私は私で、ささやかながら九月から一年生の「家族」の学習で得た感触、生徒とのやりとりの中で、性別役割分業の固定観念の根強さに腹を立てたり、あきれたり、当然話は熱っぽくなってくる。今月の主題の保育学習で扱う「性」の問題を考えても、この固定意識を温存、助長する情報がどれほど巧妙に取り巻いていることか。それに比べて、それをつきくずす私たちの側の情報が、考えれば考

えるほど不足している。どのような資料を使って問題提起していくかがこの学習の要になりそうである。今月は、そういった意味の実践を単発的ではあるが西宮今津高と長田高から報告する。

〈西宮今津高校では〉

保育の学習で何を学びたいかと生徒に問いかける。

「どうしたらいい子に育つか。親の方法を学びたい」

「いいおかあさんになるための知識を学びたい」

といった答が返ってくる。将来のために学ぶというより、現在の自分をみつめ、これからの生き方を考えるような「保育学習」でありたいと、常々考えている。とすると愛と性の問題を抜きにしては通れない。しかしながら、生徒の実態の中に入りこむような授業ができていない現状である。今までのささやかな試みをあげる。

「愛と性の十字路」を読ん

で「性の荒野をさまよう若者たちを前にして私ら教師は実際無力なんです」と、男と女のからだをテーマにユニークな保健の授業を展開しておられる大阪公立高のI先生はいわれる。I先生は生徒に手記を書かせ、次の授業にプリントして渡し、また書かせる。一方的に教えるのではなく、お互いの考えを交換してそこから学ばせようとのねらいからだ(『女・からだ』清野博子著より)。本校では『愛と性の十字路』(高文研)の最後の章、「禁欲と開花」と『考える高校生』に出ていた高校生の読後感をプリント11枚にして配布、読後感

を一人半枚ずつファックス原紙にまとめさせる。他の人の意見を読みながらそれに対する意見を書き、クラスで話し合うといったもの——読んで考えを書くことが中心になり、触発される部分もあるが、文を読むのが苦手な生徒にとってはかなり苦痛であつたろう。

#### 視聴覚教材を利用して

そのⅠ N H K特集「愛の重さ——高校生の妊娠」ビデオ30分を見せる。レポーターの宮淑子さんのまとめのことば「性はあなた自身のもの：どう生きるか、その中で自分の愛と性を考えてほしい」が印象に残っていると、視聴レポートに書きとめる生徒が多い。私の考えを教えるよう押しつけようとしなくて、資料を示し問題提起とアドバイスだけして生徒に自分の意見を述べさせ、他人の意見を聞く雰囲気づくりをしながらすすめた時、本音が出てのつてきた。

そのⅡ 副教材「人間の性と母性の健康」を読んでいき、ハミリ映画「生命創造」二十分をみせる。「生命創造」は受精の瞬間から細胞分裂、心臓の動き、血液の流れ、手指の形成など、母体内の胎児の成長過程が十分わかるように世界で初めて胎内投影されたもので、自然の営み、命の厳粛さをわからせ、感動を与える内容と思われた。ハミリ版二万八千円は本校でも購入、地区研究会で保育における視聴覚教材の利用としてこのフィルムをとりあげてから、現在、西宮市内のほとんどの学校で使われている。「生命創造」を使つた保育の授業は、生徒の感性に訴えたようで、今までに見られなかった生き生きとした反応が得られた。次に感想の一例を紹介する。

生命を創ることは、本来後世のために生殖する人間の最も重大な仕事だと思ふ。それを私たちは快樂のための結果としてそ

うなつてしまつたと考えているのではないだろうか。そして中絶と、いとも簡単に片付けてしまう人々は生きていく価値などひとかけらもないと思う。私は、この映画で、母体から生まれてきた子供に対するあの母親の笑顔が忘れられない。この笑顔、彼女の喜びが感動的で、地球上のすべてのイイなことを忘れさせてくれるようだった。あの母体の中で、あんなちっぽけな受精卵から毎分毎秒成長していく過程を見て、生命の不思議、偉大さ、今日の私をつくりあげているなんて考えられないことだ。同時に母親の苦勞がひしひしと伝わってくる。生命はひとりでするものではない。

#### 聖バルナバ病院見学を三年選択にとり入れて

聖バルナバ病院から「母性講座」の案内をいただいた。この病院は明治六年に創立された歴史のある産婦人科と小児科のある病院で、戦前から母性講座が設けられているという。午後一時から始まり所要時間三時間とのこと。一学期の中間考査の最終日を利用して見学した。大阪市天王寺(国鉄・地下鉄鶴橋駅下車)まで本校より一時間半、試験が終わってホッとして眠たいやら遊びたいやらの生徒たち、最初はまだ変な所に連れていかれるとブツブツ言っていたが、ほとんどの生徒が感激して帰ってきた。

#### 見学の概要

##### ・病院内の見学

病室、ナースセンター、手術室、診察室、新生児室、未熟児室。助産婦さんによる講義と実習

母性の意義、男女の性器、妊娠、分娩経過、人工妊娠中絶、

受胎調節法、健全な母性の育成、沐浴実習（本校では具体的な育児法はやっていないため実習を入れていただく）、胎盤見学（今日生まれたばかりの赤ちゃんの胎盤をさわってみてびっくり）

生徒のレポートより――

。一番印象深かったのは、やっぱり未熟児の赤ちゃんだった。すごく小さいけど、手足を動かしているのを見るとやっぱり一人の人間なんだと思った。中絶された二、三か月の小さな赤ちゃんを見て、生命の尊さを知った。学校でいろいろ聞いていたけれど、更にくわしい補いがあったのでよかった。前から保健とか家庭科で習ってきたけれど、その時聞いた話より助産婦さんの話し方が真に迫っていた。未熟児を見て信じられないほどの小ささに驚いた。私も未熟児で保育器で育ったそうだから、あんな子がよくもここまで育ったなあと感謝した。

。はじめてのものばかりで大変役に立った。胎盤やお産の声といったものは、一生に一度きりしか見聞きできないと思う。今回は保育というより、自分が女として将来のことを学んだようでした。

。やっぱり胎盤を見たのが一番感動した。へその緒がついていたから赤ちゃんがいたんだな―って思えた。それから流産してアルコールづけにであった胎児から、私たちが生まれることを不思議な気持ちにさえた。おかあさんにすごく感謝の気持ちがわいてきた。

生徒たちの感想を前にし、授業で教える限界を感じ、それを補う意味で実地の見学学習の大切さ思った。来年は、家庭一般の学習でもとり入れることができればと考えている。

十月十二日、葺合高校で一年生全員（男女）のホームプロジェクトの発表会があり、見学させてもらった。その中に交換留学生として一年間アメリカで学んだA子の授業風景の報告があった。

そのⅠ――「心理」の授業は各々、一組のカップルを作り、結婚式からはじまり、夫婦の葛藤、離婚、家族問題を討議していく。

そのⅡ――「保育」の授業では卵が一個ずつ配られ、名前をつけ、自分の子どもとして一週間育てるという。途中で割れば死亡届を、世話ができない時はベビーシッターを頼むなど大まじめでやったとのこと。アメリカらしいと一笑にふせばそれまでだが、高校生の60%が親の離婚を経験しているというアメリカ社会の現状を考えると「大まじめ」もうなずける。

〈長田高校では〉

本校では、保育領域を二年で学習する。「妊娠の成立」では、男・女の愛と性について避けることができない。プリントやスライドを利用して全く生理学的に扱った年……、教師の側としては最もやりやすいが平板的で、生徒も自分自身の問題としてとらえにくい。また特に女性の「性」が時代によってどのように扱われてきたか歴史的なとらえ方をしてみたり、毎年、試行錯誤の繰り返しであるが、今ひとつ生徒に迫れないもどかしさを感じている。

実教出版から『たしかな青春の日々』が出版されたのを機会に、この小冊子の活用を考え早速とり入れてみた。職員室の座席の近く

の先生にも読んでもらったりして関心を持っていただき、話題になっていた所、生徒指導の面でホームルームで扱い、男女共に考えさせる必要があるのではないかなど……の声が出て、一年生の三学期の学年行事として性教育の講演会が企画された。講師は西宮市に住む佐藤先生、百回以上も講演を積み重ねられた方とお聞きしたが、当日は掻爬器具を持参されてのお話でかなり迫力があつた。その事前指導として一年生全員に前述の『たしかな青春の日々』を購入させ、家庭で保護者にも読んでもらうようホームルーム担任から話しかけ、当日は生徒・保護者いっしょに講演を聞き、親子で話し合う糸口でも作れればと配慮された。

この会は、五七年・五八年と二年間継続して行われた。生徒の中にはショックのあまり気分が悪いと訴える者もいたが、全員が真剣に聞いた講演会であつた。それだけに生徒・保護者の反響も大きかつた。この講演会が今後も継続できたらと思う。家庭科としては、これを受けて保育の授業を展開していかなければならない。次に生徒・保護者の感想の一部を紹介する。

講演「さわやかな青春のために」を聞いて

女生徒 M子

とても楽しい話でよかった。中絶については、いろいろな本で研究(?)していたので、それ程ショックではなかったけれど、「少し考えが甘かつたなあ……」と思った。だけど、私は高校生のセックスがいけないとは思わない。『高校生のセックスは遊び』と決めつける人がいるけど、そういう人の方が遊びでセックスをしているのではないかと思う。もっとも妊娠する

可能性があるのだから遊びではすまされなければ……。妊娠したら退学になるというけれど、妊娠は不祥事なのだろうか？二十歳を越えた人でも精神的にできていない人もいれば、高校生でもしっかりした考えをもっている人もいると思う。高校生だからダメというのは、おかしいと思う。収入のない学生だけで育児休暇があつた方がいいじゃないか!! 中絶するのは絶対よくない!! 高校生だって人間だし、先生の所有物じゃないのだから、人間として考えてほしい。

また結婚していたら、子供を産んでもよくて、未婚だとダメだということもおかしいと思う。私はもともと結婚という書類上の制度にはあまり期待していないから——。結婚という制度が二人の心をつないでいられるとは思わない。

学校は、結婚している生徒なら、子供がいても在学を許すのですか？ どんなに私の考えをぶつつけても何も返ってこない先生たちに、いつもどこしさを感ずる。「人間としてどう生きるか」そんなことを中心に考え話し合っていきたい。講師の先生の「この学校は優秀だから」の言葉にすごく反発を感じ、全面的に共感できなかったのが残念であつた。しかし結婚の話をぜひ聞きたいと思った。

女生徒 S子

具体的すぎて大胆で、聞いていると身体の一部に痛みを感じ吐氣がした。軽はずみの恋愛はしたくないとつくづく思った。

女生徒 A子

性交を男子は好きだ好きだと迫り、女子は妊娠を恐れ逃げていくといった先生のお話を聞き、男子に思いやりがほしい。中

絶を女の問題としてでなく男の問題としても考えてほしいと思  
った。

女生徒 H子

中絶法がすごく原始的な方法と知り、びっくりした。

男生徒 B夫

わからぬことを明解に答えてもらって、嬉しい。副交感神経  
興奮型など……。

男生徒 M夫

性教育と聞いて初めはイヤだなと感じた。小・中学生時代に  
話を聞いたが陰気であつたため、なおさらその感が強かつたの  
かも知れない。しかし、今度は話がとてもあつたらんとして  
いて、変な予備知識はふっ飛んだ。中絶とマスターベーション  
に正しい知識を持つことができた。

男生徒 K夫

女性は大変だなあと、中絶について痛感した。女性はいかに  
そう、それより赤ん坊が……と思う。

男生徒保護者A

自信をもって子どもと話ができるようになった。

男生徒保護者母親B

自分では説明できないので「体のしくみ」などの本を子ども  
の机においてみたりしたが、子どもの感想を聞き出すことは  
できなかった。

男生徒保護者父親C

核心に触れた話を拝聴して感謝。厳肅な気持ちで聞くことがで  
きた。

最後のしめくくりで〈新しい子宮で迎える〉の言葉に思わず  
涙がにじみ、胸の熱くなる感動を受けた。

高校教師C

以上のような感想のひとつひとつを読む時、私たちがこの問題に  
ついて生徒の問いかけに対応しきれず不自信を抱かせることが  
強く反省させられた。特にM子の感想は一見、特異なように見え  
て、ごく普通の女の子の素朴な疑問と大きく変わっていない。二年  
生の保育の学習の中でどのように応えられるか、彼女たちがどう変  
化するか、その組立てに苦慮している所である。

おわりに

この稿をまとめていたころ、高文研から出た『愛は教えられるか』  
を読んでいた。また、兵庫高教組青年部主催で著者の吉田和子氏の  
講演があり、職場の仲間をさそって出かけた。著者は、ホームルー  
ムの指導の中で、また、教科指導（商業）の中でも愛と性について  
生徒と向きあつて来られた方だ。氏の話を聞いて、私の今までの授  
業の中で感じていたもやもやがすっきり整理できたように思う。

それは、「愛」と結びついた「性」でなければならぬ等、教師の  
価値観を教えこもうとしても生徒の中に入っていくかないというこ  
と。愛情の問題や、純潔教育、科学教育（性器教育）の枠を抜け出  
し、人間としての豊かさや生き方に迫るものとしてとらえるなら  
ば、生徒の意見をひき出し得るのではないかとということである。思  
えば、昨年の選択保育で愛と性の問題をとりあげた時、生徒ものっ  
てきたというか私の方が授業に行くのが楽しくてしうがなかつ  
た。その時は、今までのように教えようとせず、資料を提供し、生

徒に問題を提起する中で、多くの男性や女性の意見をきかせ、また自分の意見を発表するというすすめ方であった。教えるというより共に学ぶというか私自身が教えられ、考えさせられることばかりであった。

愛と性の問題は、処分対象でなくどう生きるかという視点から指

導し、生徒のつまづきを生きる場面に転化させるという氏の実践報告に私はハッとさせられた。——私は真正面から生徒と向きあっているだろうか——愛と性を教える大前提が自問される。

（入江・神戸市立葺合高等学校、西本・兵庫県立西宮今津高等学校、町田・兵庫県立長田高等学校）

- ウィ書房より 三つのお願い
1. ひき続き、Weのご購読を
  2. 増刊号のご注文を
  3. '84年4月号から一冊30円の値上げを

読者の皆様、どうぞよろしく願いいたします。

Weもいよいよ3年目を迎えようとしています。

先月号のアンケート結果にもありますように、Weを読まれるようになったきっかけは「友人・知人のすすめで」という方が最も多いのです。大資本に物言わせ、マスコミを利用しての大宣伝が人を動かす時代に、人間関係のネットワークを生かし、口コミで広がるWe——世にも不思議な、ありがたいことだ と思います。心から感謝申し上げます。その上に、心苦しいのですが、お聞き届けいただきたいお願いがあります。

◆3年目のWeは、全体の半分を、創刊当時よりの懸案であった大きい活字とし、デザイン・体裁もセンスアップして、目にやさしい雑誌に一步近づけます。さらに8頁ふやして、内容も充実させてまいります。

◆ご期待の上、ぜひご購読をご継続下さいませ。2・3月号で契約切れの方が大勢いらっしゃいますので、巻末に振替用紙をとじ込みました。今すぐに3年目のご予約をお願い申し上げます。

◆夏季フォーラムの評判をお聞きでしょうか？ 今も参加された方からの熱い便りが届きます。それほどに強烈な刺激だったということでしょう。ここで提起されたものを、私たちの共有財産にするためにも、ぜひ増刊号をご活用下さい。定価は、700円（含送料）。ご注文は、住所氏名明記の上、増刊号と一筆添えて、切手でお送り下されば結構です。

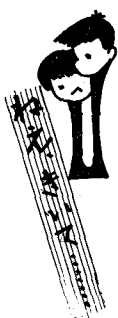
◆心苦しいけれども、どうしてもご了承くださいたいのが、3年目の誌代です。活字を大きくして増頁となると、現在の誌代では無理です。そこで'84年4月号から、一冊530円にさせていただきますのです。従って年間購読料は、例月号530円×10と、増刊号700円で年間6,000円となります。増刊号は今後毎年発行します。

◆ただし、このお知らせ以前に、誌代を振込み、小社から領収書を受取られた方には、領収書記載の通りに本誌をお送りします。たとえ、5年分でも10年分でもです（年間5,000円の誌代は、例月号10回分ですから、増刊号については、別途ご送金いただくことになります）。

◆2年目、3年目にまたがってご購読の方は、ご面倒ですが計算して下さいませ。例えば'84年2・3月号から'85年1月号まで、という方は、

500円×1（2・3月号）+530円×9（4月～1月号）+700円（増刊号）=5,970円となります。

ご不明の点は小社にお問い合わせ下さい。Tel. 03・326・1380



## バイクへの気持ちは誰も抑えられない

宮 淑 子

新品の四〇〇CCのバイクからヒラリと降り立ったK君。顔は笑っているが、右足は引きずって痛そうだ。

——どうしたの？ その足。

「ねえ、きいて下さいよ。また事故っちゃったんですよ。といつてもボクがミスったんじゃないですよ。車が幅寄せしてきたんですよ。アッ、ヤバイと思う間に、縁石の上に降り出されて体が宙を飛んでズデン。右足の上に自分のバイクがドタッですよ。救急車が呼ばれてチョットとした騒ぎでしたけど、ヘイキ、ヘイキ、歩けますよ」っていつて、その場を立ち去ったわけですよ」

——そういう事故はしょっちゅうなの？

「そうですね、世の中は車優先ですからね。ドライバーは、バイクに乗るボクらを憎々しげに見てますよ。ボくら、左車線の一番内側を走ってますからね、車がウインカーも出さずに左ターンされると、引きずり込まれちゃうんですよ。それを承知で幅寄せするんだから、頭に來ますよ」

K君。都立高校定時制の二年生。十七歳。

将来はスナックを経営したいという夢の持ち主で、昼間は喫茶店でバーテン修業の身である。昨年の暮れ、バイクの免許証を取ってからバイクに魅せられ、深夜の喫茶店のバイトを申し出て、稼ぎのほとんどをバイクに投資している。これまで転倒事故は数知れず、体をスリ傷だらけにして級友たちを心配させている。

——そんな危険と隣り合わせても、バイクに乗りたいの？ バイクの魅力って何？

「ボクね、六歳のころスケートを始めてパランス感覚のおもしろさを知ってから、つぎはアイスホッケー、そしてバイクと進んできたんです。スピードとバランスを保ちながら、コーナーを回るときの、あのゾクゾクした感觸はたまらないですよ」

——級友たちに心配かけても？

「そう。ボク、バイクで死ねば本望ですから。親もね、その位覚悟して乗るならいいっていつてます。でも、ボクはボクなりにモッ

トーを掲げて乗ってますよ。人にぶつけない、車にぶつけない、人を乗せないの三つのモットーです。自分の始末は自分が背負えばいいわけですから。親友に、万が一のことがあったら、ボクの骨を拾ってくれて頼んであるんですよ」

——親も、学校も、人命尊重のために「三ナイ運動」：（免許を）取らない、（バイクを）もたない、運転しない……を提唱してるでしょ？ アナタの学校ではどう？

「免許を取ることは自由ですけど、学校への乗り入れ禁止と、学校近辺の乗車禁止です。法的には十六歳で免許は取れるんだし、学校

以外の所で乗車するんだから、もっと自由にさせてほしいとボクは思いますけどね。規制すればするほど、無免許運転のヤツと、ゾク（暴走族）に入るヤツが増えるだけです。誰もバイクに乗りたい気持ちを抑えることなんかできないハズだから」

無謀な改造は禁じられているのに、マフラー（消音器）やミラーなど、数カ所を自分が乗りやすいように改造した四〇〇CCの快音とともに立ち去るK君。レーサーへの夢を描くK君を、誰もとめられるハズはないのだ。

# 視 点

## 〈不条理に怒れ〉

長谷川 孝



「お母さん、かわいそうな先生だね。そういう先生たちに教わっているぼくたちも、貧しいんだね。だから、許すよ」

教師に顔をなぐられ、鼻の軟骨にひびが入ったうえ、その衝撃で目玉が飛び出るほどにはれあがつたという中学三年生の男子生徒が、母親に語ったことばだ。さまざまな悲しみが胸に突きささって、教師の暴力に対する怒りが出るのに時間を要するほどだ。

このごろ、教師の暴力（体罰）についての原稿を書かせてもらう機会が多い。この中学生のことばも、取材のために、相模原市のK中学校のお母さんたちに話をうかがっているときに聞いた。原稿を書く材料は仕入れたものの、私の気分は重かった。

いったい、教育という名で、学校のなかにまかりとおる暴力——その根底にある権力支配の構造——に対して、私たちはなにを為しうるのだろうか。私たちが無力感さえ強いられるのは、いま学校教育の諸問題とたたかうとき、いやおうなく国家（国家の行政権力）と向き合わざるをえなくなっているからだといえる。「教育に国家はいらない」（私の所属する郷土教育全国協議会が昨夏の大会で打ち出したテーマ）のだが、どうやって国家の介入を排除し、地域を住民の手にとりもどし、学校を地域にひらいたものに変えていけるのか、と考えると、有効な答えに窮するのだ。しかも、暴力の前に痛

めつけられている子どもたちに、いま、どのような手を差しのべようのだろうか。

教師に向けて、この状況をどうするのか、立ち上がれ、と呼びかけても、反応は期待しえない。体罰を教育の手段として選んでしまうことは、教師たちの人間性と労働の内実の貧しさを示しているからだ。しかも体罰を行うことで、ますますその貧しさを深めていく。自らの中身が貧しいということに気づく感性和知性が鈍磨しているから、体罰でしか自らを支えられなくなっているのだ。だから、体罰を手放そうとはしない。

だとすると、子どもたちの犠牲のつみ重ねによって、破局がもたらされ、また子どもたちが傷つくのを、待たねばならないのか。「荒れる中学」などといわれる状況はどれも、こういうプロセスを経て、学校秩序の小康が回復される、という事例ではない。

文部省の中学校教育課長が、自書の出版を伝える小さな記事のなかで、こんなことをいっている。

「思いやりを根底に据えた新しい社会ルールづくりが必要」「学校では、他人への思いやりが大切だともっと教えてほしい。そうすれば校内暴力も減るわ」（朝日、83・8・17）

でも、どうやって思いやりを「教える」の？ 体罰だって教師



は、「生徒への思いやりが余って」なんていいますよ。学校の現実のなかでは、思いやりのない子には厳しい体罰でビシビシと思ひやりの大切さを教えたりしますよ。——私は、つぶやかずにはいられなかった。だいたい、学校はいま、思いやりの育ちうる場所ではなくなっているではないか。まず教師が子ども（生徒）に対して「他人への思いやり」をもつてかわかることがだいじだし、教師相互のあいだにも必要なのだが、そのためには、権力的で支配者的で管理的で官僚的な、態度や制度や命令や秩序などを学校からなくさねばならない。しかし文部省は、特別権力関係などという法律論を掲げて、学校の生徒・児童は「権力の包括的支配に服し」、基本的人権さえも制約される、という立場をおしすすめているではないか。

いま学校は、思いやりなど育ちえない風土となっている。そこでは、人間の自由も自治も不毛なのだ。権力が上から貫徹しているところに、どうして思いやりや自由や自治が育ちえようか。自らの労働の内実が貧しく、自らが人間の尊厳を大事にされないで、どうして教師が子どもたちに、思いやりの態度で接しえようか。思いやりの表現のしかたさえ体罰になるような歪んだ状態は、「教え—教えられる」という教育秩序も含めた、権力化した学校風土が生みだすのである。

文部省が教育そのものから手を引いたとき、学校に思いやりの風土が根づくだろう。それが、学校教育の〈自由自治元年〉だ。

体罰とは、教育的な動機による教える者の教えられる者への暴力（もちろん精神的暴力も含む）である。それは権力の暴力だ。私は、権力とは不条理だと思う。特に、教育における権力は、不条理以外の何物でもない。権力的であるかぎり、教育もまた不条理だ。そう

いう教育を私は、「教育」と表記して区別する。

以前、不条理とたたかえ、ということを書いた。人間だれしも、不条理なことを行いうるし、行っている。それをお互いに許しあって生きているわけで、他人の不条理を許すことが思いやりだ、ともいえよう。だが権力（の不条理）に対しては、一かけらの思いやりも必要なのではないか。基本的には、不条理とたたかうことは権力（性）とたたかうことだ、と私はいいたい。そして思いやりとは、おのれの権力性を自己チェックすることではないかと、とも思う。

なにか不条理の「基準」のようなものをと考えると、やはり権力（性）の有無だ、といわざるをえない。しかし外在的にそのような「基準」を作り出すのではなく、一人ひとりの内側にへいかりの拠点〉として蓄えていくものだ、と思う。そしてその拠点からおのれの〈問い〉を紡ぎ出し、見つめ、発し、それぞれのスタイルで行為に表すことが、大事なのだ。

一人ひとりが不条理だと思う、そのことは、誤りもあるうし矛盾もあるう。だが、それこそが〈まなぶ〉エネルギーであり、民衆の〈まなび〉と知恵の源泉でもあるだろう。〈教育〉（つまり「教育」でないもの）とは、その民衆の〈まなぶ〉たたかいを支援し、いかりの根源をより深くさぐり、おのれの〈問い〉の質を高め、共有していくことに連帯する行為なのではないか。

権力の暴力としての体罰の横行を許している私たちおとなの在りようは、たしかに貧しい。そのおとなたちの社会の在りようも、また貧しい。不条理に怒らない私たちの不条理が、体罰を許しているのだ。K中の体罰を受けた生徒のことばは、暴力をはるかに乗り越えた、深く鋭い怒りなんだよ、体罰先生！

（教育評論家）

# 霞 通 信

武 田 秀 夫

あ る 典 型



少し遅れてはいって来た中学一年生のSさんは、テーブルにつくなり、前の席のK君のノートを見て、「いつのまにか字がきれいになったねえ」と言いました。K君は「そんなことないよ」と大きな身体を小さくして照れています。「なにしろはじめのころは、ノートに字がサクレツしてたかんね」とSさんはそんなK君にかまわずに、遠慮のないことを言います。「うん、前から比べるとずいぶんちゃんとしてきたよ」と私がほめると、K君はいっそう照れて、「まだ、だめだよ。この前もテストのとき、字が全然読めないといって、先生が採点してくれなかった」と言ったので、他の三人の女の子もいっしょにみんなで大笑いしました。ノートに字がサクレツしていたとは言っても言ったりと私は感心してしまいました。半年ほど前から教室に通うようになったK君は、その字の異様な乱雑さで私をびつくりさせました。漢字はもちろん、平仮名にしても数字にしてもほんとうに雑で、書いた本人も自分のノートの字が読めず首をかしげる始末。だいたいのノートの罫に字が沿っていないのです。

ノートの罫などとは無関係に大小さまざまな字らしきものが跳梁しているそのノートをみたとき私は、Sさんの形容ではありませんが、地表が砲弾の炸裂によって一面に痘痕と化した戦野を見ているような寒々とした気持になったものです。生きているものの気配さえ感じられない荒涼たるノート！これはもはや字が上手であるか下手であるかといった問題ではない。字の下手な字はずいぶん私の教室にもいる。しかしその子たちのノートは、こんなにこちらの心を寒くさせるような荒廃した感じを与えはしない。下手は下手なりに、字を書くという振舞の一途だけはこちらに伝わってきて、私をこんな不安な思いにひきこむことはない。これはいったいどういうことだろう。私は、そんなふうに思ったものです。

クラスで背がいちばん高いというK君は、しかしまだ声変わりもせず、子供っぽい声で「おれらの中学校の国語の先生、女なのにおつかねえのよ。宿題やっていかねえとハリピンだぜ。ビビッちゃうよ」などとおしやべりしながら、三人の女の子たちにまじって、楽しそうにやっています。

のつぼのK君は、しかしまた、運動が得意ではないといえます。たしかにK君を見ていると、長い手足をあたかも他人の手足のように持て余して、いくら速く駆けようと思ってもスピードがいっこうに上がらないといった様子が浮かんできます。またたとえば鉄棒にぶら下がっても、懸垂することもならず、身軽に飛び下りすることもままならず、困惑した表情を浮かべて宙に長くなっている、そんなさまが彷彿としてきます。

運動が好きでないK君の最大の伴侶は、いまのところ自転車です。

す。中学生になった記念に上等のサイクリング車を買ってもらったということ、教室に通いはじめたころは、勉強していても雨が降ってくるとうう気が気でなく、「あ、まいったなあ、自転車濡れちまう」と心は外に置いてある自転車にとんでいつてしまふ。お母さんはそんな未っ子のK君を、「中学一年生になつてもまだ赤ん坊みたいで、困つてしまふんですよ」と笑います。

そんな気のいいK君が、ハアハア言いながら自転車であつてきて、頬を紅潮させてテーブルにつくと、とたんに、投げやりな姿勢に変わつて死んだような字を書きはじめる――。

K君は前かがみになつて字を書くことをしませんが。長い足を投げ出し、椅子の背に身体をもたせ、シャープペンシルをかちやかちや言わせながら、自分からずいぶん離れたところに広げたノートにだるそうに字を書きます。あたかもこれはおれが書いた字ではないよと冷淡な構えをポーズとしているように。

私はそんなK君を横から眺めているうちに、だんだんにわかつてきました。K君において、字を書くことと書いている自分との間につながりがないのです。字を書いている自分自身に、当のK君がきわめて冷淡なのです。そんなK君に字をていねいに書けといくら練習させてもだめなのではないか、字を書くことと自分自身との間に、あるつながりを実感できるまでにK君の中の何かが癒される、あるいは何かが育つのをゆつくり待つほかない、そう私は思ったのです。

おそらくK君は、小学校に在る間中、耳にたこができるほど「字をもつていねいに」と言われつづけてきたのでしょう。そういう言われ方だけをされてきたのでしよう。それなのに中学生になつて

もなおそうした凄まじい字を冷然と書きつづけるK君は、少なくとも「もつていねいに字を書け」ということばに対しては石のような心をもつていたっている、それだけは確かなような気がします。となると、彼の荒涼たるノートは、彼の一種の思いを逆説的に表現しているのだと考えられないこともありませぬ。

字というものがそのように子ども心の屈折した表現になつてゐる場合があるということを、中学校の教師をしているうちにいつのまにか心づくようになりまして。といつてもそれはK君の場合とはおもむきを異にして、女の子の中に、自分自身だけにむかつて書かれたような閉鎖的な強い癖のある字を書く子が少数ながらいつもあらわれたということなのですが――。

K君の字の居直つたような乱雑さとは全く反対に、判で押したような独特の字体を、教師の度重なる指摘にもかかわらず頑なに守りつづけるその子たちは、きまつて、螢光燈の下では判読に苦しむような薄い鉛筆で字を書きました。外の人に何かを伝えるという、字というものが本来的に持つ側面を無視して、ひたすら書いている本人にのみ奉仕するように、それらの字は書かれていました。が、それもある時期をすぎると、彼女たちの字の表情も外側を向きはじめ、字と字の間に外界の風が吹き抜けるようになっていく――。だから、と私は思うのです。いまは自分で自分の身体をあつかひかねているように見えるK君も、そのうちに必ず身体の間々までを自分の意志で貫き、また自分の書く字の一つ一つに自分の意志を行きわたらせる、そうしたきりつとした少年になるだろう、それまで時間をかけて見守つていこう、そう私は思つてゐるのです。

# 高校生の意識を探る

古田 励子

能登地方で初めての「高教組地区教研推進委員」なるものを引き受けて、七尾地区の教研集会を無事終えることができた。七尾高校から発表するはずの方が急病で入院、その時は教研まであと一週間というところだった。せつかくの発表のチャンスを失うのは惜しく、かねて本校生の意識を探りたく思っていたので、急拠アンケートを実施した。設問は、三年前に石川女性懇話会が県内の有職女性に対して行ったアンケートを利用し、いまの高校生を比較してみた。アンケートをまとめてみて、今から二十五年前の私の高校生時代と比べると、隔世の感を持つ。その結果を簡単に報告したい。

## A、男女の能力差について

・訓練次第で、男だつて女ほど上手に家事をやれると思うか  
91%が男女差なく「そう思う」と答えている。三年前の石川の有職女性（以下有職女と略す）は「そう思わない」が76%で、男の家事能力をみくびっていた。

・男でも無能な人もいるし、女でも有能な人はいる、能力に男女差は全くない  
83%が「そう思う」と答えている。これも男女ほぼ同数であった。有職女も81%が男女の能力差は「なし」としている。

・国会議員や裁判官は、やはり男性の方がよいと思うか  
惜しむらくは、男子生徒のほうに「そう思う」ものが多

く、全体では49%が「男の方がいい」と答えている。

・現在は実力の時代、女の平均賃金より男が低くても仕方がないと思うか  
これには「そう思わない」ほうが59%で、特に女子に多かったのは残念だった。有職女も「そう思わない」ものが51%である。

## B、現状把握力

・今の社会は男性中心に動いていると思うか  
「そう思う」ものが65%、有職女は71%で、社会に出ていっそう実感する問題であることを裏書きする。

・女性が出産退職し、育児専念後、再就職を希望した時、職種や仕事があると思うか  
「思わない」ものが66%で、有職女の67%と差がない。

・自分の老後は老人ホームに入ったりするより、子供夫婦と同居したいと思うか  
高校生が「そう思う」69%であるのに対し有職女は「そう思わない」が65%である。

・お金さえあれば、老後は困らないと思うか  
これは「そう思わない」高校生60%と、「そう思う」有職女70%で、前問とは逆の結果が出た。

## C、女性の自立

・女性が職業をもつ主な理由は、家計を助けるためだと思うか

- 「そう思わない」が53%で、特に女生徒に高い。しかし有職女は、「家計を助けるためだ」と68%が答えている。
- 女子の大半が四人に一人の割合でしか就職できない状況を腹立たしく思うか
- 女生徒の八割が「そう思う」だが、男生徒は三割しかない。
- 妻は夫が決めたことは、多少の不满があっても守るべきだと思うか
- 妻は一万円以上の買物をする時、夫の承諾を求めた方がよいと思うか
- 男女あまり差なく「そう思わない」ものが約六割で、有職女(53・51%)より高い。
- 女の子なら、自己主張するより、ひかえめでやさしい子に育ってほしいと思うか
- これは男女差があり、「そう思う」男生徒六割、女生徒三割、有職女は49%だった。
- 女の幸せは、何といっても結婚、男しだい。幸・不幸はきまると思うか
- 男女ほとんど差なく58%が「そう思う」と答え、有職女も同じでがっかりした。
- 自立した女は、強情でやさしさに欠け、鼻もちならないと思うか
- 「そう思わない」ものが90%、有職女の67%より高い。
- 世界中の女たちが、その国々で団結すれば地球上から戦争をなくすことができると思うか
- 有職女の70%が「そう思う」と答えたのに対し、高校生は

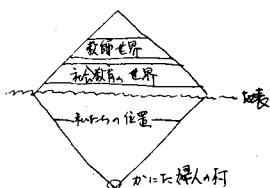
- 66%が「そう思わない」。
- D、家事・育児の共同責任
- 子供が非行に走った時、その責任の大半は母親にあると思うか
- 「そう思わない」高校生87%、有職女70%。
- 男がエプロンをつけて台所に立つのは、ゆきすぎだと思うか
- 高校生は「そう思わない」が68%であるのに対し、有職女は「そう思う」82%。時代の変化を最も強く感じる。
- 男子の高校生が学校で家庭科を学ぶような話が出ているが、とても賛成できないと思うか
- 「そう思わない」が67%、やはり女生徒のほうが高い。有職女は57%。
- 女性の子供が生まれたら、しばらく家庭に入り、子育てが終わってから働けばよいと思うか
- 「そう思う」が73%、男女差はあまりなく有職女も68%がそう思っている。
- 以上、アンケートのごく概要のみを報告したが、有職女性と高校生の間に、人生の波をかぶっている者と、それを前方に見ている者との差が歴然と感じられた。また、女性の実力が男性のそれより劣っているという決めつけ方は薄れたし、家事育児は男女双方の責任という考え方が徐々に根づいているところに、時代の声を聞くように思う。日常的な問題ではまだまだ古さを捨てていないが新鮮な感動を持った。石川女性懇話会のアンケートまとめを使わせていただいたこと、調査にご協力下さった七尾高校の皆様に厚く御礼申し上げる。
- (石川県立中島高等学校)

## 地と人との位置をめぐって思う

辻　つとむ

私はいま、三世代同居し、地域社会の中でフルタイムの仕事を持っています。わが家の北側こそ家が建っています、南は広々とした水田、西には山があつて太陽が早く沈みます。自然豊かなところだけに、いなかの習慣もしっかり残っています。当然嫁の物言えぬ立場も存在しています。それでは息がつまると、家を三姉離れば、職場は明治の会長がしつかり牛耳つて、われわれは奉公人でしかないのです。そして奉公人同士でも、江戸・明治そのままに身分制度がしかれています。縁故、男、学卒。そして男なら減私奉公度、女なら若いこと、さらにかわいいこと。私たちオバハン組に残された道は、ただひとつ、耐えること！ 相手が頼み忘れた仕事はきちんと片付けてあつて、言いつけることを思い出せたことは忘れていて、しかられ役になり、かわいい新人さんの五人分の仕事をこなしても、ニコニコ、ハイハイと言っていないければいけないのです。

ついにはみ出してしまつても、嫁ぎ先で選び与えられた職（会社）はやめるわけにもいかず、居直りました。それまでの過程で、もろさわようこさんの著書に始まり、伊藤雅子さん、We『人間って不思議』につながつていったのです。そして『人間って不思議』でかいた婦人の村の深津文雄氏の言葉を読み、納得できました。逆三角形の頂点にいる人がある



のだから、ピラミッドの底辺から地下のピラミッドの頂点へ下っていく途中に位置する人もあるのだ——と。そう考えて自分の周りを見回してみると、理解できることばかりです。地上ピラミッドではあいさつのように通じることばでも、地下へもぐる時屈折することばがあるのです。悪意はなくても、地下へもぐる時屈折することばがあり、あいさつを返してもらふことを期待されるため、ますます負担が増えるのだと思つて、支配者のことばを聞くと、なんと素直に聞けることでしょう。

We の読者会で、教師の世界は特殊だとおっしゃった方がありました。先生がお互いに先生と呼びあうのはおかしいとおっしゃった方もありました。社会教育の多さに驚いている方もありました。でも、私には、それらはみんな地上ピラミッドの中でのなしに思えるのです。図に書けば、こんなふうになると思います。

でも、私は自分の現在位置を卑下しません。人間は下を見るよりも上をめざしたがるものです。地上ピラミッドにいる人が上を見ると、視野がせまくなります。地下ピラミッド側は、上を見るときますます広くなるのです。そして、それこそヒガミだと言われそうですが、地表というところは、ずいぶん厚い

壁になっていて、そこを超えることは至難のワザです。だからかえって冷静に見て、考えられるのです。観察者で終わってよいわけではありませんが、熱い人もいれば冷たい人もいなければ世の中ではないでしょう。

六月号に書いていらつした川名はつ子さんも、同じようなことを感じていらつしやるのがきつとあると思います。だって、Weに対する要望は、まったくいっしょなのです。働くのがあたりまえの状況も同じです。レベルの差はありますが、ノンキャリアです。家事を含めれば、一日15時間労働でも、まだ不満な使用者側と家人たち。存在すら無視したような態度。それにおびえていた私でしたが、地下ピラミッドも、地上ピラミッドをしっかりとささえている地盤なのだ、と思つたら、かえって、地上の人たちも、追われる身とわかりました。無視したいけれど、実はできないことを本能的に悟つてあの態度なのかと思うと、かえって気の毒です。

自分の子どものことで恥ずかしいのですが、教えられたことを思い出したので書きます。理科の先生のサークルと一緒に、夏、海に連れていっていただいたことがありました。子どもも教えていただいたことがない、私たちににとっては顔も知らない人ばかりなので、メンバー表を見て「さん」付けで呼んでいたのです。さて当日、先生方がお互いを「先生」付けで呼ばれるのに、うちの子どもが「さん」付けで呼ぶので、あわてて「みんな先生と、その子どもなのよ」と教えましたところ「でも夏休みだから、先生も休みでしょ」と言うのです。差別をしないようにと育ててきたつもりでしたが、

差別は上に対してもあるのだ、とハツとさせられました。「休みでも知識がなくなるわけではないのだから、尊敬に価するのだ」とあわてましたが、上への差別ということは心するべきだと思いました。



いまの大人たちは農耕民族のタイプだが、現代つ子は狩猟民族のようだ、といわれている方があるそうですが、私はちよつと違うように思うのです。そのことを書いてみます。

私は会社で行われた講習会で帰納的思考法について教えてもらいました。これは農耕民族の考え方で、昨年の経験を今年に生かし、今年の経験を来年に役立てる。つまり階段を一段一段登るやり方で、どちらかといえば長男的考え方、社会・国語学者が多い。狩猟民族は次男的考え方、理数学者に多く、演繹的思考法という、と聞きました。

ヨーロッパには、あちこちに昔からの森がそのまま残されていますが、彼らは狩猟民族だったから残したのです。森を切り拓くと水田ができる。五年後には食べられる、と思うのが農民で、森の中の道を広げるだけで生物分布図が変わり、子孫の代で食糧が得にくくなると思うのが狩人なのです。長期というか、広い視野が持てるのは、どちらかというと演繹的思考法なのだそうです。

私は、帰納的思考法にうずまき思考、演繹的思考法に波紋思考と名付けて、お返しに社内講習会で説明しました。そして話しながら、ちょうど前述の講演の後だったので、現代つ子は映像的思考、つまりポツン思考だ、と思いつき、前後の関係も考えず、目の前のいまやかした間違だけを直しても、ちつとも進歩してない、と言いました。どうでしょうか？

◆  
哲学の出版が少なくなつて、心理の本がよく出るようになった。ハウツウものは、各層の人たちがたくさん買つていく。テレビに害された頭は、じっくり考えることができなくなつて、その場その場の対処さえできればいいようだ。けれど、環境条件のちがう人の書いたハウツウを読んでも、どれ

## 私の仕事

私が乗り降りする京王線の八幡山の駅から都立松沢病院の中庭を見下しますと、銀色に光るすずきがとても美しいのです。高架駅ですから、冬の朝は風がためたく、うらめしい気持ちになります。が、今は一年でも一番さわやかで、私は好きです。十一月六日が結婚記念日なので、あのころのはやる気持ちも、季節の風とともに思い起こされるのです。

勤め先の江東区は、海が近いせいもある、潮の香で季節の節目を感じさせます。最初はこの生臭さがとてもいやでしたのに、不思議と気にならなくなり、それどころか「職場に来た」という感じさえ抱くようになりました。江東区の社会教育課で働きはじめて四年。三多摩のような、地域に根づいた、エプロン姿でふらりと訪ねられるような施設のないことを恨みに思いながらも、様々な出会いを通して知りあひになった方が何人かいらして、時々声をかけたり、かけられたりする事が多くなりました。中には名前を忘れてしまった人

だけ生かすことができるか。本のとおりにはいかないと、ノイローゼになる人まである、と現代を憂えた講演を聞いたことがあります。もっとも「新しい家庭科」が見直されて、みんなが人間として、いいえ、すべてのものが生物として、それぞれに生きられるように、ゆがむことなく個性を生かし得るように、そのためには？というのが私の課題です。

## 杉本 千代

もいたりしますが、連れのお子さんが大きく成長されているのを見ると、とてもうれしくなります。やはり出会いが大切にしたいと思っています。

今季の婦人学級は、来栖さんというとてもステキな助言者をお迎えして、ふんわり、チクツ、ふんわり、という感じで進んでいます。「会話のない夫婦」「人間同士のコミュニケーションができなくなっている夫」「男役割に閉じこめられている夫」「主婦役割から自由になれない妻」「主婦手当をどこに求めるか」というような話し合いが中心です。

三十五歳から五十歳の今の女たちは、トータルな生き方を前の世代から継承していない不幸な女たちだと、講師の一人長谷幸江さんが言っておられました。風船のように、一度空気を抜いて、もう一度ふくらませることができのならば、女たちもこんなに悩まなくてもすむのに。しかし、だからこそ、これからの人生（ヘン！）がんばって生きたい。そんなふうに、元気な主婦たちが、たくさん友達



を作って仲間の輪を広げていってほしいと思います。

一方、区の財政も、大勢と違わず苦しくなっている折、来春の予算編成に向けてのヒアリングが進んでいます。学級にこられる方たちの熱い思いとは裏腹に、経費の制限、事業の短縮、統合の空気が色濃くなってきました。民間ベースのカルチャーブームで、今や公費を使ってまで、こうした似たような事業をする意義がどこにあるのかと、婦人学級に一度も顔を出したことの無いような男の人からの声が高くなってきました。

事業の評価を、学級修了生の数で測ることもしかない、そうしたさびしい男のやりかたに、どう学級生の声を伝えるか、今悩んでいます。婦人の自立なぞ、公的機関がアジることとはウサンくさい、とも言われます。そうなのでしょうか。

たしかに〇〇コミュニティカレッジ、△△カルチャー、××文化センターでも、婦人問題は学べます。でも、サンダルばきで、ちよっと顔を合わせることでできる距離にいる女たちが、ベタベタの手でおかしをほおばる子どもたちをひざに乗せながら、話しあい、悩みを打ち明ける中にこそ、生きた学びの場はあるのではないかと思います。お金をかさなくとも、遠くに電車を乗りついでいなくてもすぐそばに、大切なことを学べる場を用意しておくこと、それが社会教育だと思うのです。

しかし、最後席にすわり、講師の話を、首をかくんかくんに振りながら聞いている人たちの背中を見ると、何か要塞の内側で足もとをすくわれそうな気分になることもありま

す。そんな気持ちで、私は学級を見守っています。

(東京都江東区  
社会教育課)

## 新しい家庭科We 増刊号

学校はよみがえり得るか！

12月刊行 A5判 一二二頁

〈定価〉七〇〇円

いま、問題が噴出している学校と家庭  
「新しい家庭科」は、  
そのかけ橋となり得るか？

「We」が開催した  
二泊三日の夏季フォーラム  
全記録！



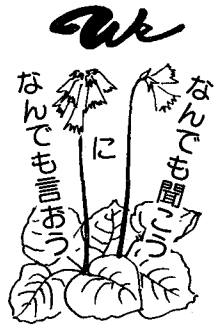
### 〈ご注文方法〉

1 ウイ書房へ直接お申し込みの場合  
書名を明記の上振替で。又は切手で。送料はいりません。

2 最寄りの書店にお申し込みの場合  
地方小出版流通センター扱いとおっしゃって下さい。

182 東京都調布市西つつじヶ丘 2-25-14  
振替口座 東京 6—59867

ウイ書房



◆この二時間後、わたしは津田塾大OGの「あまのじゃく」さんたちとデイトをすることになっている。何を着ていこうかな？ 忙しさにかまけてほとんど新しい洋服は買っていない。でも「あつ素敵」って思われたいから原稿を書き終えたら、工夫してみよう。フンフンフフフン（これ鼻歌！）

中嶋さんの文章を読んで、つくづく彼女ってからだまるごと自由な感じのする人だな、って思った。自由な電波がビンビン伝わってくる。彼女は私が一年前渡米する時紫色の上下のパンタロンに白い帽子で現れた。「せいっぱいおしやれしたのよ」と言いながら私の前でクルリと回ってみせた。この夏、帰国した私が一番先に出た会

合は「行動する会」の合宿だった。中嶋さんはそこにピンクの洒落たデザインのパンタロンスーツでやってきた。ロープ風のベルトで腰をしめ、とっても目立った。おとしのTシャツで行ったわたしは少し負けそうな自分を隠そうと「わあーっ!! 目立ちっ子」などとはやした。中嶋さんは「だって一年ぶりに会えるんだもの、うれしくて。あなたのために着てきたのよ」などとまるでフランス映画に出てくるような台詞をはいた。ジーンときた。

家を出る前に、わたしのことを思いながら鏡の前でファスナーをかけたリ、袖を通したりしたのかな？ 「ウソ」でもこれは、うれしいことなのです。

以前、女子高で教えていたころ担任だったクラス全員とけんかしてしまい、ずうーっとHRにも行かなかった。どうやって仲直りしようかなと毎日悩んだ。考えた末わたしは仲直りの印に今までとは

ぜんぜん違う洋服で教室に行った。久しぶりの生徒の顔がわあーっと叫んだ。その時、わたしの着ていた洋服は赤いハートが無数にプリントされている白いワンピース。一日かけてデパートで見つけたものだった。あの日、生徒たちの中にはわたしが中嶋さんに抱いたような思いを、わたしに抱いてくれた人もいたにちがいない。

考えてみると、生徒の方にはこういう表現方法はないんだな。きょうのわたしの思いをこの色になどと胸ときめかせて鏡の前に立つことはできない。制服がある限り。でもひよっとすると真赤な下着を着たりしているかも。幸いなことに下着にはまだ服装管理の手が届いていない。

（八王子 三井マリ子）

◆夏のフォーラム二日目、ニュー向洋の夜の話し合いで、男の方が、We六月号に載った私の文について「ソフト」の犠牲になることであきらめている……」との感想を話されました。そのことから家事労働についての意見が沢山でました。Weでもこれをテーマにとりあげたことがありますが、その時も「家事はつまらない仕事」という意見と「家事だって生きがいはある」とする人に分かれたように思います。『性の深層』で著者アリス・シュヴァルツァーは「いつの時代でも、常に男であるうと女であるうと、抑圧されている方の性に家事労働と子育てがあてがわれているようだ」と述べています。私も現在の家事労働は全く嫌いでやりたくない方ですが、これを読んで嫌だという理由は、家事労働が男女差別の意識と社会構造とに密接に関係しているということだとはつきりしました。女性と差別されている社会においては、家事労働はその意味において楽しくない。本当の生きがいとはなり得ないのではないかと。

家事を互角に分担されている福田三津夫さんも真意は「やりたく

ない」とおっしゃいます。やはり男性優位社会で互角にやる夫婦はめずらしかれる状態が微妙にあるのではないのでしょうか。

佐々木賢さんは「生きがいとなる家事だつてある」ということでイリイチの言をひいて家事を「シヤドーワーク」と「バナキュラー」に分類することを言われました。

しかし残念ながら男の方たちの意見を聞いている私の実感はアリス・シュヴァルツァーに全く同感せざるを得ないということでした。現実が男優位社会であり、その中で

育ち、生きてきた男たちの家事労働に対する感覚は、女のもつそれとは微妙に、いや人によっては大きくズレているのです。Weの男の人でさえ（と言ったら失礼だが）、それは女と共有できない意識である。それほど女差別は歴史的にも現在も重く深いものであるという実感でした。

もう少しつけ加えるなら男の主張する「一夫一婦制反対」の根拠は

女とは違うなあということです。

これは私の学校の分会の人たちと話してはつきりしたのですが、男は家事や育児の分担は念頭になく、ただ「一夫一婦」はきゅうくつでアキがくる、という理由で反対するのだということでした。

話が少し横にそれてしまいました。たが、「風通しの良い男女関係を」と女が安易に実践することは、沢山の危険性がひそんでいます。もつと現実の重くて深い問題を、男の意識の深層を明らかにせねばと思ふのです。（三島 梶原公子）

◆持ちつ、持たれつ、互に相手尊重する気持ちの美しさを、このごろつくづく考えています。今、男性が無理解だから、男社会だから、女の社会進出が妨げられ、女が男の犠牲になるというように、男性に攻撃が向けられているようですが、では、その障害がとり除かれて、自分の生涯なすべきものができる状況におかれた時、果たして、自分の本当に求めるものは

何かを見きわめ、それに打ち込める人はどれだけのるだろうか、と考えてみました。切に求めるものもなくして、何となく不平・不満をかこっている人が案外多いのではないかと。でも、これからの人たちは違うかもしれません。

Weのこと、あの初めの熱気がおさまった今からが、Weの本当の苦労が始まるのでは、そして喜びも——と、思います。十一月号の志賀かう子さんのような、格調の高い美しい文に接すると、購読をすすめるのに力が入ります。

（北上 押切 郁）

◆「すりばち荘で、山田修先生の話聞く会」をぜひ実現させて下さい。いい音楽にひびく心を失いたくありません。美しいひとに会う旅ができるよう、身辺整理を急ぎます。ガラクタを早く捨てて、心身共軽くして、この会を待っています。（東京 武末久子）

◆昨日は、子供の学校が休みでしたので、家族でドライブをしました

た。友達の芳恵さんの子供（四歳）も預つて、一緒に札幌郊外の森林公園へ。先日は芳恵さんのおつれあい（うちの子供も一緒に水族館に連れ出してくれました。私たちは、こうして子供たちに血縁によらない姉妹愛を育てさせつつ、お互いに感謝して骨休めをする関係を作っています。

昨日出かけた公園は、紅葉と雪景色が重なって、それはステキなながめでした。また駐車場から公園内、滝の正面に行くところまで、車椅子の人でも大丈夫のように、道とトイレが配慮されており、早

速障害者の友人たちに紹介しようと思つて帰ってきました。障害者の方々と一緒にドライブや旅行に行く、たいがい一番眺望のよい所をギブアップしなければならぬことになりました。大自然の中に人が踏みこむ道を作るのであれば、その「人」の中に障害者や老人を含ませる配慮を欠かさないでいきたいものです。（岩見沢 山口里子）



④ かけむしろ そだち

藤田健次

「掛け延育ち」。玄関の戸をびたりと閉めなかったり、開けっぱなしにして出入りするひとのことをいう。それはなぜなのかとなると、ちょっと説明が必要になる。

むかしは、みんな貧乏で、手作りの小屋に住むひとが多かった。その出入り口には、ムシロを一枚ぶら下げた。それが、玄関の戸の代わりである。

ムシロ戸は便利なもので、出入りするのに手は不用。頭か体でぐっと押すだけでもう往復できる。だから、そんな家で育ったひと——つまり「かけむしろ育ち」は、立派な戸のついた家を訪れても、ついついものくせで戸を閉め忘れるというわけである。

「こらっ！ まんだ戸開げだま

んま出で行って！ 掛けむしろ育ちあこの！」などと、津軽生まれの私は、小さいときによくきいた。

今は、さすがにムシロ戸は見当たらないが、奥地の方へ行くと、古い便所がまだムシロ戸であったりする。

このことわざは、貧しい生活だからこそ生まれたとても悲しい表現なのだが、これさえも、笑いに換価してしまう津軽人の知恵は、またすばらしい。

開けた戸は閉める。こぼれた水は拭く。借りた本は返す——「戸」は、どんな時にでも、びたりと、きれいに閉めなければいけない。生まれてきたから、死ぬ——自分が生まれてきた土にまた環ってゆく死は、最後の大事な「戸じまり」である。

## 一人でお風呂に入れた

栗原 実抄

人間はひよんなことから、自分でできないと思っていたことができるようになるものだ。昨年の夏のホームヘルパー入浴介護拒否事件は、本誌に三回に渡って「ヘルパー戦争」というタイトルで連載させていただいたので、御記憶に新しいことと思う。それで詳しい説明は省かせていただくが、週一回の入浴は従来通りに続いている。私が一人でヘルパーにかかえてもらわずに湯舟に入ることも、なんの支障もなく続いている。

私は三十四年間、人に抱いてもらったり、かかえてもらったりして風呂に入っていた。自分で、それもタイルの壁に取り付けてある金属のバーを片手で握るだけで、湯舟につかれるなんて夢にも思っていなかった。

その日、都立障害者センターの訓練の先生に来ていた

いたのは、ヘルパーに腰を痛めない風呂の入れ方を教えてもらうのと、リフトのような機械を入れなければならないが実際入浴しているところを見て検討してもらうためだった。すのこが敷かれたことで浴槽の縁と洗いの段差は七、八センチは縮まっていた。浴槽の取り付けてある側の壁にバーが横に渡り、あたった。もしかしら、それに右手でつかまっで湯舟に一人で入れるのではと、私は一瞬思ったのだ。すぐに先生に話したら、「じゃあ、今試してごらんさいよ」と言われて、やらざるをえない状況になってしまった。浴槽には横向きの形で入らなければならない。浴槽の縁が足やお尻に当たって痛かったが、なんとか無事に入ることができた。

それで喜んではいられない。自分で出られなくてはどうにもならないのだ。浴槽の内部に足を掛けたり、腰を下したりすることができる段がついている。そこに膝を乗せて上半身を前に倒すような感じで、浴槽の縁を越えなければならぬ。入る時よりも出る時の方が大変だった。一度は身体が前のめりになって、出たのはよいが腹這いになってしまっ

自分でできたことが嘘のようであり、風呂から上がって少したってからうれいという実感が湧いてきた。友人のTさんに電話ですぐに報告した。Tさんはヘルパー交渉の時に助言してくれたり、一緒に役所に行ってくれた人だ。私の知らせに彼女は初めあつげにとられたような感じだった。でも、とても喜んでくれた。

しかし、その次にTさんに会った時に彼女はこう言ったのだ。「三十四年間、あなたは自分で風呂に入ろうと試みたことはないの？ あなたの報告を聞いて、初めはよかったなと思ったけど、後から何だか腹立たしくなってきた」

彼女の言葉に、私は自分が意識していなかった大事なことを指摘されて何とも返事ができなかった。とにかく風呂は誰かが入れてくれるものと思ひ込んでいた私が、突然自分でやるなどと殊勝な行動にでたのだから、人に何を言われても非難されても仕方のないことだと思った。人は必要に迫られないと何もやらないと言うが、今度のことはその典型のようなものだ。何か途方もない回り道をしたような気がした。

ひところマスコミで「地方の時代」が取沙汰されていたが、その後下火? になったのか、さほど耳にしなくなって久しい。

地方に暮らしている側からすれば、そんな……地方の時代と言われたって……と、いつまでも小骨をノドにひっつけたような違和感を抱くほかなかったが、そこらの微妙なかんじをピタリと言いついて文章に、最近お目にかかった。

「グリーン車の乗客が、どうにも乗り心地が悪くなってきたので、これ以上グリーン車の乗客がふえないよう自由席のあたりを整備しようじゃないか、ゆったりした椅子にふんぞりかえって、自由席のほうを眺めながら、そんな話をしている。たとえていえば、いまいうところの地方の時代からそんな印象をうける」——まったく、言い得て妙とはこのこと。九州は唐津で、農業に従事しつつ村の暮らしを書きとめつつけている山下惣一さんの本の中に、それはあった。

玄界灘に面した段々畑で、ミカン・野菜・米づくりをしている山下惣一という人は農民であり、作家である。

「ぼくは「アゴタン」が嫌い」「ヨカおなごボインと力はなかりけり」「原発土方」など

まっぴらごめんだが、など、九州ことばの見出しがついた文章は「地に足ついた日本の民」というかんじの彼のしぶとさに支えられ、なかなか辛らつ、かつユーモラスだ。面白さにひきこまれて読みすすめば、たちまちに顔がひきつる場面に出くわす。たとえば、子どもたちに手伝わせ、家族総

## Weの読書室



### “村”からのメッセーシ

横山 雅子

出で収獲したトラク一台の大根の値段が、なんと、四〇〇円!

またある日、泥田につかって蓮根掘りをしている著者のかたわらを通りかかった婆さんが、エンストをおこした保育園児の孫に言う。

「勉強を好かん人間はどうなと思うか、見てみる、そこのおじさんを。ああならにやあ

いけんぞ」

男たちの笑い、嘆き、女たちのため息、いろいろなものを呑みこみながら存続、あるいは崩れていく村そのものをあまねく書きとめながら、山下さんは村から強烈なメッセーシを送ってよこす。

農業も、村も、暮らしも、そこに根づく文化も精神も、この国は、政治・経済・教育ぐらゐ、よつてたかつてつぶしにかかつてきたのではなかったか。都市の時代がゆきつまり、おわりの様相を色濃くしてきたから「地方の時代」といったって、そうは間屋がおろしませんよ。

人もモノも何もかもが都市に集中しつつくし、残っているのはわずかだとはいえ、新たな価値をつくり出していくのは我われですよ。そこで生まれ、育ち、死ぬ人間。そういう者たちが腰を据えてこそ——。

『いま、村は大ゆれ』『まだ、村は大ゆれ』  
山下惣一著・ダイヤモンド社・980円・1000円

日本全国津々浦々から人々が集まって作った都市、東京の多摩ニュータウンだが、なぜか外国人は住めない都市である。公団住宅の申し込み資格には日本国籍を有する人という項目があつて、外国人をしめ出しているのだ。わが家では夫が北海道で、私は中国生まれの九州育ち、北と南のはずれで育った二人が東京で世帯を持って二十数年、生まれた中国よりも、引揚げて来て過ごした九州よりも、東京が一番長いのだが、故郷はと聞かれると、ちよつととまどいながら九州と答えることが多い。

中国東北部の旧満洲国で、日本人が行った植民地政策や差別について、親の世代のことといつてすまされない、日本人としての後めたさや、恥ずかしさがあつて、自分の生まれた土地である撫順という街を、単純になつかしく想い出すことができないため、「お生まれは？」と聞かれるたびに、ストレートに答えられないのである。しかし、どこにも故郷と呼べる土地を持たない植民地育ちを淋しく思う一方で、どこでも住めば都の気楽さを大事にしているところもあるのだ。

団地に住んで一番親しくなった人は、沖縄の石垣出身だった。南の海がいかに美しい

か、一年中咲いてるブーゲンビリアの花と、パイアとバナナのおいしさ、人々のやさしさと素朴さを、繰り返し私に話して聞かせてくれたその人は、東京を見捨てて石垣に帰ってしまったが、なつかしさと誇りをもって語れ、そして帰ることのできる人をうらやま

### 団地の風景



遠藤和枝  
(カッ・由紀)

しいと思った。

戦後の十数年、私の一番多感な年頃を過ごした北九州も又、私はなつかしさをこめて語れない。それは引揚者としての私たちが、内地の日本人にとってよけい者だといわれた苦しい思い出につながるからだ。

中国のコロ島から、舞鶴へと長い引揚げの旅

の末に、母の故郷である北九州にたどりついて親戚の家で一休みしていたときのこと、そこにいた女の人が、私を子供だと思って「日本は食糧難で困っているのに、こんなにたくさん子供で外地から引揚者が帰って来ては私たちのたべものが又少なくなる」とにくにくしげにつぶやいたのだった。

私はそのとき、自分が日本人じゃないような気がした。そして歓迎されざる人間として日本の中でこれから生きて行かなければならないのだという、強烈な疎外感を持ってそれ以来生き続けて来たような気がする。

植民地育ちということで日本人全体からのけものにされているという被害妄想を、幼な心に植えつけられた。

多摩ニュータウンに入居したときも、土地の人を追いつ出して、緑を破壊して作った団地に入って来た新住民といわれたものだ。

しかし、新住民ばかりで作った街は私には住みやすい。どうせ皆共犯者だという罪の意識の連帯感があつて、どこを向いても半分故郷を捨てている人ばかり、何代続いた家柄などというめんどうなことは何もない。

私にとってはここが一番住みやすい街だからもうどこへも行きたくないと思っている。

## 『積木くずし』

半田たつ子

雨が降っています。水たまりの中にズック靴。その足が泥水を蹴ります。やりきれなさ、さみしさ。

そば濡れた少女が、ぽつんと一人。

スクリーンいっぱい目の目、大きな瞳。またたきも忘れて。それが、ゆっくりと潤んできます。とどめきれなくなつて、涙がしたたります。切なさ、やるせなさ。

こうして「積木くずし」のタイトルが現れるのです。

この映画を、親子三人で見に行くと決めていた朝の新聞に載った記事が私の心にわだかまっていました。(原作者の)「一人娘再びつまづく、いまなお続く闘い」のみだしがつけられていた記事です。

主人公と同年齢の少女たちが、連れ立って来ていました。てんでに小さなおさいふをパチンと開けて、パンフを買っていました。いそいそ、というしぐさに見えました。

映画の内容を書く必要はない、と思います。なぜ十三歳の少女が「非行」のラク印を押されるようになったのか。立ち直らせるには、何が効果があったのか。私は、これらに関心があつたではありません。テレビドラマでやっていたころ友達から評判を聞いた娘が、忘れずチャネルを回すので、何が彼女らの心をとらえるのかと思ひながら見ていました。新藤兼人氏

わたしのシネマガイドわたしのシネマガイドわたしのシネマガイドわたしのシネマガイドわたしのシ  
テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像

## 人権無視の学校教育

野村 康子

何もかも規格化・統一された高校生活の中で唯一一つ残された自由！ 真赤なパンツをはくことでせめてもの抵抗を試みた息子に拍手する、と門野晴子さんがその著書に記したのは昨年のこと。だが、その最後の些も今や危機に瀕しているらしい。パンティ検査をしている女子高校があるとの話に「ウッソオー！」と叫ぶ私へ都内の女子校出身の友人が苦々しげに言った。「やりかねないよ、あいつら」。その後も半信半疑だったのだが、顕微鏡で生徒の髪の毛を調べる女子校の教師の大マジメな姿を見るに及んで、友人の言葉が決してオーバーでないことを知った。

この学校では、入学式当日、新入生全員の正面・後姿を写真に撮り、この時登録されたヘアスタイル以外は許されず、天然パーマの場合は、頭髮証明書携帯を義務づけられる。

一日二回流される「君が代」に授業中でも一斉に直立不動を強制する学校、奔放な子供たちの動きを一切許さず粗暴にどなつて調教する教師、朝練、放課後練習とクラブ活動で子供を一日中拘束する学校、繰返し一つの歌を歌わせ生徒相互の話し合いの時間や場所を奪う学校、そして横行する教師の生徒への体罰——これらはすべて「非行をなくすため」なのだ。

こんな中でその体制に異議を申し立て、それを行動に移すのは命がけことになる。

例えばゼッケン着用が校則の公立小学校で、一人それを拒否



は、あれをどんな脚本に仕上げたのか。映画はテレビを超えたのか。どんな観客が集まり、どんな反応を示すのか。それを知りたくて、私は映画館に入ったのです。

冒頭に書いた映画の導入部分。暴走族の各集団が夜の街を疾走し、暗海埠頭に参集するシーン。心の通じた父娘を乗せたピシクの自転車、明け方、わが家をめざして帰っていくロングのショットなどは、お茶の間用のテレビでは出せない迫力でした。硬直した対応しかできない学校の教師、小市民的な安寧のみを、後生大事に抱える隣人の描き方もおもしろかった。

非行グループからぬけるためのリンチを受ける娘を救おうとかけつけた父親が、どれほどいためつけられても無抵抗の姿を見て、「引き上げる」と合図したボスの少女の瞬時の表情が美しかった、とわが娘は言い、夫も同意するのです。

私が映画を見て考えこんでしまったのは、「書く」ことの問題性でした。死闘ともいえる二日を、書かずにいられたかった親には十二分の共感を抱きながらも、なまなましいトラブルを書くことの危険性でした。ヒットの予感さえあれば、テレビに映画に作り上げられる恐ろしい時代であるだけに。ものを書く人間のほしくれとしての自戒を飲み下しながら、一人の少女の魂のふるえに、想像力すら働かせられなくなっている、自分を含めた大人の貧しさを恥じるのです。

それにしても、「この子を悪魔とは呼ばないでください」の宣伝文句はひどすぎる。どぎつい言葉にひき寄せられる私たち、よほど用心しなければ……。

わたしのシネマガイドわたしのシネマガイドわたしのシネマガイドわたしのシネマガイドわたしのシ  
テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像テレビ残像

している男の子の場合。ゼッケンなんてカッコ悪い、アホらしいとお菓子を食べながら明るくインタビュに答えていた少年の言葉が突然乱れた。少年は「いやや、もう学校へ行くの」「どうするか迷ってる」とつぶやき、顔を両手で覆い長いこと沈黙した。

やがて彼は顔を上げると、「おじさんの小さい時はつけてなかったんでしょ？ 今はどうしてつけてくの」とインタビュアに問うた。「なんでだろうね。先生にきいてみたら」との返事に少年は再びうつむいて黙りこんだ。まだ十歳にもならない少年の顔に学校や教師への激しい不信の念と絶望感が浮かんでいた。自らの尊厳を侵されまいとする決意と圧倒的な外的な圧力との軋轢に苦悶をみなぎらせる少年。

「生徒の自由に鈍感だ」ということは先生自身の自由も無くすることだ」とレポーターの保坂展人さんが言うように、教師に対する管理も又、陰に陽に強化されている。とにかく目立つことは「集団の和」を乱すとして排斥され、少しでも変わったこと、面白いことをやれば「反抗分子、危険分子、アカ」のレッテルが貼られ、学級通信さえ出せなくなりつつある。「ゆとりの教育でなくてゆうと、おりの教育ですよ」。一人の若い教師が自嘲していた。ローラー作戦はそこまでできているのだ。

学校教育の現状を鋭く告発し、その再生の途（こっちは少々ワンパターンだったが）を模索した超真面目大作。どこで放映されたと思います？ あのイレブンPMなのですよ。

（非行のない時代は良い時代か①／③／今ときこんな学校があったのか／いま学校に教育はあるか 五夜連続、NTV）



## 言わねばならぬこと

半田 たつ子

息をのむような事件が、国の内外で続発した。'83年だった。'84年を迎えようとする時点で私はいったい何を書くことができるのか。

年賀状を書くため、「We」誕生前にいただいたお励ましの便りの束をほじめて、ていねいに読んだ。過ぎ去った日々への感傷とともに、私がしてきたことはこれでよかったのか、省みてじくじたる思いを抱く。

'82年初冬、お世話になった方たちに、私は次の文章で始まるお便りをお送りした。

「We号が船出して九か月。荒波に漕ぎ出す小舟にたとえた出帆の日の昂ぶった気持が嘘のように、おだやかな海に心楽しい航海が続けることができました」。

しかし、'83年は小舟が湾の外に出たことを思い知らされた年でもあった。波濤を越えてといえどカッコよすぎるけれど、荒浪に抗いながらも、We編集部は健在であり、少しづつ力を蓄えてきたと書けることはうれしい。

ただ、私には今「書く」ことへの逡巡がある。'82年十二月号「波」への反響に添えて、'83年二・三月号「波」を書いた。ある新聞記者の方から「これはまずい。あなたは編集者に徹してほしかった」と言われた。

私が敬愛する方が、本誌と願うところをつにする雑誌を編集していらっしやる。その雑誌でも、熱心な読者の方たちが「読む会」や「集い」を開いている。集いの報告の中に、編集者よもっと前面に出てとの要望に対し、その方は「ヒットラーはいらない」と答えた、とあった。

「編集者は書くな」との戒めがあるということを知っているながら、前の雑誌の時を含めて、私は十五年書き続けてきた。「言いたいこと、言わねばならぬと思うこと」をかかえて書かずにはいられなかった。本誌では二頁の限界をかこちながら……。

読者アンケートに「波」の頁をふやして、

とのご要望もあった。でも、私は今揺れている。

十月十五日の朝日の社説は、孤高のジャーナリスト、桐生悠々の言葉をひいて、「書く勇氣」について記していた。

「言いたいこと、言わねばならないことは区別しなければならぬ。言わねばならないことを言うのは、多くの場合、犠牲を伴うが国民としての義務の履行である。」

私は言いたいことを書いてきたが、言わねばならないことであつたかどうかは、怪しい。「言わねばならないこと」と言い切れる自信が羨ましい。それほど、今は「言わねばならないこと」が見えない、見えなくさせられている時代だと思う。だからこそ、私は「ほんとうにそうだろうか」「何かおかしい」という感覚を大切にできたつもりだ。そういう感覚をときずまずには、どうしたらいいのだろう、ということだけは考え続けてきた。

けれども、せっかく掲げたテーマでありながら、ほんとうに書きたいことを書かなかつたこともあった。時流に乗った考え方には、距離をおきたい私は、声高に語られていることのすべてを、ほんとうにそうなのだろうかと疑うのが常だ。でも十分に書き込むスペー

スを持たないから、誤解されるであろうことが初めからわかっているのに書けなかったことが幾つもある。それでよかったのだろうか。「言わねばならぬこと」を書かないくらいなら、むしろ書かないほうがよいのだろうか。

こんなことを、とつおいつ思い迷っている時、青木やよひ編『フェミニズムの宇宙』（新評論、シリーズ〈プラグを抜く〉No.3）を読んだ。強い知的刺激を受け、共感を覚えた。一九八四年に際して、すべてのフェミニストに読んでほしいと願う。

青木さんは、編集意図の文章をこう結んでいる。

「いま世界の女たちがけんらんとくり展げている『フェミニズムの宇宙』からのメッセージを、この本を通して受けとっていただければと願っている」。

いま世界の女たちがけんらんとくり展げている——なんと魅力的な言葉だろう。日本で女の運動が膠着したかにも見える今、どうして読まずにいられようか。

女の問題は、産業社会がもたらす暮らしの荒廃、人間関係のゆがみとからみ合いつつ増幅しあっている。女の問題だけを解決しようと思まいても、それだけではどうにもならぬ

難しさがある。家庭科の男女共修運動は、女の平等とともに、暮らしを問い直し、教育をつくり変えることを目指すところが、ユニークだったのだが。そして、もちろんWeの主張も。

アルビン・トフラールが言うように、私たちは第二の波（産業社会）の中での問題解決を迫られつつ、同時に産業社会に挑戦する第三の波をかぶっている。この困難な状況をどう切り拓くのか。

「先進国」から押しつけられる「開発」によって、伝統的な暮らしや環境の破壊にさらされている第三世界の女たちが、先進国の女に生き方そのものの反省を迫る。エコロジカル・フェミニズムが、現行の教育や労働や暮らしのあり方そのものと、それを支えている価値観や人びとの意識の深層までを問う。——だからこの本にはタイ、インド、イラクなどアジア地域の、インディアン、黒人など北米の少数民族の、女たちの詩をのせ、それが魂をゆさぶる。

秋山さと子氏の「アニメ・アニムスの世界」は実におもしろく、青木やよひ・山本哲士、（司会）栗原彬氏らの座談会は、みごとにその意見のすれちがいからも、考えさせ

られるものは大きい。だが、なんといっても圧巻は「女性性と身体のエコロジー」という青木やよひ氏の大論文である。精緻な理論とかぐわしい感性をないまぜたこの労作は、読み手によつては異論があるう。〈プラグを抜く〉通信No.3で、田中和子氏は、「青木さんはデイファレンス・フェミニスト、私はノンセクシスト・フェミニスト」として、「終局的に目指すものは同じだということもおおいにありうるとは思うけど」という表現をしている。一九八四年、この二つの立場は、私たちが掘り下げていく課題となるであろう。

それにしても、青木さんがこの論文を書いたのは、それが「言わねばならないこと」だったからだろう。すごい、と思う。青木さんには遠く及ばないけれど、私は、マス・メディアの表層にあらわれている思想や知的潮流のまやかしに幻惑されることなく、自分の生活の手ざわりの中で、わかること、言えること、何かおかしいと思うことを出発点として、自分を徹底的につきつめていこう。それを一九八四年を迎える心構えとしたい。

（スペースがないままに、説明ぬきでカタカナ語を使ってしまった。ぜひ『フェミニズムの宇宙』をお読みいただきたい。）



# 〈We 名古屋の会より〉

十月号の特集が「今、教科書問題を問う」だったこともあり、まず「教科書問題とは何か」を基本的に学ぼうと、荻野克典先生をお招きしてお話をうかがいました。

検定とは何なのか？ 検定の歴史、教科書裁判について、教科書の採択の問題、侵略・進出問題、自民党や政府・財界、一部学者グループによる教科書攻撃などについて、ていねいに説明していただき、今までバラバラにしかとらえられなかった教科書の問題が、あざやかに一つの道へとつながっていくように感じられました。

そして最近の「公民」の教科書の記述を見せていただき、その書かれている内容の素晴

しさに目を見はるとともに、十八年間にも及ぶ教科書裁判のもたらしたものの大きさを感じました。それ故に、ここ二、三年の「疑問だらけの中学・教科書」をはじめとする教科書攻撃も理解できました。

名古屋では、毎月第三土曜日に名古屋市勤労婦人センターで読者会を開いています。ぜひご参加下さい。

連絡先 412・9583 宮崎 (E・T)

# 〈We 横浜北部の会より〉

十月十五日(土) 一時半より、東横線日吉駅前の喫茶店で三回めの集まりを持ちました。数日前に読者名簿から近隣に住む読者を調べ参加してもらおうと呼びかけましたが、出席者は八名。世話役の植垣先生を中心に、毎回参加するメンバーに加えて今回は祐天寺から和田さん(若くてフレッシュな)が参加して下さり、より活気のある会になりました。

まず自己紹介からはじまり、夏季フォーラムのことを少し話しあい、次にいつものとおり、八・九月号「老いを考える」のうち「呆け老人とストローク」を順番に読みあわせをしてから老人問題について皆で話しあいました。「ストローク」という専門用語に話題は集中し、これは老人だけでなく、子供にも通

用することだと小学校の先生や保育園の先生から意見がでました。相手を一人の人間として特別扱いせず、その人格を認めることなのではないかと考えさせられました。

十月号の「今、教科書問題を問う」では、長谷川孝さん(Weの視点でおなじみの)の書かれた「教科書はなくても勉強はできます」「あらはん」(八二年八月号)を皆で読みながら、広く学校教育について意見を出しあいしました。

いつもながら予定の時間はオーバーし、時の経つ早さを思い知らされる半日でした。この次は十二月十七日(土) 一時半から、日吉地区センターで予定しております。

(小川裕子)

〈Weの会カレンダー〉右記の他地区のご案内

1・7 湘南・三浦 藤沢市民会館 二時

(0467・31・0377 塚越)

1・14 城北 十条地区センター 二時

(914・6053 川名・夜間)

1・22 武蔵野 御殿山C・C 一時半

(0422・51・9461 山田)

1・28 江東 江東区民総合センター 七時

(682・6401 松本)

# あんでな

## ★問題児の出席停止一校長裁量に任す★

校内暴力などを起こす「問題児」を学校教育法26条に基づいて出席停止とする場合の措置基準作りを検討していた文部省は、①出席停止命令権の発動を現場校長の裁量に任せる②出席停止時の保護、指導先は親元を原則とする一などの基準を高石邦男・同省初中局長名で12月に全国の教育委員会へ通達する。同省が出席停止措置基準を通達するのは戦前、戦後初めて。

公立小、中学生には懲戒処分としての停退学は認められておらず、学校教育法26条はその例外として性行不良の子供について「市町村教委が他の児童に教育の妨げがあると認めるときはその保護者に対して児童の出席停止を命ずることができる」と定めているが「問題児切り捨てのススメ」になりにかねないと、同条文の運用基準はなかった。

しかし、最近の校内暴力多発をきっかけに行った今年の全国実態調査（8・9月号参照）で、学校が自宅謹慎や校外研修名目で事実上の違法な出席停止措置を行っているケースの激増が明らかになったため。

（毎日、10・27付）

## ★少年非行問題に関する世論調査★

総理府の「少年非行問題に関する世論調査」の結果が10月30日まとまった。同調査は、少年非行問題全般を扱った初めての本格的なもの。7月に成人5000人を対象に実施、回収率79.7%。

最近の少年に対する考え方や行動を「理解できる」とする人51%、「できない」42%。

少年非行は「深刻な問題だ」とする人87%「深刻でない」9%。身の回りの少年非行について今後「増える」と見る人34%、校内暴力が「深刻だ」90%、「深刻でない」6%。

非行の原因は「家庭」46%、「少年自身」25%、「社会の環境・風潮」17%、「学校」2%。家庭の問題点としては「幼少期のしつけが不十分」52%、「親の甘やかし」43%。

家庭でのしつけはどうあるべきか、では「何事によらず厳しく」9%、「子供を理解しながら信念に従って厳しく」69%。しかし、実際にやっているしつけでは「厳しい」5%に対し「甘い」70%。子供のことで悩

んだり、困ったことがあるかどうかでは、母親44%、父親36%。（10・31付）

## ★精神衛生調査、厚生省が修正★

患者のプライバシーを侵害するなどとして反対が強まっている「精神衛生実態調査」について厚生省は10月27日、調査方法を大幅に変更、来年2月に調査を実施する。

改正点は①調査に当たる医師が事前に患者か家族の同意を得る②医療機関を抽出しその中から対象患者を選定する③調査対象から「成績不良、怠学、無断欠勤、未熟な人格」など約2割を削減④調査項目から「離婚の有無」など約2割減らすなど。

しかし、依然として反対を打ち出している団体も少なくない。

同調査は、同省が精神衛生行政に反映させるため10年ごとに行っているが、前回は東京など5都府県の反対で事実上調査ができなかった。（10・28、11・18付）

## ★「障害児を普通学校へ」全国大会★

'79年の「養護学校義務化」以来、行政側は就学予定児の健康診断で“ふるい”にかけた障害児を養護、ろう、盲などの障害児学校に入学させる傾向が強まった。「障害児を普通学校へ、全国連絡会」（代表世話人・河原一男長崎大学教授）は11月6日、東京・総評会館で初の全国大会を開催。全国の障害児を持つ親、養護学校教師など450人が参加。普通学校入学を希望する親と障害児の“隔離”をはかる教育委員会との交渉や地域の中で連帯と自立をめざす全国10支部の活動報告、障害児の就学問題についてのシンポジウムなどが開かれた。

「障害児の問題を突破口に、公教育全体を見直す広い視野が必要だ。障害児を受け入れられない教育現場は健常児にとっても不幸」との意見も出され、大会は「障害児の就学権は行政ではなく親の側にある」とのアピールを採択、閉会した。（11・10付）

## ★'83年度国民生活白書★

塩崎経済企画庁長官は10月28日、閣議に'83年度国民生活白書（副題＝ゆとりある家計と新しい家族像を求めて）を報告、了承された。二章から成り、第一章は「進む家計の構造変化」、第二章は「日本の家族の現状」で家族に初めて焦点をあて、様々な問題を提起している。（10・28付）



(神奈川県在住C・F)

で、楽しく教えています。誰でも学ぶこと、物をつくることは楽しいことなのですね。そして自分の能力を見出し、自信がつくことは生きる姿勢も積極的になるものです。

いきなりロングドレスとは、無謀のようですが、グループの中の洋

裁の心得のある二、三人と計画を立てて、実現させるべく張切っております。教え合いながら、少しずつ形ができてゆく過程は、とてもすばらしいコミュニケーションだと思っています。日ごろのコーラス

活動のチームワークが効を奏し、不可能とさえ思われたドレス作りも着々と進行してゆく様子に、初めての人たちも、信じられないと喜んでいきます。教師時代に培われたものが、こんな形で役立つことと

（北上市 押切郁）

◆We江東の会は、他のWeの会と違うんだろ？うなあ、とつくづく思います。購読していない人たちが参加しながら、知らないうちに、次々と定期購読していく。私たちが一月に初めて集まった時にも、実はまだ申し込んでないの、という人もいたのです。

でも、こういう広がり方もあったよ！  
てよいと思うのです。まず、何らかの「飢え」を持っている人が、話のできる場を持って、そして半田さんやWeを知って、それなら誰かでもよいからと思う。そういうのって、無理がなくなつて好きです。江東の会でWeの人に会えること、今は楽しくつてしょうがありません。新しい人が来る時など、どういふ人かなあ、なんてうれしがつたり、不安がつたり……。



10月号の「告知板」にありました“Food for You”の発行所 Ginn and Company は、ここアセンズ市でも、ミドルスクール六年

教師のサラリーや質の低下の問題が、とりわけ'84年の大統領選挙を控えて、注目の対象になり教育が最大の論点といわれています。

十一月十九・二十日が文化祭とか、そちらにもおじやますることになるかもしれません。家庭科の先生方へのおみやげ、買ったものは何もなく「今津娘」「うむうむ」と“*We*”。*We*に関心を示され、次号から注文したいようなことをおっしゃいました。*We*にも登場していただきます。(尼崎 西本和代)



# 新潟・氣經に学ぼう日本国憲法

改憲論者中曾根首相の登場で憲法論議に  
ぎやかになったが、市民グループ・リーダー  
らが講座を開催する。10月22日「わたしたち  
にとって憲法とは」、29日「戦争放棄と日本  
の平和」、11月12日「国家と国民」、19日「人  
間の平等と尊厳」。主催者は「平和を作る小  
さな手の会」他。  
(新潟日報、10・14)

## ・夫権落ち染える暴力

県婦人相談所は五十七年度の婦人の相談、  
保護状況を集計した。それによると件数は百  
件で横バイ状態。うち七割が夫との関係、そ  
の半分が夫の暴力によるもの。知的レベルが  
高いと思われる男性の陰湿な暴力が目立つ。  
相談員は「女権の伸長とうらはらに夫の尊厳  
が落ち、あせりや劣等感から来る病的な暴  
力」と分析している。

(新潟日報、10・20、山口久子)

## 千葉・千葉市で「女性の会」が

八日、千葉市で「田中判決10・12政治倫理  
の確立を求める県女性の会」(代表・中嶋拉  
子)が会結成のアピールを出した。「お金や

物が優先する社会で少年非行は低年齢化し、  
減税も行われず、福祉は後退する。この背景  
や原因は田中元総理が居座っているから」  
と。千人のグループに発展させるという。

(毎日、10・9)

## ・流山市立北部中の国旗掲揚

十一日の県議会本会議で、市川福平議員  
(社会)は同中では国旗掲揚・降納の際、生  
徒はどんな場合でも直立不動の姿勢をとるこ  
とにしている。これは学校教育上行き過ぎで  
はないかとたたきだした。今井教育長は「同中  
は二十年前から学校側が主体的に取り組んで  
おり、よろしいのではないかと思う」と答弁、  
同議員の指摘をつっぱねた。(朝日、10・12)

## ・広がる反対運動の輪

船橋市で緑のおばさん全廃に反対している  
「子どもの生命と教育を考える市民の会」が  
十五万人署名運動をスタートさせた。シンポ  
ジウム、千人規模の総決起行動など幅広い運  
動を展開していく。また、緑のおばさんの解  
雇を市教委に撤回させるため、地位確認請求  
の訴えを起こし法廷でも争う。

(朝日、10・19、木田直子)

## 石川・男女平等雇用など討議

日弁連人権擁護大会は二十八日、三テーマ

で開幕。「平和と人権」「原子力開発と環境保  
全」「男女が平等に働くために」のうち「平  
和」「男女平等雇用」は初めてのテーマで会  
員、一般合わせて千二百六十八人が参加。

「再び、戦争を起こさない証拠に、どうして  
も原爆被爆者に対する援護法の制定を急がな  
ければならない」「基本的に原発は、人類の  
生存と相いれない。たとえ生活レベルを下げ  
ても運転をとめるべき」「男女雇用平等法案  
づくりが労働基準法の女性保護の規定とセッ  
トで進められようとしている。見過こせば、  
女性の健康が損なわれたり、家庭の崩壊、低  
賃金再編成につながる」などの意見が出た。

(北陸中日、10・29、三石久江)

## 東京・反対や署名抗議文

米空母の艦載機が横田基地で行う夜間発着  
訓練に反対する昭島市内の市民団体が市民連  
絡会を結成、署名運動を進めるほか、米大使  
館、首相官邸に抗議文を出すことなどを決め  
た。艦載機の訓練は、一、二、五、十月と行  
われ、八八を記録した。四月には基地周辺  
の六市町も中止を求める要請書を外相、防衛  
庁長官に提出している。

(朝日、10・29、仲田香代子)

## ・労基法の女性保護規定



総評の山梨利子婦人局長は「日 労働省が準備を進めている男女雇用平等法（仮称）について「女性の深夜業禁止の撤廃には反対だが、時間外労働の制限と休日労働の禁止には男性も含めた労働時間の短縮や週休二日制の実施を前提に見直してもいい」と見解を明らかにした。

日弁連は、佐藤裕副会長らが労働省を訪れ「母性保障を前提としてあらゆる差別を禁止し、権利侵害に対する救済と、制裁などの措置を含む男女雇用平等法のすみやかな制定」を求めた。これは金沢市で開かれた大会決議に基づくもの。

（朝日、11・9）

#### ・女性だけで座り込み

雇用平等法の法制化を求めて十日、午前十時から、労働省正門前で、審議がヤマ場となる十二月二十四日まで連日午前十時から午後五時まで延べ約二千人が座り込み行動をする。総評の呼びかけ。

（東京、11・10、三橋典子）

#### ・都立全養護学校に重度学級新設

高校への進学率が九割を超える中で心身にハンディキャップを背負った生徒たちの入学希望者も増えており、都教育庁は来年度から、都立十六の精神薄弱者養護学校高等部の

すべてに重度学級を新設することを決めた。五人の生徒を教師二人で教える。父母や関係者の期待は大きい。

（毎日、11・14）

#### ・OAの基礎 職業科全校の教科に

急激なOA化が進む中、都教育庁は来年から三カ年計画で都立商、工、農業科高校五十四校全体に「パソコン教室」を設置することに決めた。専門技術者養成ではなく、慣れ親しむのが目的で、全国に先がけての試み。将来は普通科高校への導入も考えており、OA機器は高校生「必修」の時代がきそう。

（毎日、11・20、編集部）

#### 広島・中・四国の女子大生の喫煙四・四%

広島大学保健管理センターが、中国・四国十九大の協力を得て行っていた「女子学生の喫煙」の調査結果がまとまった。対象は中・四国の国・公・私立二十大学から選んだ四千七百二十八人の女子学生。現喫煙率は四・四%。常習喫煙率は二・四%。東京都内女子学生の現喫煙率は二〇・六%。東独の女子学生は三五%。全国の二十歳代女性の喫煙率は一七・四%。これらに比べると驚くほどの低率。

（読売、9・19）

#### ・インドは、核、持っています

全校保有国指導者は被爆地広島を訪問し

てと手紙をはず通電を綴じている。世界を動かす指導者を広島に招く市民の会」に二十七日、インドのガンジー首相から「私どもは核兵器を持っていないし、持たないと表明したこともない」と核保有国でないと明言する返書が届いた。インドは米ソ英仏中各国とともに六番目の核保有国とされているだけに「ガンジー書簡」は論議を呼びそう。

（読売、10・28）

#### ・「原爆に夫を奪われて」教科書に収録

建物疎開に動員された夫たちを原爆に奪われ「原爆未亡人村」といわれる広島市安佐南区の農婦らの体験を聞き書きした『原爆に夫を奪われて―広島農婦たちの証言』（神田三亀男編、岩波新書）が検定前の高一国語教科書（三省堂）に収録されている。検定結果が出るのは来年三月。すんなり通るかどうかが心配。

（中国、11・5、国重美恵子）

#### 熊本・母親がまず勉強

子供の本について、母親たちで勉強しているというユニークな「子どもの本の講座」（熊本子ども本の研究会主催）が五回の例会を重ねた。会員は約百二十人。今回は「太郎コオロギ」「一つの花」だった。

（熊本日日、10・26、中山そみ）



◆11月20日(晴)

日展の最終日、午後上野へ。日曜日とあつて満員。いくつもの部屋を巡って、くうち遠くから子供の泣き声が聞こえたり、とぎれた声。ついにその声の部屋に入った。この声には覚えがある。育児期に何度も何度も聞かされた声。増刊号で親の学習と子の保育をめぐる意見を校正していた折から、観客や母親の声が聞こえてくるような気がした。私は二歳半くらいの男の子を抱いた。若い母親の背には赤ちゃん。前にやっていたので日本画だけでも観たかったの、と。子を抱かなくなつてから久しいけれど大丈夫だった。帰りにアメ横の人混みの中で買ったみやげに、子供たちはとびつく。私の育児期への悔恨に

(中野)

◆増刊号「学校はよみがえり得るか!」もうお読みになりましたか? 一回り大きな活字、写真もたくさん。手前みそではありませんが、なかなかの出来具合です。83年はこの増刊号で締め、84年の幕開けは、それを引き継ぐことから始まります。ぜひ御一読を! 一冊700円(送料共)。

(馬場)

◆12月号で、おずおずと四月号からの値上げをお願いしました。毎日振替が届きます。優しいメッセージが添えられて。なんとありがたいことでしょう。

◆ある読者の方から、Weは予定購読者をどの位と考えるのかと尋ねられ、もちろん万! と答えました。するとその方は、読者拡大のために、いまの質を変えないで、つまらなくなるかな、と言われたのです。small is beautiful でしょうか。でもやっぱりお仲間が多いほうがうれしいですよ。

◆プレゼントはWeに決めました、とおっしゃる方もあります。頭を下げるのみです。84年もどうぞよろしくお願ひします。

◆次号のテーマは「住むということ」です。(半田)

## Wk の告知板

◆家庭科の男女共修をすすめる会の集会。1月21日(土)1時半-4時半、新宿・婦選会館。テーマ「家庭科があぶない」、講師一番ヶ瀬康子、芦谷薫、森口藤子諸氏。今共修運動を盛り上げなければ悔いを千載に残すかも。会員外の参加も大歓迎。

◆たまたま水俣病患者とともに環境庁すり込み闘争に参加し、くやし涙にくれた若者が、5年後映画「無辜なる海」を完成。

仲間と現地に住みついたものの、初めは重い宿題でも負わされたような、映画どころではなかったという。8か月後ようやくカメラが回る。3万フィート(約15時間)を1時間45分に編集し、世に問うた。悠々と潮を満たす不知火海—無辜なる海と無辜なる民を侵す毒。人間がこれをたれ流した。(フィルム工房 〒270 松戸市大谷口444 ネゴヤ荘202, Tel. 0473-44-6741)

新しい家庭科— Wk

Vol. 2 No. 10 1983年12月20日発行  
¥500  
編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14  
☎03(326)1380 振替 東京6-59867  
印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112 文京区春日1-6-7

引き続きWeの仲間になって下さい  
Weの仲間をふやして下さい

——Weの取り扱い店一覧—— お近くの書店に、ぜひお声をかけて下さい (11月24日現在)

旭川	富貴堂 京栄堂書店	＜杉並＞	木風舎 新愛書店 ブラサード書店 たつみ書房 みどり書房	名古屋	日比野泰文堂 谷口正文館書店 稲沢文光堂 白樺書房西店 白揚書店 竹中書店	神戸	ヒカリ書店 日進堂 明文館 文進堂書店 宣文堂書房 姫路丸善 大利昭文堂 弘栄堂 今井MC本店 今井書店 武田書店 やまびこ書店 いづみ書店
砂川	いわた書店	＜新宿＞	模索舎 ブックスミヤ 伊野尾書店 ジョキ	江崎	青雲堂 文教書店 耕文堂 鈴彦書店 宝島 栗山書店 島谷書店 新潟書房 覚張書店 清明堂書店 清文堂 笠原書店 新光堂書店 吉野屋書店 うつのみや セールスセンター	尼崎	姫路屋 岡山子 出雲島 竹原 福山 福山口 松山 観音寺 徳島 土佐山田 北九州
島根	矢野書店 カノウ書店 東山堂 みみずく書房	＜渋谷＞	すべーす・えいがさい	豊田	鈴彦書店 宝島 栗山書店 島谷書店 新潟書房 覚張書店 清明堂書店 清文堂 笠原書店 新光堂書店 吉野屋書店 うつのみや セールスセンター	福山	草間書店 岡山書店 白藤書店 去来社 タカハシ書店 雄徳堂徳野書店 依光書店 北九州書店 白石書店 丸山スコレ店 日新堂 文光堂 紅屋書店 高校生協 三章文庫 片桐書店 スズキ書店 球陽堂
路	カノウ書店 東山堂 みみずく書房	＜世田谷＞	やまべ書店 江崎書店 かじか書店 ＜北＞ 愛京堂 業平堂 第九書房 国府書店会 青野書店 東海書店 石井書店 オリオン書房	長岡	清文堂 笠原書店 新光堂書店 吉野屋書店 うつのみや セールスセンター	松山	去来社 タカハシ書店 雄徳堂徳野書店 依光書店 北九州書店 白石書店 丸山スコレ店 日新堂 文光堂 紅屋書店 高校生協 三章文庫 片桐書店 スズキ書店 球陽堂
盛岡	こどもの本の店 ブーの家 八重洲書房 ポラン 萩書房 高山書店 ホビット館 加賀屋書店 八文字屋 岩瀬書店 西沢書店 深川第二書店 十字屋書店 大槻店 川島朝日堂 初心堂 アルプス社 近江書店 ツルヤB.C 岩瀬書店 新井書店 文泉堂 ブックスサトウ	＜練馬＞	かじか書店 ＜北＞ 愛京堂 業平堂 第九書房 国府書店会 青野書店 東海書店 石井書店 オリオン書房	富山	清文堂 笠原書店 新光堂書店 吉野屋書店 うつのみや セールスセンター	観音寺	タカハシ書店 雄徳堂徳野書店 依光書店 北九州書店 白石書店 丸山スコレ店 日新堂 文光堂 紅屋書店 高校生協 三章文庫 片桐書店 スズキ書店 球陽堂
仙台	こどもの本の店 ブーの家 八重洲書房 ポラン 萩書房 高山書店 ホビット館 加賀屋書店 八文字屋 岩瀬書店 西沢書店 深川第二書店 十字屋書店 大槻店 川島朝日堂 初心堂 アルプス社 近江書店 ツルヤB.C 岩瀬書店 新井書店 文泉堂 ブックスサトウ	＜国分寺＞	青野書店 ＜国立＞ 東海書店 石井書店 オリオン書房	福井	ひまわり書店 じっぷじっぷ 吉川隆文堂 春江書店 品川書店 海老山書店 尚古堂 旭屋書店本店 ユーゴー書店 増田書店 樋口書籍 米原十六堂 西村書店 タミーB.C ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	徳島	依光書店 北九州書店 白石書店 丸山スコレ店 日新堂 文光堂 紅屋書店 高校生協 三章文庫 片桐書店 スズキ書店 球陽堂
秋田	ホビット館 加賀屋書店 八文字屋 岩瀬書店 西沢書店 深川第二書店 十字屋書店 大槻店 川島朝日堂 初心堂 アルプス社 近江書店 ツルヤB.C 岩瀬書店 新井書店 文泉堂 ブックスサトウ	＜町田＞	久美堂 文教堂 有隣堂 北野書店 早川書店 ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	奈良	海老山書店 尚古堂 旭屋書店本店 ユーゴー書店 増田書店 樋口書籍 米原十六堂 西村書店 タミーB.C ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂
山形	岩瀬書店 西沢書店 深川第二書店 十字屋書店 大槻店 川島朝日堂 初心堂 アルプス社 近江書店 ツルヤB.C 岩瀬書店 新井書店 文泉堂 ブックスサトウ	相模原	ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	東大阪	ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	熊本	球陽堂
福島	岩瀬書店 西沢書店 深川第二書店 十字屋書店 大槻店 川島朝日堂 初心堂 アルプス社 近江書店 ツルヤB.C 岩瀬書店 新井書店 文泉堂 ブックスサトウ	鎌倉	大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	和歌山	宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂
郡山	大槻店 川島朝日堂 初心堂 アルプス社 近江書店 ツルヤB.C 岩瀬書店 新井書店 文泉堂 ブックスサトウ	横濱	文教堂 有隣堂 北野書店 早川書店 ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	奈良	海老山書店 尚古堂 旭屋書店本店 ユーゴー書店 増田書店 樋口書籍 米原十六堂 西村書店 タミーB.C ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	熊本	球陽堂
藤岡	川島朝日堂 初心堂 アルプス社 近江書店 ツルヤB.C 岩瀬書店 新井書店 文泉堂 ブックスサトウ	川崎	北野書店 早川書店 ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	東大阪	ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂
前橋	橋生社 近江書店 ツルヤB.C 岩瀬書店 新井書店 文泉堂 ブックスサトウ	相模原	ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	和歌山	宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂
桐生	橋生社 近江書店 ツルヤB.C 岩瀬書店 新井書店 文泉堂 ブックスサトウ	鎌倉	大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	奈良	海老山書店 尚古堂 旭屋書店本店 ユーゴー書店 増田書店 樋口書籍 米原十六堂 西村書店 タミーB.C ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	熊本	球陽堂
水戸	和口 新井書店 文泉堂 ブックスサトウ	横濱	文教堂 有隣堂 北野書店 早川書店 ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	東大阪	ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂
浦和	和口 新井書店 文泉堂 ブックスサトウ	川崎	北野書店 早川書店 ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	和歌山	宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂
川口	新井書店 文泉堂 ブックスサトウ	相模原	ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	奈良	海老山書店 尚古堂 旭屋書店本店 ユーゴー書店 増田書店 樋口書籍 米原十六堂 西村書店 タミーB.C ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	熊本	球陽堂
上尾	黒田書店 比企文化社 山屋 前原かっぱ 元山書店 大和屋書店 岡田書店 多田屋 大杉書店 露書店 ビビビ 日成堂 書肆アクセス 三省堂本店 書泉グランデ 飯田橋書店 鈴木書店 寿文堂 池袋書店 柏木堂書店	相模原	ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	東大阪	ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂
東松山	比企文化社 山屋 前原かっぱ 元山書店 大和屋書店 岡田書店 多田屋 大杉書店 露書店 ビビビ 日成堂 書肆アクセス 三省堂本店 書泉グランデ 飯田橋書店 鈴木書店 寿文堂 池袋書店 柏木堂書店	鎌倉	大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	和歌山	宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂
和光	山屋 前原かっぱ 元山書店 大和屋書店 岡田書店 多田屋 大杉書店 露書店 ビビビ 日成堂 書肆アクセス 三省堂本店 書泉グランデ 飯田橋書店 鈴木書店 寿文堂 池袋書店 柏木堂書店	横濱	文教堂 有隣堂 北野書店 早川書店 ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	奈良	海老山書店 尚古堂 旭屋書店本店 ユーゴー書店 増田書店 樋口書籍 米原十六堂 西村書店 タミーB.C ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	熊本	球陽堂
船橋	前原かっぱ 元山書店 大和屋書店 岡田書店 多田屋 大杉書店 露書店 ビビビ 日成堂 書肆アクセス 三省堂本店 書泉グランデ 飯田橋書店 鈴木書店 寿文堂 池袋書店 柏木堂書店	相模原	ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	東大阪	ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂
松戸	元山書店 大和屋書店 岡田書店 多田屋 大杉書店 露書店 ビビビ 日成堂 書肆アクセス 三省堂本店 書泉グランデ 飯田橋書店 鈴木書店 寿文堂 池袋書店 柏木堂書店	鎌倉	大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	和歌山	宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂
津田沼	大和屋書店 岡田書店 多田屋 大杉書店 露書店 ビビビ 日成堂 書肆アクセス 三省堂本店 書泉グランデ 飯田橋書店 鈴木書店 寿文堂 池袋書店 柏木堂書店	横濱	文教堂 有隣堂 北野書店 早川書店 ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	奈良	海老山書店 尚古堂 旭屋書店本店 ユーゴー書店 増田書店 樋口書籍 米原十六堂 西村書店 タミーB.C ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	熊本	球陽堂
鎌谷	岡田書店 多田屋 大杉書店 露書店 ビビビ 日成堂 書肆アクセス 三省堂本店 書泉グランデ 飯田橋書店 鈴木書店 寿文堂 池袋書店 柏木堂書店	相模原	ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	東大阪	ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂
佐原	多田屋 大杉書店 露書店 ビビビ 日成堂 書肆アクセス 三省堂本店 書泉グランデ 飯田橋書店 鈴木書店 寿文堂 池袋書店 柏木堂書店	横濱	文教堂 有隣堂 北野書店 早川書店 ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	和歌山	宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂
市川	大杉書店 露書店 ビビビ 日成堂 書肆アクセス 三省堂本店 書泉グランデ 飯田橋書店 鈴木書店 寿文堂 池袋書店 柏木堂書店	相模原	ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	奈良	海老山書店 尚古堂 旭屋書店本店 ユーゴー書店 増田書店 樋口書籍 米原十六堂 西村書店 タミーB.C ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	熊本	球陽堂
東京	露書店 ビビビ 日成堂 書肆アクセス 三省堂本店 書泉グランデ 飯田橋書店 鈴木書店 寿文堂 池袋書店 柏木堂書店	横濱	文教堂 有隣堂 北野書店 早川書店 ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	東大阪	ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂
＜千代田＞	ビビビ 日成堂 書肆アクセス 三省堂本店 書泉グランデ 飯田橋書店 鈴木書店 寿文堂 池袋書店 柏木堂書店	相模原	ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	和歌山	宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂
＜文京＞	飯田橋書店 鈴木書店 寿文堂 池袋書店 柏木堂書店	横濱	文教堂 有隣堂 北野書店 早川書店 ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	奈良	海老山書店 尚古堂 旭屋書店本店 ユーゴー書店 増田書店 樋口書籍 米原十六堂 西村書店 タミーB.C ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	熊本	球陽堂
＜豊島＞	池袋書店 柏木堂書店	相模原	ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	東大阪	ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 なにたに書店 香里書店 コーベックス 西武 松香堂書店 好文堂 オデッサ書房 大久保京都書院 恵文社神足店 宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂
＜杉並＞	柏木堂書店	横濱	文教堂 有隣堂 北野書店 早川書店 ブックス上清 たらば書房 大船書房 相模大野 相模書房 豊元書店 東松堂 内田屋書房 みどり書店 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 あつみ書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	和歌山	宇治書店 流泉書房	大分	片桐書店 スズキ書店 球陽堂

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入ができます。お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由とご指定のうえ、ご注文下さい。